昭和57年12月15日号（毎月2回1日、15日発行）第25巻・第24号　通巻574号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1982
24
12.15.

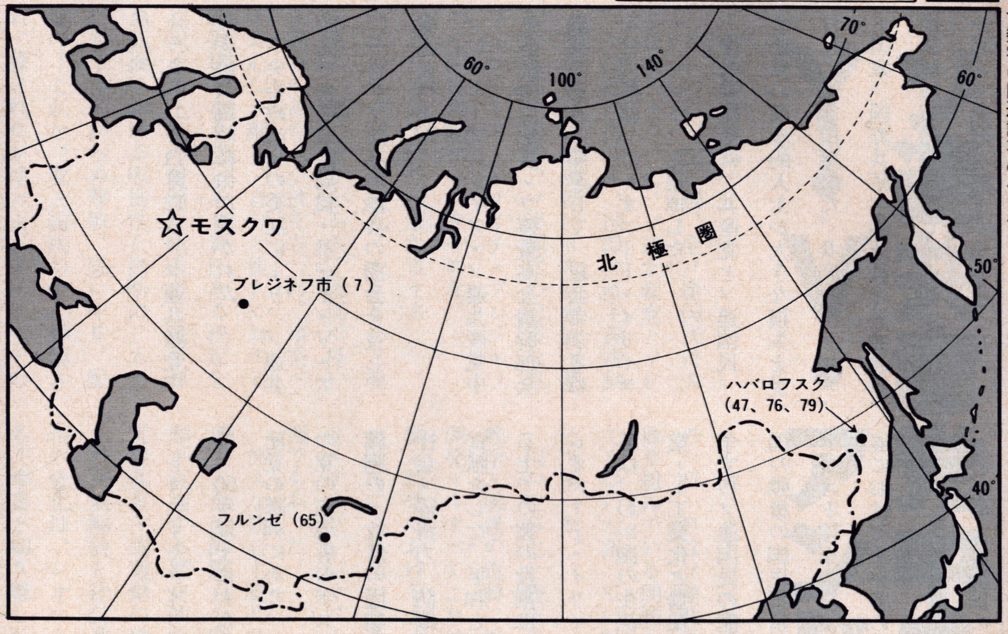


ソ連邦結成60周年

第24号　1982年12月15日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2―1―1　電話(583)4224
(本誌についてのお問合せは広報部へ)

広報部　東京都品川区東五反田3―9―13
郵便番号141　電話(03)447―3536(代表)
振替口座東京9―122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　東京都千代田区西神田2―7―12　電話03(263)2811　振替口座東京0―13581
(加入者名＝新時代社)

ソ連共産党中央委員会臨時総会に関する公報

一九八二年11月12日、ソ連共産党中央委員会臨時総会が開かれた。

中央委政治局の委託により、ソ連共産党中央委政治局員・書記Y・V・アンドロポフ同志が総会の開会を宣し、演説を行った。

L・I・ブレジネフ・ソ連共産党中央委員会書記長・ソ連最高会議幹部会議長の逝去に関連して、総会参加者は1分間黙禱してレオニード・イリイチ・ブレジネフを追悼した。

中央委総会は、共産党とソ連国民、全世界の進歩的人士が大きな損失を受けたことを指摘した。共産党、ソビエト国家、国際共産主義運動と労働運動、民族解放運動の傑出した活動家、平和をめざす熱烈な闘士が世を去った。

レオニード・イリイチ・ブレジネフは、50年以上にわたってレーニンの共産党の隊列にあり、そのうち18年間この党の指導者のポストにあって、その隊列の一枚岩の団結とソ連の政治力、社会・経済力、防衛力の強化に多大の貢献をした。平和と国際安全を強化する上での彼の役割はきわめて大きい。レオニード・イリイチ・ブレジネフの名は、わが国の生活における数々の偉業——工業化と農業集団化、大祖国戦争でのソ連国民の歴史的勝利、わが祖国の戦後の国民経済復興、宇宙開発、ソビエト国家の経済・科学・文化の発展におけるすべての成果——と直接に結びついており、その名はソ連共産党とわが偉大な祖国の歴史に永遠に残った。

中央委総会参加者は、故人の近親者に深い哀悼の念を表明した。

中央委総会はソ連共産党中央委書記長選出の問題を審議した。

中央委政治局の委託により、ソ連共産党中央委政治局員・ソ連共産党中央委書記K・U・チェルネンコ同志が演説し、Y・V・アンドロポフ同志をソ連共産党中央委書記長に選出することを提案した。

総会は全会一致でユーリー・ウラジーミロビチ・アンドロポフ同志をソ連共産党中央委書記長に選出した。

ついで総会ではソ連共産党中央委書記長Y・V・アンドロポフ同志が発言し、ソ連共産党中央委書記長のポストへの選出という高い信頼を寄せられたことに対し、中央委総会に心からの感謝の念を表明した。

Y・V・アンドロポフ同志は、ソ連共産党中央委と全党に対し、ソ連共産党第26回大会の諸決議の中で定められた共産主義建設の綱領の着実な遂行のために、ソ連の経済力と防衛力をさらに強化し、ソ連国民の福祉を高め、平和を固めるという課題を解決する上での、またこれまでL・I・ブレジネフのもとでとられてきたレーニン的内外政策全体を実施する上での、継承性を確保するために、そのすべての力と知識と生活経験を傾注するであろうと確言した。

これをもって総会は議事を終了した。

ソ連共産党中央委員会臨時総会でのY・V・アンドロポフ同志の演説

同志の皆さん！

われわれの党と国、全ソ連国民は大きな損失をうけた。ソ連共産党とソビエト国家の指導者、国際共産主義運動と国際労働運動の傑出した活動家、熱烈な共産主義者、ソ連国民の忠実な息子レオニード・イリイチ・ブレジネフの心臓は鼓動するのをやめた。

現代の最大の政治家が世を去った。われわれの同志で友人、大きな心と魂をもち、思いやりがあり、親切で深い人間味のある人が世を去った。事業への私心なき献身、自分と他人に対する非妥協的なきびしさ、責任ある決定を採択する上での賢明な慎重さ、歴史の急転換における原則性と決断力、人々に対する変わらぬ尊敬、思いやり、配慮——これが、党と国民の中で評価され、愛されたレオニード・イリイチのすぐれた資質である。

ここでレオニード・イリイチ・ブレジネフを追悼するため1分間の黙禱を捧げたい。

レオニード・イリイチは、彼の生活の一日一日はソ連共産党とソ連全国が取り組んでいる問題と切り離すことができないと語っていた。たしかに、そうであった。

国の工業化と農業の集団化、大祖国戦争と戦後の復興、処女地開拓と宇宙開発——すべてこれは、ソ連国民の労働と闘争における大きな道標であったと同時に、共産主義者レオニード・イリイチ・ブレジネフの経歴における道標でもあった。

偉大な社会主義共同体諸国の威力の増大と全面的協力の深まり、現代の人類が直面する歴史的な課題の解決への世界共産主義運動の積極的な参加、地上の民族解放と社会進歩の全勢力の連帯の強化は、レオニード・イリイチの名や事業と切り離しがたく結びついている。

レオニード・イリイチ・ブレジネフは、平和と諸国民の安全、人類に差し迫った世界核戦争の脅威の排除をめざす首尾一貫した熱烈な疲れを知らぬ闘士として、感謝に満ちた人類の記憶に永遠に残るであろう。

われわれは、平和というものが帝国主義者にお願いして手に入れるものではないことを、よく知っている。ソ連軍のゆるぎない威力に依拠することによってのみ、平和を守り抜くことができる。党と国家の指導者として、ソ連国防会議の議長としてレオニード・イリイチは、国の防衛能力が現代の要求に答える水準にあるようつねに注意を向けていた。

この会場には、レオニード・イリイチが18年間にわたって変わることなく指導してきたわが党の司令部を構成する人たちが集まっている。彼が仲のよい集団的な作業の組織やこの司令部による正しいレーニン的方針の敷設に、どれだけの力と魂を打ちこんだかは、われわれ一人一人が知っている。今日わが党の生活と活動を特徴づけている健全な道徳的・政治的雰囲気づくりにレオニード・イリイチがいかに計り知れない貢献を行ったかは、われわれ一人一人が知っている。

マルクス・レーニン主義を擁護するわが党の原則的な闘争、発達した社会主義の理論と共産主義建設の最も緊要な課題の解決の道の作成は、レオニード・イリイチの名と結びついている。世界共産主義運動における彼の活動は、兄弟諸党やわれわれの外国の階級的兄弟たち、社会主義をめざし、資本の抑圧に反対し、偉大な共産主義の理想の勝利をめざす闘争での同志たちの非常に高い評価を正当にうけている。

レオニード・イリイチ・ブレジネフの生涯は、彼の考えと努力が第26回党大会やそれに続く中央委員会総会で決定された経済的、社会的、文化的発展の最大の課題の解決に向けられたときにとぎれてしまった。これらの課題の実現、レオニード・イリイチ・ブレジネフの指導のもとで作成されたわが党とソビエト国家の内外方針の首尾一貫し

た実現は、われわれの最重要な義務である。そして、このことは、この世を去った指導者に対するわれわれの最高の追悼となろう。
　われわれの悲しみは深く、われわれがこうむった損失は大きい。
　このような状況のもとで、われわれの隊列をより緊密なものにし、党中央委員会のまわりにますます強く団結し、そのポストや生活の中でソ連国民の幸福のため、平和の強化、共産主義の勝利のために全力を尽くすことが、われわれ一人一人の義務であり、各共産主義者の義務である。
　ソ連国民は、自分たちの共産党を限りなく信頼している。ソ連共産党にとってソ連国民の切実な利益以外に他の利益はなかったし、いまもないがゆえに、党を信頼している。この信頼にこたえること――それはすなわち、共産主義建設の道に沿って前進し、われわれの社会主義祖国の一層の繁栄を達成することである。
　同志の皆さん、われわれには、もっとも困難な時機にわれわれを助けてきたし、いまも助けている力、われわれがもっとも困難な課題を解決するのに役立っている力がある。この力とはわれわれの党の隊列の統一であり、党の集団的な英知、その集団的な指導であり、党と国民の統一である。
　今日、われわれの総会は、レオニード・イリイチ・ブレジネフを追悼し、彼がその生涯を捧げた事業の継続を保障するために開かれた。
　総会は、ソ連共産党中央委員会書記長の選出という問題を決めなければならない。
　同志の皆さん、この問題について意見を述べていただきたい。

ソ連共産党中央委員会臨時総会での
K・U・チェルネンコ同志の演説

　親愛な同志の皆さん！
　私は政治局から本中央委員会臨時総会の出席者を前に発言するよう委託された。
　われわれの中央委員会臨時総会は全く緊急の性格を帯びている。国と党は深い喪に服している。レオニード・イリイチ・ブレジネフが世を去ったのである。
　ソ連国民は、ほぼ20年間党と国家の先頭に立ち、ソ連の人々の幸福のため、わが国の共産主義建設の事業のために自らのすべての力と大きな才能を捧げたすぐれた指導者を失った。人類は平和と自由と社会進歩の理想をめざした偉大な、真に疲れを知らぬ闘士を失った、と言える。われわれソ連の共産党員、社会主義諸国のわれわれの兄弟、世界共産主義運動のわれわれの戦友は、レーニンの事業の才能豊かな継承者、勤労者の利益への献身的な忠実さの手本となった人物を失った。
　われわれの損失の悲しみのすべてを言葉で言い表わすことはできない。しかしこの悲しみの日々、われわれ全員にとってかけがえのないレオニード・イリイチの生涯の教訓がわれわれ全員に大きな助けとなっている。
　レオニード・イリイチは、社会の利益、国民の利益のために没頭する天賦の才に十分めぐまれていた。青年時代から晩年に至るまで、つねにそうであった。
　レオニード・イリイチは、美辞麗句の願望だけでは、空虚なお題目にすぎないことをよく承知していた。正しい考えを述べるだけでは不十分で、それを明確な組織活動で裏付け、広範な勤労者大衆に理解され、うけいれられるものにしなければならないのだ。彼は人々を愛した。彼は人々を信頼することができた。
　レオニード・イリイチは、まれに見る勇気のある人物であった。彼がそのことを証明したのは、最初の日から最後の日まで参加した大祖国戦争の中だけではなかった。全生涯を通じてその勇敢さは変わらなかった。そして彼は同志一人ひとりのいかなる試練にも負けない勇敢さ、原則性、粘り強さを高く、非常に高く評価した。
　レオニード・イリイチの身近にいて、

彼の言うことに耳を傾け、その鋭い知性、機転のよさ、生活愛をひしひしと実感する――これが、彼と手をたずさえて仕事をする幸福にめぐまれたわれわれ全員にとって学校となった。
　レオニード・イリイチ・ブレジネフはわれわれに貴重な遺産をのこした。一八〇〇万人の党員を擁するわれわれの党は一つに団結している。ソ連国民は党の英知を熱烈に信じている。幹部に対する要求のきびしさと尊敬、ゆるぎない規律、大胆で有益なイニシアチブへの支持、官僚主義のあらゆる表れに対する非妥協性、大衆との結びつきの発展やソ連社会の真の民主主義への不断の配慮が、われわれの生活の規範となっている。
　この指導方式を守り、発展させ、レオニード・イリイチが自らの言動によってわれわれにのこしたすべてのものを大切にすることが、彼の記憶に対するわれわれの義務であり、党と国に対するわれわれの義務である。そうなることの確かな保証となるのが、党の指導的中核、その中央委員会、レオニード・イリイチの決定的な参加のもとに形成された政治局である。
　政治局を代表して私は、国全体、世界全体に対して、党が現段階においてはソ連共産党第23－26回大会の諸決定に明確に、完全に表されているレーニンの路線を今後も堅持していくことをわれわれの総会が示すであろうと、きわめて深い確信をもって表明したい。レオニード・イリイチがその策定と実現に大きく寄与したわが党の内外政策は、着実に、首尾一貫してひたむきに推進されるだろう。
　国民の幸福と世界平和の維持が過去、現在を通じてわれわれの指針となってきたし、これからもそうなるだろう。
　わが国には、詳細な、十分検討された社会・経済計画がある。経済は経済的でなければならない。これが党の目標である。これは、工業・農業部門の技術更新、管理の改善、そして、言うまでもなく、労働の組織の改善、その生産性の上昇を意味する。これを土台にしてわが国の経済は着実に発展し、国民福祉が向上するだろう。これを土台にして国の防衛力が強まるだろう。
　わが国には広範な、具体的な八〇年代の平和綱領がある。これは国民の願いに沿ったものである。デタント、軍縮、紛争状態の克服、核戦争の脅威の一掃――これこそ、われわれがめざす目標である。われわれは自分自身のため、自分の友人のため、世界のすべての国の国民のために確実な安全を願っている。
　親愛な同志の皆さん！
　明らかに、われわれ全員は、レオニード・イリイチの逝去がわれわれにもたらした損失を埋めることがきわめて困難であることを自覚している。現在、集団で党内運営にあたることが、二倍も三倍も重要である。あらゆる党機関での息の合った協力活動が、共産主義建設や、われわれの国際舞台での今後の成功を保障するのである。
　ソ連共産党中央委員会政治局は起こった事態を検討した結果、ユーリー・ウラジーミロビチ・アンドロポフ同志をソ連共産党中央委員会書記長に選任することを総会に提案するように私に委託した。彼の経歴を語る必要はないと思う。ユーリー・ウラジーミロビチは、党内および国内でレーニンの党の事業に献身的で忠実な共産党員としても、レオニード・イリイチの最も親しい戦友としてもよく知られている。
　ユーリー・ウラジーミロビチは内外政策やイデオロギー分野の多面的な活動の経験をもっている。彼はコムソモールの指導者でもあり、卓越した党活動家でもあり、外交官でもあった。彼は社会主義共同体の強化やわが国の安全保障にも少なからぬ努力を傾けた。
　レオニード・イリイチは彼のマルクス・レーニン主義的信念、党性、広い視野、すぐれた実務的才能、人間性を高く評価した。全政治局員はユーリー・ウラジーミロビチがブレジネフの指導方式、国民の利益に対するブレジネフの配慮、要員に対するブレジネフの態度、侵略者の策謀に全力で対決し、平和を守り強化する決意を十分会得しているものと考えている。
　ユーリー・ウラジーミロビチは、党的な謙虚さ、他の同志の意見を尊重する態度、そして、言わば、集団活動への愛着をその持ちまえの特徴としている。政治局は、アンドロポフ同志を中央委員会と全党の信頼に値するものと全員一致して考えている。
　親愛な同志の皆さん！　われわれは、レオニード・イリイチを追悼して頭をたれながら、われわれの創造活動をうむことなく継続していくことを厳粛に約束する。レオニード・イリイチがなしとげられなかったこと、党が彼の指導のもとでめざしたすべてのことは必ずやなしとげられるだろう。

ユーリー・ウラジーミロビチ・アンドロポフの略歴



ユーリー・ウラジーミロビチ・アンドロポフは一九一四年6月15日、スタブロポリ地方ナグツカヤ駅の鉄道員の家に生まれた。高等教育修了。一九三九年からソ連共産党員。

16歳のコムソモール（共産青年同盟）員Y・V・アンドロポフは、北オセチア自治共和国モズドク市で労働者となり、その後彼の労働の経歴はボルガ船舶公社で続き、船員として働く。

一九三六年からコムソモールの活動に従事。

ヤロスラブリ州ルイビンスク市水運中等専門学校コムソモール組織の専従書記に選出され、まもなくルイビンスク市のボロダルスキー造船所の全ソ・コムソモール中央委オルグに抜擢された。一九三八年、ヤロスラブリ州コムソモール委員会第一書記に選出され、一九四〇年、カレリア・コムソモール中央委第一書記に選出。

大祖国戦争の初期からカレリアのパルチザン運動に積極的に参加。一九四四年にペトロザボック市がファシスト侵略者から解放された後、党務につき、ペトロザボック党市委第二書記に、一九四七年にはカレリア共産党中央委第二書記に選出された。

一九五一年、ソ連共産党中央委の決定によりソ連共産党中央委の機関に移り、監査員に任命され、その後ソ連共産党中央委の課長に任命される。

一九五三年、党はY・V・アンドロポフを外交活動につけ、数年間彼はハンガリー人民共和国駐在ソ連特命全権大使を務めた。

一九五七年、ソ連共産党中央委の部長に抜擢。

第22回以降のソ連共産党大会で中央委員に選出。

一九六二年、ソ連共産党中央委書記に選出。

一九六七年5月、ソ連閣僚会議付属国家保安委員会議長に任命され、同年6月、ソ連共産党中央委政治局員候補に選出。

一九八二年5月、再びソ連共産党中央委書記に選出される。

一九七三年4月からソ連共産党中央委政治局員。

また数次にわたり〔第3次および第6—10次〕ソ連最高会議の代議員。

党の意思によってついたあらゆるポストでY・V・アンドロポフは、レーニンと党の偉大な事業への献身ぶりを発揮して働いた。彼は党の諸決定の実現、共産主義思想の勝利をめざす闘争に、そのすべての力、知識、経験を傾注している。

一九七四年、祖国に対する大きな功績によって、共産党とソビエト国家のすぐれた活動家Y・V・アンドロポフに社会主義労働英雄の称号が与えられた。彼は四つのレーニン勲章、10月革命勲章、赤旗勲章、三つの労働赤旗勲章その他多くのメダルを受章している。

御　礼

L・I・ブレジネフ・ソ連共産党中央委員会書記長・ソ連最高会議幹部会議長の死去に際し、弔意を表された日本の各機関や団体、個人の方々に対し、また、日本駐在の各国代表各位に対し、厚く御礼申し上げます。

在日ソビエト社会主義共和国連邦大使館、在札幌・在大阪ソ連総領事館

ソ連共産党中央委員会総会に関する公報

一九八二年11月22日、ソ連共産党中央委員会の定例総会が開かれた。

総会は「一九八三年度ソ連経済・社会発展国家計画について」のソ連閣僚会議副議長・ソ連国家計画委員会議長N・K・バイバコフ同志の報告と「一九八三年度ソ連国家予算について」のソ連財務相V・F・ガルブゾフ同志の報告を聴取した。

報告をめぐる討論では、V・V・グリシン（ソ連共産党モスクワ市委第一書記）、G・V・ロマノフ（ソ連共産党レニングラード州委第一書記）、E・A・シェバルドナゼ（グルジア共産党中央委第一書記）、A・P・リャシコ（ウクライナ共和国閣僚会議議長）、G・S・ゾロツーヒン（ソ連調達相）、G・P・ボゴミャコフ（ソ連共産党チュメニ州委第一書記）、N・V・ペレベルゼワ（ロストフ州″レーニンの道″コルホーズ・コンバイン作業班長）、V・P・デミデンコ（カザフスタン共産党クスタナイ州委第一書記）、G・P・ロツマノワ（カザン電算機工場組立工）、L・G・クレツコフ（ベロルシア共産党グロドノ州委第一書記）、B・V・バキン（ソ連組立・特殊建設事業相）の諸同志が発言した。

総会ではソ連共産党中央委書記長Y・V・アンドロポフ同志が長大な演説を行った。この演説は新聞雑誌に発表される。

中央委総会は審議された諸問題について全会一致で決定を採択した。これらの決定は新聞雑誌に発表される。

ソ連共産党中央委総会は組織問題を審議した。

中央委総会はG・A・アリエフ同志をソ連共産党中央委政治局員候補から政治局員に移した。

中央委総会は、健康状態にかんがみ、本人の要請によってA・P・キリレンコ同志をソ連共産党中央委政治局員および中央委書記の職務から解任した。

中央委書記長Y・V・アンドロポフ同志は、A・P・キリレンコ同志は長年にわたり地方党機関でもソ連共産党中央委でも積極的に活動してきたと指摘し、われわれは党と国家に対する彼の功績を正当に評価するものであると指摘した。

中央委総会はN・I・ルイシコフ同志を中央委書記に選出した。

中央委総会はV・S・アルヒモフ（ソ連国立銀行総裁）、V・S・マカレンコ（ウクライナ共産党クリミア州委第一書記）、N・V・ペレベルゼワ（ロストフ州″レーニンの道″コルホーズ・コンバイン作業班長）の諸同志を中央委員候補から中央委員に移した。

中央委総会は、「レオニード・イリイチ・ブレジネフを永久に記念する措置について」のソ連共産党中央委、ソ連最高会議幹部会、ソ連閣僚会議の決定を承認した。この決定は新聞雑誌に発表される。

これをもって総会は議事を終了した。

レオニード・イリイチ・ブレジネフを永久に記念する措置についてのソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連閣僚会議の決定

レーニンの偉大な事業の忠実な継承者、共産党とソビエト国家、国際共産主義運動、労働運動の傑出した活動家、平和と共産主義をめざす熱烈な闘士レオニード・イリイチ・ブレジネフの歴史的功績にかんがみ、その思い出を永久に記念するために、ソ連共産党中央委員会、ソ連最高会議幹部会、ソ連閣僚会議は次のように決定する。

1 ナベレジヌイエ・チェルヌイ市をブレジネフ市に、モスクワ市チェリョームシキ区をブレジネフ区に、ドニエプロジェルジンスク市ザボッキー区をブレジネフ区に改称する。

2 レオニード・ブレジネフの名を次のものに冠する——オスコル電気冶金コンビナート、生産合同「ユージヌイ機械工場」、ノボロシースク・セメント・コンビナート、ボルゴドンスク原子力機械生産合同「アトムマシ」、ヌレク水力発電所（タジク共和国）、カザフ共和国クスタナイ州の処女地のソフホーズ、「ビャツァノウエ」コルホーズ（モルダビア共和国オルゲーエフ地区）、労働赤旗勲章佩受ドニエプロペトロフスク冶金大学、星のまち（モスクワ州）、原子力砕氷船アルクチカ号、国防省高等軍事学校の一校、レオニード・ブレジネフが勤務した教育戦車師団、ドニエプロジェルジンスク市第一中学、モスクワ、レニングラード、キエフ、アルマアタ、ドニエプロペトロフスク各市の新しい広場の一つ、海軍艦艇の一隻、海洋客船の一隻。

3 ロモノーソフ記念モスクワ国立大学、L・I・ブレジネフ記念ドニエプロペトロフスク冶金大学、アルセニチェフ記念ドニエプロジェルジンスク工業大学の学生に一二人分のL・I・ブレジネフ記念奨学金を設ける。

4 レオニード・ブレジネフが働いたジェルジンスキー記念ドニエプル製鉄所、彼が学んだアルセニチェフ記念ドニエプロジェルジンスク工業大学の建物、彼が住んだモスクワ市クツーゾフ大通り二六号館に、顕彰板を設置する。

5 赤の広場のクレムリンの城壁のそばのレオニード・ブレジネフの墓に胸像を立てる。

（11月22日の党中央委総会でのアンドロポフ書記長の演説、23日から始まったソ連最高会議関係の記事は次号に掲載の予定）

「平和を守り、相互理解をかちとろう!」

——第1回ソ日ジャーナリスト会議開催

ノーボスチ通信社東京支局長　M・エフィーモフ



モスクワのノーボスチ通信社で開催された第1回ソ日ジャーナリスト会議。トルクノフ同通信社理事長が開会のあいさつをした。

11月11、12日の両日、モスクワのノーボスチ通信社理事会会議室で第1回ソ日ジャーナリスト会議が開かれた。主催はノーボスチ通信社(APN)と日本対外文化協会(対文協)。会議のソ連側出席者はAPN副理事長K・ハチャツーロフ教授(会議の共同議長)、モスコー・ニューズ紙編集長N・エフィーモフ、イズベスチヤ紙副部長Y・バンドゥーラ、イズベスチヤ紙評論員M・デムチェンコ、プラウダ紙政治評論員V・オフチンニコフ、タス通信政治評論員A・ビリュコフ、APN政治評論員グループ長S・ベグロフ、ノーボエ・ブレーミャ〔新時代〕誌副編集長B・ピシチク、「極東の諸問題」誌副編集長V・アルヒポフ、週刊紙ザ・ルベジョム〔海外評論〕副編集長V・ヨルダンスキー、I・ラティシェフ教授、APNアジア諸国総編集局編集長A・パンテレーエフおよび筆者M・エフィーモフ。日本側出席者はNHK解説委員長・山室英男(共同議長)、共同通信論説委員長・平田真己、読売新聞論説委員・国政恒裕、京都新聞論説委員長・尾関史郎、平和経済計画会議事務局長・蛯名保彦の各氏のほかモスクワ駐在の日本の記者団であった。

会議の開会のあいさつで、L・トルクノフAPN理事長は、現代世界におけるマスコミの大きな役割を指摘し、こんご戦争ヒステリーがさらにひどくなるか、それとも相互理解と信頼の雰囲気が定着するかどうかは、マスコミの態度いかんに大きくかかっており、隣り合ったソ日両国の生活を自国の国民によりよく、より完全に、もっと客観的に知らせる使命をもつソ日ジャーナリストの責任は、極めて重いと強調した。L・N・トルクノフは、ソ日ジャーナリストの第1回のこうした会議が、建設的対話と率直な意見の交換の雰囲気の中で進むことを期待した。

はっきり言っておくが、出席者全員がこぞって認めたとおり、会議は成功裏に行われた。その成功に大きく役立ったのは、双方から出された非常に興味深い、内容に富んだ報告であった。

これらの報告の要旨を紹介しておこう。

N・エフィーモフの報告「平和闘争とマスコミ」(要旨)

人類はエネルギー、環境、原料など、少なからぬグローバルな問題に直面している。だが、それらの中のどれかの重要性について、その道の権威が何を言おうとも、人類は全世界的な核破局を防止できるのかという最重要問題に比べたら、これらすべての問題は二義的なものになってしまう。

これは問題の中の問題である。われわれの見るところでは、これよりも緊急を要する、より重要な、猶予をゆるさぬ問題は、現在一つもない。

病気を治療するためには、医師は病因を知らなければならない。世界に迫る危険をとり除くためには、それを生み出し、養っているものを理解しなければならない。

西側では少なからぬ奸計がソ連のものだとされている。ソ連の〝真意〟は?とたずねられた場合、われわれはこう答える。われわれの党大会(複数)の資料を見ていただきたい。その中にソ連の対外政策の基本目標と基本方向がある。ソ連とその指導部、その国民の意図は、これらの資料に述べられているとおりのものだ。

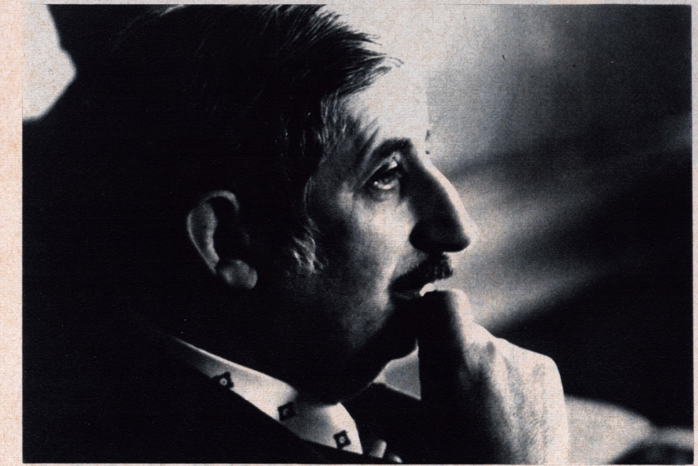
何がソ連の対外政策の性格を決定しているのか?

第一に、われわれの対外政策は、われわれの体制の本質そのものから出ている。レフ・トルストイの有名な長編『アンナ・カレーニナ』の中で一登場人物は「戦争になりさえすれば、あの人の収入は倍になる」と言っているが、ソ連にはそういう層は存在しない。〝軍産複合体〟というのは、われわれにとっては外来の概念で、それはわが国には存在しない。これらすべてのものは、社会主義国家の国境の外で探さなければならない。

第二に、わが国は新社会の建設、新しい生活様式の発展に忙殺されている。たとえて言うなら、われわれは新しい家を建てているのだ。こういった条件のもとで、隣家に放火したり、その井戸に毒を投じたりすることを、われわれが考えるはずがあろうか? われわれは綱領的な諸文書、とりわけ第26回党大会に対するソ連共産党中央委員会の活動報告の中で、対外政策の意味を次のように定式化している。「……ソ連国民が当面の課題を解決するために必要な外的条件を保障すること」。言い換えるなら、壮大な創造的課題をみずから提起した国は、戦争はおろか、国際情勢を悪化させることさえも考えていないのだ。この国に必要なのは、平和、デタント、他の諸国民との協力である。

第三に、世界の陸地の1/6を占めるわが国は、自国の発展に必要なすべての資源を——エネルギー資源も、鉱物資源も、土地も、水資源も、保有している。

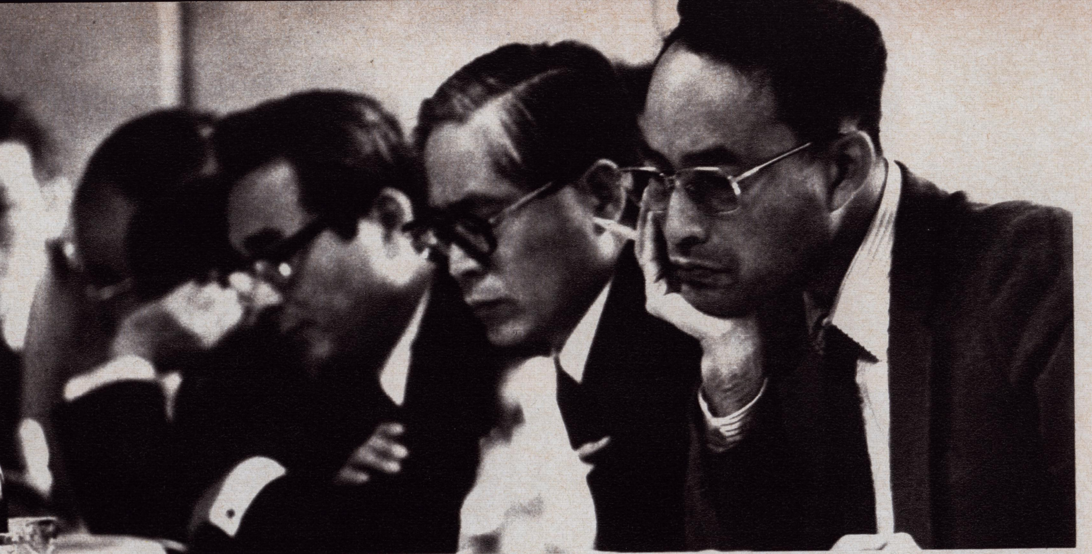
第四に、わが国の政府が一再ならず



ソ連側共同議長のハチャツーロフ・ノーボスチ通信社副理事長



日本側共同議長の山室英男・NHK解説委員長



右から蛯名保彦、国政恒裕、尾関史郎、平田真己の各氏

公式に声明したように、われわれは隣接諸国あるいは非隣接諸国に対し、いかなる領土要求をもつきつけていない。隣接諸国もこのことを知っている。

だが、あなたがたは軍隊をもっているではないか！　だが、あなたがたの軍事力は、決して小さくはないではないか！――とわれわれの論敵は反論する。たしかにそのとおりだ。

わが多民族連邦国家の60周年を前にして、遠からぬ過去の若干の事実を指摘するのも、余計なことではあるまい。これらの事実は、多くのことを説明してくれるだろう。

西側の人々が〝ロシアの脅威〟、〝ソ連の脅威〟でおどかされているのは、この10年や20年に限った話ではない。だが、実際はどうだったのか？

ご承知の通り、ソビエト共和国は有名な「平和についての布告」と共に呱々の声を上げた。それに革命自体も平和的なものだった。ペトログラードの冬宮占領のさいの双方の死者は数名だった。10年たって著名な映画監督エイゼンシュテインが革命を描いた映画を製作した時、冬宮攻撃のシーンの撮影のさいに、それより多い死者が出た。

このことは、撮影の手順が明らかにうまく定められていなかったことを物語るというよりは、むしろ社会主義革命が無血で行われたことを示している。

たしかに、ソ連国民は外からの攻撃を防ぐ確実な防御手段をもっている。われわれにとってこれは、きびしい必要に迫られてやっていることである。しかし、それ以上のものではない。残念なことにわれわれは、ソ連国民が防衛の目的に使わざるをえない資金のすべてを、その政策の中でもっとも主要なものと考えている国民生活の改善に利用することができないでいる。反共主義に目がくらんだ西側、なによりもまず米国のリーダーたちは、軍拡競争をわれわれに押し付けることによって彼らがソ連を衰弱させ、その社会的発展にブレーキをかけることを望んでいるという考えを一度ならず公然と述べている。

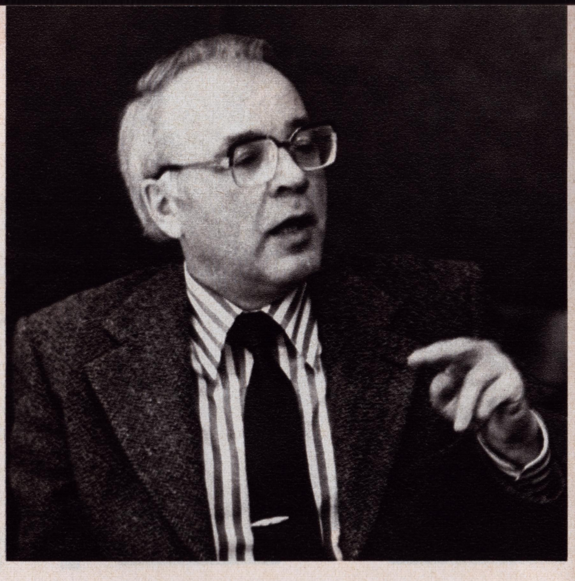
ソ連は、軍事力を自己の対外政策を保障する主要な道具と見たことは一度もなかった。

今日、世界では国際関係において完全に対立する二つの方針、世界の出来事に対する二つの対立する見解がはっきりとあらわれている。

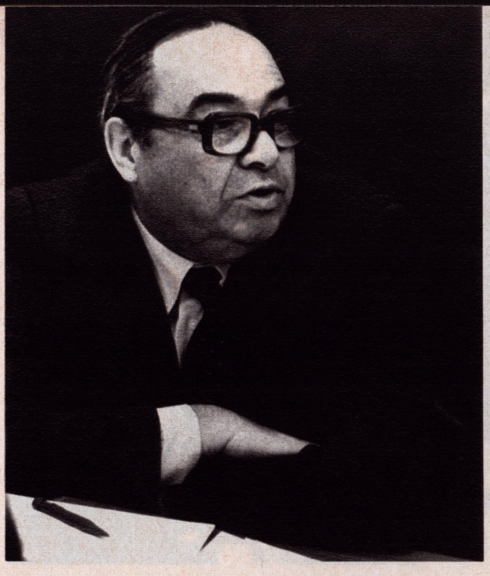
ソ連はいままで通り、社会体制の異なる国々との平和共存の諸原則、デタントの政策に忠実である。ソ連は、あらゆる差し迫った係争問題の解決において、言うまでもなく平等と同等安全の原則にもとづいて西側の国々と協力する用意がある。近年のソ連のイニシアチブ、とくに核兵器を先に使わないというソ連の約束は、国際緊張を緩和する可能性を与えている。

レーガン政権の方針は、五〇年代への後退！　冷戦へ！　という定式に帰着する。

同政権の国際問題における無能ぶりや盲目的な反共主義は、ホワイトハウスがソ連の中に現代世界のあらゆる悪および不幸の源を見出すという事態をもたらしている。彼らは、いたるところで〝モスクワの手〟という幻を見ている。だからこそ、ソ連に対して全面的な闘争――経済、政治、心理面での闘争が宣言されているのである。ソ連に対して前例のない戦争の準備が進められている。西欧諸国も、日本もこの方針、レーガン大統領の言うこの〝十字軍〟に引きずり込まれようとしている。米国大統領とその側近たちが語っていることだが、ワシントンの期待は対ソ軍事的優位の達成にかけられている。ここから米国の軍事費の大盤振舞が始まっている。ホワイトハウスは、押しつけの言葉でソ連と話し合うことができるような状態を達成するという幻想にふけっている。いまワシントンは、先制攻撃用核兵器の開発と西欧へ



オフチンニコフ・プラウダ紙政治評論員



ビシチク「ノーボエ・ブレーミヤ」誌副編集長

の配備に、特に重点を置いている。その際、米国人はあらゆることを行っている。一連の重要な問題に関するソ連との交渉（たとえば、完全全面核実験禁止についての交渉）を拒否している。達成された諸協定も拒否している。

では、どうすればよいのか？　この問いかけに対しては、次のアルバート・アインシュタインの答えが今でも有効である。

「平和を称えるのは容易だが、それでは効果はない。戦争に反対し、戦争をもたらすあらゆるものに反対する闘いに積極的に参加しなければならない」

このアインシュタインの忠告は、政府だけでなく、人々にもあてはまる。そして、主婦や、宗教家、学者など、何百万もの人々がこのことに気づいているようだ。

アインシュタインの忠告はマスコミ機関にもあてはまる。「戦争は人々の心の中で始まる」と古代の人は言っている。これを言いかえるならば、現代では戦争はマスコミで始まると言えよう。同じことは、平和についても言える。

現在、世界には二つの対立する体制が存在している。二つの体制があるから、両方が比較対照される。これは当然だ。思想と思想の競争、生活様式の競争――これも避けられない。このような比較、すなわちイデオロギー闘争をなくすことは、誰にもできない。しかし、現在あれこれの思想やイデオロギーの勝利を力で、武力で確保しようとすることは、無意味であり、危険である。イデオロギー闘争が〝心理戦争〟になってはならないし、諸国家や諸国民の内政への干渉の手段となってはならない。あるいはまた、政治的および軍事的対立をもたらしてはならない。

「さもないと、このイデオロギーの論争は破局――何百万もの人々とともに、その人たちの思想も死滅してしまうような破局――をもたらしかねない」――L・I・ブレジネフはこのように強調した。

ソ連のマスコミは、ワシントンの多くの攻撃、多くの非友好的な声明にもかかわらず、この2年間に誇るべき自制をみせてきた。われわれは、橋を燃やしたりはしない。われわれは、米国のような非常に強力な大国でさえ、世界を自己流に、自分の思いどおりに改造することはできない、と信じている。遅かれ早かれ、もちろん早いにこしたことはないが、橋は架けなければならなくなる。このプロセスに、共に手を貸そうではないか。世界の発展のこれ以外の選択肢は、われわれにはないのだから。死後の世界を信じる人々にとっても。

Y・バンドゥーラの報告「善隣の言葉で」（要旨）

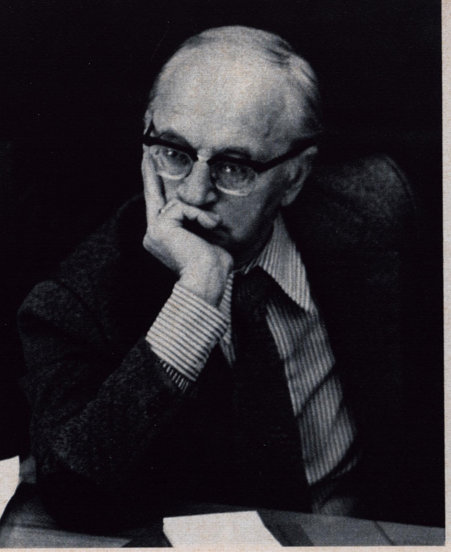
われわれ両国間の戦後の交流史にはもちろん、現在よりもはるかに困難な時代があった。しかしソ日関係にはもっとよい時期もあった。ごく最近の、七〇年代と八〇年代の境目まではずっとそういう時期だった。一九五六年の国交回復から始まってこの境目に向けて、ソ連と日本の双方の努力によってさまざまな分野で互恵関係の発展のために、実りある確実なソ日善隣の形成のために、少なからぬことが行われた。

ソ連側としては、ソ日両国民が永続的な平和、強まりゆく善隣や相互に拡大しつつある交流のもとで暮らすのを妨げるどうにも手に負えない障害など、全然ないと確信している。

ソ連は事態を真の善隣を確立するところまでもってゆく用意があることを宣言しているだけではない。具体的な提案も出している。これらの提案が実現すれば、ソ日関係に見られる根拠のない疑惑は取り除かれ、緊張の雷雲は取り払われる。こうした提案の一つが、



ラティシェフ教授



ヨルダンスキー「ザ・ルベジョム」紙副編集長

一九七八年1月にモスクワでA・グロムイコ・ソ連外相が園田日本外相に手渡した善隣・協力条約のソ連案であり、経済協力長期計画の作成にかんする提案などである。

ソ連はこのようなイニシアチブをとったが、何かの利己的な条件を日本に押しつけるつもりは決してないし、日本側から建設的な提案があれば、これを検討する用意がある。しかし日本がソ連の諸提案をいろいろな口実をつけて審議しようとしておらず、ソ日関係を改善するための提案も全然出していないのは、あくまでも事実である。

日本の新聞紙上には、反ソ主義を正当化するための新しい対ソ要求が次々に出ている。この反ソ主義はいま日本の対外政策で主導役をとり始めている。こうした作り上げられた問題の幾つかには、いわば歴史的なバックグラウンドがあり、その他の問題は最近でっち上げられたものである。

このような口実と〝非難〟が実にバラエティーに富み、種々雑多で、地理的にも変化に富んでいるにもかかわらず、私の見解では、これらには一つの共通した特徴がある——論争的な興奮がしばしば判断の冷静さを上回り、客観性が主観性の犠牲にされているのだ。その結果、苦しむのは真理だけではない——二つの隣国の国民の利益が損害を受けているのだ。

いずれにせよ、ソ日関係の分野では、日本はすでにソ連の主要な西側貿易パートナーの地位から脱落し、最近まで占めていた第2位から第5位へ転落した。今年はどうなるか——判断するにはまだ早いが、ジャーナリストの私に印象的だったのは、最近「外国貿易」誌に発表されたソ連の貿易にかんする論文の中で、N・パトリチェフ・ソ連貿易相が日本について一言も触れていないという事実である。不思議だろうか？　もちろん不思議ではない。貿易額では西独、フィンランド、フランス、イタリアといった西側諸国がすでに確実に日本を上回ったのだ。

ソ連について言えば、わが国は日本に対するいかなる侵略的意図もソ連にはないことを宣言しているだけでなく、実現すれば両国の国民の根本的な利益にかなうと思われる建設的な提案をつねに行ってもいる。これら一連の提案は特に、ソ連の善隣協力条約案の中に盛られている。ソ連共産党第26回大会では、すべての関係諸国と極東における信頼措置について具体的な交渉を行うという提案が打ち出された。そのさい、L・I・ブレジネフがタシケントで声明したように、「二国間で、たとえばソ連と日本とのあいだで、この道に沿っての前進を始めることは、十分に可能である」。

これまで述べたことをまとめながら、繰り返して言うが、われわれはソ日関係の現状を満足すべきものとは考えていない。ソ日間の相互関係がはらんでいる困難を克服するだけでなく、ソ日関係の著しい質的改善にとっても広範な余力があるとわれわれは見ている。

そしてわれわれは、これらの余力を両国の国民の利益のために全面的に利用することに賛成である。

※　※　※

出席者は、日本側報告者の山室英男氏の「当面の国際情勢について」と平田真己氏の「日ソ経済関係について」の報告を、極めて熱心に興味深く聴取した。両報告は現在の情勢を分析し、国際政治情勢の改善と日ソ経済協力の活発化について具体的な提案を出した。

もちろん、ソ日双方の会議出席者が多くの評価で意見が一致しなかったという明白な事実を、否定するとしたら間違いだろう。幾つかの原則的な問題、とくに最近の国際情勢悪化の原因にかんしてさえ、意見の違いが見られた。ソ米両国は、現在の危険な軍拡競争に「同等の責任をもつ」とする、明らかに間違ったテーゼに対しては、ソ連のジャーナリストが、十分に納得のゆく反論を加えた、と私は見ている。ほかならぬソ米の一方のソ連こそ、一貫してひたすら、軍備増強の停止や大量殺人兵器の完全廃絶を主張しているのである。ソ連が一方的に負った核兵器の先制不使用の約束は、歴史的意義をもち、明るい見通しを開いた。だが残念ながらもう一方の米国は、いぜん対立と国際情勢悪化の方針をとっている。ついでながら、いまこうした「タカ派」的方針の危険性を否定できる人は、恐らくいまい。

国際分業の長所といわゆる経済〝制裁〟政策の見込みのなさにかんする問題では、建設的な討論が行われた。

日本の新聞にソ連の実状やソ連の内外政策を紹介解説する点については、数多くの興味深い意見が述べられた。

しかし会議出席者の見解がまちまちだったとはいえ、肝心な点——つまり第一にわが多難な地球上の生活を守り、またわが隣国の両国民間の相互理解と信頼をかちとるために、努力を惜しんではならないということでは、意見が一致した。そしてむろんそれが、第1回ソ日ジャーナリスト会議の主要な成果であった。

ご承知のとおり、この会議のときに、ソ連国民に非常に不幸な出来事があった。山室氏が報告しているときにソビエト国家とソ連共産党の指導者L・I・ブレジネフ死去の悲報が入り、山室氏の提議によって、会議の全出席者が現代の卓越した政治家に黙禱をささげた。

このことと関連して言っておかねばならないが、会議に出席したソ連のジャーナリストたちは、ノーボスチ通信社での追悼集会と赤の広場のL・I・ブレジネフの葬儀に出たいと申し出た日本のジャーナリストたちの心からの哀悼の意の表明に、強く心を打たれた。

全ソ連国民はL・I・ブレジネフの死去を悼んだ。わが国の歴史の歩みのすべての主なページとかかわりのある人が世を去ったのである。L・I・ブレジネフの名は、平和、デタント、軍縮のためにたたかった不屈の闘士として、いつまでも忘れられないであろう。

こんどの会議ならびにソ連の著名な社会活動家、政治家とのインタビューや一般人との多くの出会いを通じて、日本のジャーナリストたちは、われわれがこんごともL・I・ブレジネフが全力を注いだ事業を継承することを確信できたようである。ソ連の内外政策はこの先変わらないだろう。



11月12日、第1回ソ日ジャーナリスト会議に参加した日本側代表団はクレムリンにI・V・アルヒポフ・ソ連閣僚会議第一副議長を訪問して懇談した。写真：向かって右から尾関氏、蛯名氏、国政氏、I・V・アルヒポフ、平田氏、山室氏、A・ラザレフ・ノーボスチ通信日本課長、リュー(通訳)、K・ハチャツーロフ・ノーボスチ通信副理事長。

特集 ソ連邦結成60周年

数字で見る諸民族の同盟



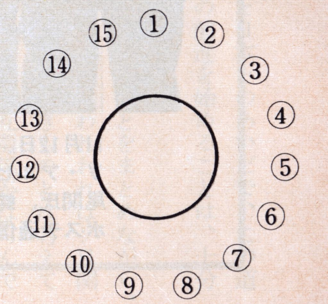
この、面積2240万平方kmのソ連の国土には、15の連邦構成共和国があり、2億7000万人の国民が住んでいる。

（表紙の各共和国の国章とこの地図のイラストの番号は共通）

① ロシア連邦共和国
② ベロルシア共和国
③ カザフ共和国
④ アゼルバイジャン共和国
⑤ モルダビア共和国
⑥ キルギス共和国
⑦ アルメニア共和国
⑧ エストニア共和国
⑨ トルクメン共和国
⑩ タジク共和国
⑪ ラトビア共和国
⑫ リトワ共和国
⑬ グルジア共和国
⑭ ウズベク共和国
⑮ ウクライナ共和国

表紙のソ連と15共和国の国章の配置

（中央がソ連の国章 他の共和国の国章は左の数字を参照）



当然ながら統計は、人間関係、ましてや民族関係がうまくいっているかどうかには答えない。それにもかかわらず数字は、民族関係のある面をかなりよく示している。過去の数字を振り返って見ると、民族関係の発展の傾向がつかめる。では、今から60年前の一九二二年12月30日に結成された世界初の社会主義国家――ソビエト連邦の諸民族の同盟を、統計という鏡に映してみよう。

一〇〇の民族の国

ソ連の面積は二二四〇万平方km（地球上の全陸地の$\frac{1}{6}$）。同権に基づき、自由意思で結合した15の連邦構成共和国には二億七〇〇〇万人が住んでいる。面積の広さは世界一だが、人口は中国、インドに次いで世界第3位である。ソ連は多民族国家で、言語、文化、風俗は異なるが、同一の目標、共通の歴史的運命によってしっかりと結ばれた一〇〇以上の民族が住んでいる（**表1**参照）。

すべての大小民族の代表は、ソ連の国政に積極的に参加しており、各級人民代議員ソビエトには一〇〇を越す民族の出身者が選出されている。

ほぼすべての民族が自己の国家組織――連邦構成共和国、自治共和国、自治州、自治管区をもっており、通常、その境界はこれらの民族が主として居住する地域と一致している（**表2**参照）。

社会構成、教育水準、文化

ソ連には八〇〇〇万人の労働者、一三二〇万人の農民がおり、就業者の4人に1人は頭脳労働に携わっている。一九七〇年と一九七九年の国勢調査の結果を比較すると、知識人の数が最も急速に伸びたのはウズベク共和国で、55%増。教育水準が最高なのはアルメニア共和国で、国民経済部門の就業者数一〇〇〇人につき八九一人が高等・中等教育修了者である。この数字は、ソ連全体ではやや低くなり、一〇〇〇人につき八三三人である。

男女別では、現在高等・中等教育修了者は就業者一〇〇〇人につき女子は八二九人、男子は八三七人である。一九三九年には、この数字は女子一〇四人対男子一三六人で、明らかに女子が劣勢だった。しかし60年前のその開きは比較にならないほど大きく、例えば中央アジアとカザフスタン（現在のカザフ共和国）では、当時高等教育を受けた女性は皆無に近かった。

一九八一―八二年度に、ソ連では一億五〇〇万人が学んでおり、うち九九〇万人は大学・中等専門学校の学生であった。

年間四二二〇万人が職業教育を受けて、専門職を身につけ、企業、機関、コルホーズで技能資格を高めている。

ソ連には四三九三の中等専門学校と八九一の大学がある。大学では五二八万四〇〇〇人の青年男女が学んでいる。

ソ連は世界一の読書国である。公共図書館の数は一三万二四〇〇。学術図書館、学校図書館、技術図書館その他の図書館を含めた図書館総数は三二万九〇〇〇で、その蔵書総数は四七億冊にもなる。

ソ連の映画館の年間観客動員数は四二億人。

国民所得

土地、地下資源、森林を除くソ連の国富は二兆九〇〇〇億ルーブル（一ルーブルは約三六〇〇円）で、ソビエト政権発足以来30倍以上に増えた。

国民所得は生産の拡大・発展および国民福祉の向上の源泉である。国民所得の上昇率は18ページのA図のとおり。この図から、昨年の2・2日分の国民所得が一九二二年1年分のそれに相当することが分かる。

工業、農業

ソ連諸民族の共同の労働は、経済のダイナミックな発展を保障している。19ページのD図は60年間にソ連の工業生産高が五三七倍に伸びたことを示している。共和国別の工業生産の伸びは**表3**のとおり（一九二二年を1とした指数。リトワ、ラトビア、エストニアの沿バルト海3共和国は、ソ連に加盟した一九四〇年が1となる）。

現在のソ連は世界の工業生産高の20%を生産している（B図）。ソ連の工業生産高は現在、米国のそれの$\frac{4}{5}$だが、ソ連は年平均の伸び率と絶対増加率では米国を追い越している。主な工業製品の生産高は**表4**の通り。

この表にあるすべての製品の生産高において、現在ソ連は欧州第1位を占めている。石油、鉄鉱石の採掘量と、銑鉄、粗鋼、化学肥料、セメント、木材、プレキャスト・鉄筋コンクリート、毛織物、皮靴、その他の製品の生産高は世界第1位である。

農業総生産高は60年間で5・2倍増加した。現在カザフ共和国だけで、革命前のロシア全体と同量の穀物を生産している。

ソ連農業のエネルギー・技術装備率は急増した。一九二八年にはソ連全体で穀物収穫用コンバインは2台しかなかったが、一九八一年には七三万二〇〇〇台になった。トラクターは一九二二年の二万七〇〇〇台に対し、一九八一年には二五八万台に達した。以上はソ連全体の数字であるが、次に一つの共和国――アゼルバイジャン共和国のデータを挙げてみよう（アゼルバイジャン共和国統計局の発表より抜粋）。

「一九八〇年にアゼルバイジャン共和国の農業部門には、二九二九台の専用トラック、三八九五台のトラクター（合計二八万七〇〇〇馬力）、五〇〇〇台の穀物収穫用コンバイン、三〇八台のサイレージ収穫用コンバイン、六一〇台の綿花収穫機、一七八七台の草刈り機、四〇七六のトラクター用プラウ、その他多くの機械や装置が供給された」

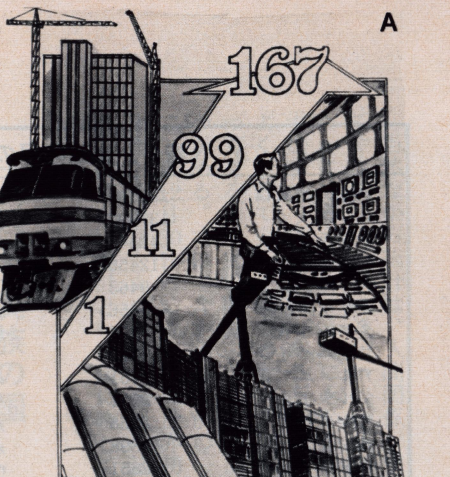
次にソ連邦結成1年前の、アゼルバイジャンの農業の技術装備の水準が分かる文書がある。それはアゼルバイジャン農業人民書記部付属委員会の一九二一年10月2日の会議の議事録である。

〔表1〕ソ連国民の民族構成（1979年の国勢調査による。 単位1000人）

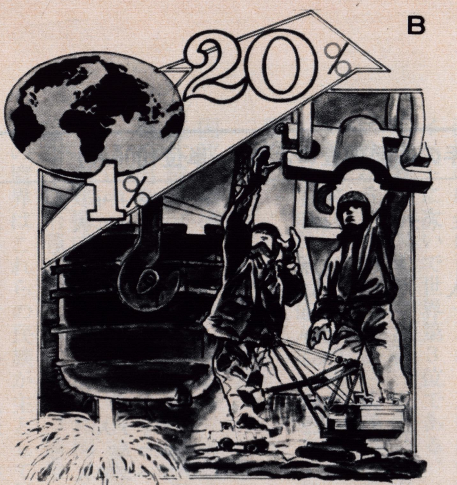
ソ連の総人口	262085	オセチア人	542	ヌガナサン人	0.9
ロシア人	137397	コミ人，コミ・ペルミャク人	478	ユカギル人	0.8
ウクライナ人	42347	〔内訳〕		トファラル人	0.8
ウズベク人	12456	コミ人	327	アレウト人	0.5
ベロルシア人	9463	コミ・ペルミャク人	151	ネギダル人	0.5
カザフ人	6556	朝鮮人	389	カルムイク人	147
タタール人	6317	ブルガリア人	361	カレリア人	138
アゼルバイジャン人	5477	ブリャート人	353	カラチャイ人	131
アルメニア人	4151	ギリシャ人	344	ルーマニア人	129
グルジア人	3571	ヤクート人	328	クルド人	116
モルダビア人	2968	カバルダ人	322	アディゲ人	109
タジク人	2898	カラカルパク人	303	トルコ人	93
リトワ人	2851	ウイグル人	211	アブハジア人	91
トルクメン人	2028	ジプシー	209	フィンランド人	77
ドイツ人	1936	イングーシ人	186	ハカス人	71
キルギス人	1906	ガガウズ人	173	バルカル人	66
ユダヤ人	1811	ハンガリー人	171	アルタイ人	60
チュワシ人	1751	ツワ人	166	ドゥンガン人	52
ダゲスタンの民族	1657	北方民族	158	チェルケス人	46
〔内訳〕		〔内訳〕		ペルシャ人	31
アバル人	483	ネネツ人	30	アバザ人	29
レズギン人	383	エベンク人	28	アッシリア人	25
ダルギン人	287	ハント人	21	タート人	22
クムイク人	228	チュクチ人	14	ベルジ人	19
ラーク人	100	エベン人	12	チェコ人	17.8
タバサラン人	75	ナナイ人	10.5	ショール人	16
ノガイ人	60	コリャク人	7.9	スロバキア人	9.4
ルツル人	15	マンシ人	7.6	ベプス人	8.1
ツァフル人	14	ドルガン人	5.1	ウジン人	6.9
アグル人	12	ニブヒ人	4.4	カライム人	3.3
ラトビア人	1439	セリクプ人	3.6	ハルハ・モンゴル人	3.2
バシキール人	1371	ウルチ人	2.6	イジョル人	0.7
モルドワ人	1192	サアム人	1.9	その他の民族	66.4
ポーランド人	1151	ウデゲ人	1.6		
エストニア人	1020	エスキモー人	1.5		
チェチェン人	756	イテルメン人	1.4		
ウドムルト人	714	オロチ人	1.2		
マリ人	622	ケート人	1.1		

〔表2〕連邦構成共和国内の自治共和国、自治州、自治管区、地方、州、地区、市、町の数と村ソビエトの数（1980年1月1日現在）

	自治共和国	自治州	自治管区	地方	州	地区	市	市区	町	村ソビエト
ロシア連邦共和国	16	5	10	6	49	1805	1004	366	2065	22681
ウクライナ共和国	—	—	—	—	25	479	412	120	899	8522
ベロルシア共和国	—	—	—	—	6	117	96	23	111	1506
ウズベク共和国	1	—	—	—	11	148	93	17	95	1061
カザフ共和国	—	—	—	—	19	218	82	29	193	2276
グルジア共和国	2	1	—	—	—	65	51	11	61	926
アゼルバイジャン共和国	1	1	—	—	—	61	60	10	125	1061
リトワ共和国	—	—	—	—	—	44	92	7	22	528
モルダビア共和国	—	—	—	—	—	37	21	4	44	753
ラトビア共和国	—	—	—	—	—	26	56	6	37	470
キルギス共和国	—	—	—	—	3	38	18	4	31	372
タジク共和国	—	1	—	—	3	43	18	4	49	313
アルメニア共和国	—	—	—	—	—	36	24	7	33	472
トルクメン共和国	—	—	—	—	5	44	15	3	74	240
エストニア共和国	—	—	—	—	—	15	32	4	25	193
ソ 連 総 計	20	8	10	6	121	3176	2074	615	3864	41374



一九二二年を1とした国民所得の伸び。一番上は一九八一年の指数（以下、同じ）。



世界の工業生産高に占めるソ連の割合

「モスクワから、プラウ五〇〇丁、馬用すき20丁、盛土具43丁、ばね式まぐわ50丁、蒸気動力装置付き打穀機2台および馬用打穀機2台を受領した旨の補給部の電報を聴取した。

前記の用具を通知書通り分配することを決定した」

友情の道標

N・K・バイバコフ・ソ連国家計画委員会（ゴスプラン）議長は、本号でソ連の単一国民経済コンプレクスについて語っているが（40ページ参照）、このコンプレクスは、ソ連に住む諸民族の友好と相互援助を土台にしている。以下は統計から見た、この友好の若干の道標である。

一九二七—三二年——ウクライナのドニエプル水力発電所（欧州最大）の建設に、ソ連の大多数の民族の出身者が参加。そのうち1/3はロシア人。

一九三〇年5月1日——カザフ共和国のアイナ・ブラク駅で、トルケスタン＝シベリア鉄道の南・北工区の建設者たちが合流。延長一四五二kmのこの鉄道敷設には数千人のロシア人、ウクライナ人、カザフ人、タジク人、トルクメン人、アゼルバイジャン人が参加した。

一九四一—四五年——ソビエト国民のヒトラー侵略軍に対する大祖国戦争で、一〇〇〇の大小民族の出身者がソ連邦英雄の称号を授与された。内訳はロシア人七九九八人、ウクライナ人二〇二一人、ベロルシア人二九九人、タタール人一六一人、ユダヤ人一〇七人、カザフ人96人、グルジア人90人、その他である。

——カザフタンで編成された36の民族出身者から成るパンフィーロフ将軍指揮下の師団は、厳しい一九四一年冬のモスクワ防衛戦で名声を博した。

——Y・F・パブロフ軍曹が率いる24人の兵士がスターリングラードの一つの建物で防衛を続けた。これらの兵士の中にはロシア人、ウクライナ人、グルジア人、ウズベク人、カザフ人、タジク人、タタール人がいた。

——キーロフ戦車工場（チェリャビンスク市）では、戦時中ソ連の55の民族の出身者が一万八〇〇〇台の戦車と自走砲を生産した。

——ベロルシアの勤労者は、ヒトラー・ドイツ軍の占領から解放後2年半の間に、他のソ連の諸共和国から5万基以上の設備、1万台の自動車、15万頭の牛、数百万プードの穀物を受けとった。

一九五四年——カザフ共和国の処女地の開拓が始まった。開拓にはソ連全体が立ち上がり、処女地のソフホーズの名前にはモスクワ、レニングラード、ミンスク、キエフ、アルマビル、ソーチなど、ソ連各地の地名が使われた。

一九八一年——一七〇〇万人以上の党員を擁するソ連共産党の第26回大会が開かれた。大会にはソ連の66の大小民族の出身者が参加した。

——ソ連諸民族の70余りの言語で、約19億部の本が出版された。

——ドラマ劇場は45の言語で劇を上演した。

〔表3〕共和国別の工業生産高の伸び
（本文中の注を参照）

	1940年	1981年
ロシア連邦共和国	25	478
ウクライナ共和国	19	276
ベロルシア共和国	23	699
ウズベク共和国	24	415
カザフ共和国	28	902
グルジア共和国	17	292
アゼルバイジャン共和国	11	138
リトワ共和国	1	61
モルダビア共和国	17	903
ラトビア共和国	1	46
キルギス共和国	18	690
タジク共和国	46	874
アルメニア共和国	21	1008
トルクメン共和国	17	206
エストニア共和国	1	49

〔表4〕ソ連の主要工業製品の生産高

	1922年	1981年
電力（10億KWh）	0.8	1325
石油（100万t，ガスコンデンセートを含む）	4.7	609
ガス（10億m³）	0.03	465
石炭（100万t）	11.3	704
粗鋼（100万t）	0.3	149
鋼材（100万t）	0.3	103
化学肥料（有効成分100％換算，100万t）	—	26
セメント（100万t）	0.1	127
あらゆる種類の織物（100万m²）	460	10952
皮靴（100万足）	6.8	739



実質所得の伸び



工業生産高の伸び

福祉

国家としてのソ連は、自国民に何を与えたのだろうか？　一九八二年のソ連市民の生活状態を60年前のそれと比較するのは意味がない。一九二二年には若いソビエト共和国は極東で干渉軍と戦った。ボルガ川流域地方では飢饉が猛威をふるい、国土は第1次世界大戦と国内戦の二つの戦争で荒廃しきっていた。

第2次世界大戦後の復興期の困難を考えると、五〇年代の国民の生活を現代のわれわれの生活と比べるのも無理がある。だから、発達した社会主義社会の経済を基盤にして、ソ連が国民福祉の向上でめざましい成功を遂げた六〇年代半ばを比較の対象として取り上げるのが妥当だろう。

一九六五年には家族1人当たり月一〇〇ルーブル以上の収入があるのは人口の4％にすぎなかったが、一九八一年では人口の半数以上になった（この間主要商品の価格とサービス料金は変わらなかった）。

一九七六年から一九八〇年までの5年間に、社会的消費基金から合計五二七〇億ルーブルの特典と給付が国民に提供された。この額は一九五六年から一九六五年までの10年間のそれよりもはるかに多い。

社会的消費基金のおかげで、ソ連市民は教育、技能資格の向上、医療のための費用を出さなくてよい。社会的消費基金からはまた、諸手当、年金、奨学金、年次休暇中の賃金、サナトリウムや休息の家の割引パス（多くの場合は無料）の支払いが行われる。幼稚園、保育園の児童の養育費も、大半が社会的消費基金から出る。

ソビエト国民の福祉増進を示す重要な指標は、住宅建設の規模である。最近15年間に、一億六〇〇〇万人のソビエト国民が居住条件を改善した。同じ期間に総面積一五九万一〇〇〇平方mの住宅が建設された。家賃の基準はソ連邦結成6年後の一九二八年に決められ、その後変わっていない（1平方m当たり最高13・2コペイカから最低〇・55コペイカまで。1コペイカは約3・6円）。公共料金は一九四六年以降据え置かれたままである。ソ連の1世帯の家賃は、平均してその世帯の収入の2・7％である。

ソ連の平均的世帯のその他の幾つかの支出の内訳を見てみると、食費は収入の32％、衣服、靴は16・5％、税金は8・1％である。

60年のうちの1年

ソビエト社会主義共和国連邦結成以来60年間のうちの1年間を取り上げて、ソビエト国民が1年間に受け取ったものを見てみよう。一九八一年を例にとると——

——実質所得が3・3％増大した。

——消費品の販売高は一一八億ルーブル、4・4％増えた。

——必需品の小売り価格と生活サービス費は変わらなかった。

——二〇〇万戸のフラットおよび個人住宅が建設された。

——1年間で一九〇万戸のフラットにガスが引かれた。四〇万戸のフラットおよび個人住宅が修理された。

——合計一一〇万人の生徒を収容する普通教育学校、五五万人の園児を収容する幼稚園・保育園、ベッド数六万一〇〇〇床の病院が開設された。

——保養地、休息の家、ペンション、ツーリスト基地で五八〇〇万人が休暇を過ごした。1年間でサナトリウム・保養施設の収容人員は四万人増えた。

——子供のいる家庭への国家援助の強化に関する政府決定が実現され始めた。従来の産前産後の休暇に加えて、子供が満1歳になるまでの母親の育児休暇が部分的に有給になった。2人以上の子供を持つ女性の有給休暇が3日間延長された。

——一四〇〇万人の年金生活者の年金が増額された。

——一九八一年に直接消費（住宅建設、社会・文化建設を含む）に使われた国民所得の割合は80％だった。

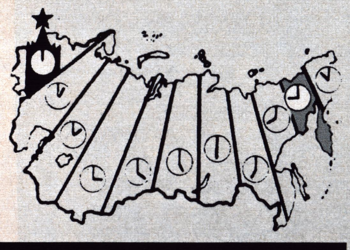
時間帯に沿って ①

ソ連の国土はヨーロッパとアジアにまたがり、その面積は二二四〇万平方㎞余り。

ソ連の大陸部は、最南端の炎暑のクシカ（トルクメン共和国）からシベリアの極北の陰うつなチェリュスキン岬まで40度以上の緯度にわたって広がっており、緯度から見るとソ連の領土は、西のビスリンスカヤ・コサーから東のデジネフ岬（チュコト半島）まで一七二度以上にまたがっている。

ソ連の領土には世界の24の時間帯のうち11の時間帯がある。西のカリーニングラードで日が沈むころには、もう東のカムチャツカでは朝を迎え、日が輝いており、春から秋までの期間はソ連のどこかで必ず日が出ているわけである。

日の出に従ってソ連の各地点を順に追って見よう。



第XI時間帯
カムチャツカの岸辺で

カムチャツカ半島はソ連で最初に新しい一日を迎える地域の一つだ。この土地では火山が噴煙を吐き、ソ連のどこよりも地震が多い。はるか熱帯で発生する台風は北上して、カムチャツカで猛威を振るう。それにもかかわらずこの地では正常な生活が流れている。ソビエト政権になってからカムチャツカは、ソ連の最も重要な漁業地域の一つになった。また火山学、漁業・海洋学、狩猟業・毛皮獣養殖などの重要な研究所がある。

（26、32、34、38ページに続く）

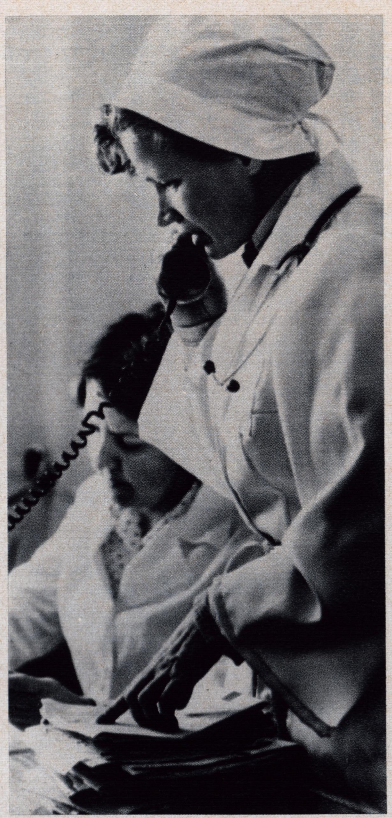


海から見たカムチャツカ半島

私の生涯のいちばんの思い出 ①

ソ連邦結成60周年にあたって、本誌編集部はさまざまな共和国に住むさまざまな年齢や職業の人々に、生涯でいちばん思い出深いエピソードを語ってもらった。

寄せられたエピソードの中には、幼年時代の思い出、人生の選択、初めて社会人として働いた日のこと、発見、手柄、仕事の上での成功、家庭の幸せなど、さまざまなものが見られる。これらのエピソードは、もちろん個人的なものだが、同時にそれは、人々、国民、国の生活を構成する一部分でもある。なぜなら、2億7000万ソ連国民の1人ひとりの運命は、祖国の運命と切り離しがたく結びついているからである。（ほかに28ページ、36ページに掲載）



医師への道

リジア・マカロワ（45歳）

モスクワ第115地区診療所医師、ソ連最高会議代議員、赤十字社・赤新月社同盟モスクワ市委員。

子どものころ、私は大の文学好きだった。作家かジャーナリストになることを夢見ていた。だが、人生は別の道をたどった。7年生に進級したとき、ファシスト・ドイツとの戦争で父が死んだ。母のもとには私たち5人の子どもが残された。私は長女だったので、家庭を助けなければならなかった。私たちの家の近くに医学専門学校があった。近かったということが私の人生を決めた。

学校で私は看護婦になる教育を受けた。当時、看護婦がどんなに必要だったことか！　戦争はすでに終わっていたが、戦争で傷ついた人々はその後もずっと病院のベッドに満ちあふれていた。私はさまざまな悲惨を目にした…

そのとき、私にとって主要なものは何だったか？　私は人を助けることができる、患者の苦しみを和らげることができる、という自覚だった。ただ、そのためにはつねに新しい医学知識が必要だ。私は医者にならないわけには行かないことを悟った。

医科大学に入ったが、苦しかった。昼は働き、夜勉強した。中等学校は卒業しなくてもいいと言われた。大学を卒業すると、私は自分が生まれ育った地区の診療所に配属された。患者の多くは、娘のころから私を知っていた。だから、みんなに私が本物の医者に成長したことを納得してもらうために、全力を投入しなければならなかった。

こうして、再び徹夜の勉強。便覧を繰り、専門誌を研究した。なぜなら、医学における経験は、勤労と忍耐と仕事に対する誠実な態度の結果であることを知っていたからだ。そのとき、医学は奇跡をもたらすことができるだろう……



新しい鉱石

ラウフ・バラトフ（61歳）

タジク共和国科学アカデミー副総裁、地質・鉱物学博士、タジク共和国科学アカデミー地質学研究所長。

「教授、不死になったご感想は？」——さきごろタジキスタン（タジク共和国）を訪れたカナダの学者が、私にこうたずねた。カナダの学者は、私の名の付いたバラトビトという新しい鉱物のことを頭においてこう言ったのだ。この鉱物は、私の教え子がアライスキー山系を調査していたときに発見したもので、このうす紫の鉱石には多くの希有元素が含まれている。バラトビトの化学方程式は長く、優に一行分はある。

綿密な検査の結果、新しい発見であるとされ、鉱物は国際鉱物学会に送られて、承認を得ることになった。

鉱物の発見者はその鉱物に私の名を付けることを申し入れた。この希望がいれられて、私の判断する限りでは、前例のないことが起こった。新発見の鉱物には、故人となった学者の名が付けられるのが普通だったからである。

鉱物のリストにバラトビトが載ってから、私はこれまでよりも用心して街路を横切るようになった、とカナダの学者の質問に答えた。

そもそも私は人生が好きだし、楽天家である。私は学者として運がよく、これまでいくつかの鉱床を発見してきた。その一つである螢石の鉱床は、いまだに操業している。

しかしここで私の運命の〝主産地〟について話したい。私が生まれたのは、タジキスタン北部の小さな村プラタンである。私の同郷人の中には、タジク共和国全土に知られている人々——名医、人民女優、コルホーズ議長、文学者がいる。

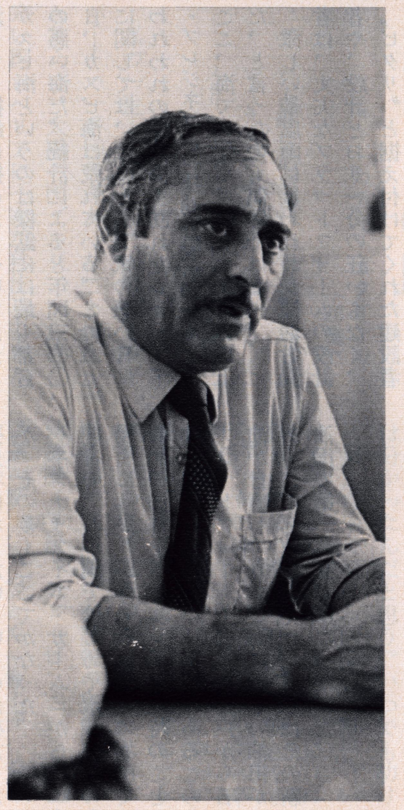
私の村の生活には全共和国住民、全共和国の運命が反映している。これが肝心なことだ。また素晴らしいものについて言えといわれれば、わが地方全体について話さねばなるまい。わが地方は教養のある文化的な人々の産地となっている。



みんなの井戸

ドミトル・ストラタン（60歳）

モルダビア共和国の首都キシニョフから30kmのペレセチェノのまちに居住。建設工。家を建築し、冬の間ワインや野菜、果実を保存しておく酒蔵を建て、堅



油田の発見

イスラフィル・グセイノフ（51歳）

アゼルバイジャン石油・ガス産業労働組合議長、社会主義労働英雄、ソ連最高会議代議員。

友人や同僚たち——アゼルバイジャ

固なカシのたるを作る。もう30年以上もこの仕事をしている。それに井戸掘りもやる。

私らのモルダビアでは、家を建てず、息子を育てず、井戸を掘らなかった者は無駄に人生を過ごしたと言われる。だがもし自分の屋敷内に、自分のためだけに井戸を掘ったなら、それは大きな名誉にはならない。自分の掘った井戸は、人様のものにしなければならない。だから、自分の人生を書いてみることになったら、人のためにどうやって井戸を掘ったかを書くだろう。

モルダビアでは昔から井戸掘りは名誉な仕事と考えられている。職業的経験は世代から世代に、父から息子に受け継がれる。井戸に適した場所を探すのは簡単なことではない。

私の父親は井戸は掘らなかったが、物事をよく観察する人で、いろいろな物の見分け方をよく知っていた。観察力は父親譲りかもしれない。ある日私は思い立って、自分で適当な場所を探して井戸を掘ってみた。2日間で井戸を掘り、あとの2日で煉瓦を積み上げ、それから2本柱の屋根をつけた。この井戸の水はものすごく暑い日でも息が止まるほど冷たく、とてもおいしかった。朝この水をコップ一杯飲んだ人は一日中、のどの渇きを知らないほどだった。

数日後、ある通りの住民が私の所に来て同じような井戸を掘って欲しいと頼んだ。私は同意した。その後第3、第4、第5…の井戸を掘った。

現在は水道が普及しているが、昔と同じように道端に井戸がある。そこに住む人だけのためでなく、道行く人のため、井戸水のうるおいでその先の道のりが楽になる人すべてのためにあるのだ。

ンの海底油田関係者についてお話ししたい。断言できるが、海底油田の労働者はソ連では当然の栄誉を受けている。私自身、四半世紀をカスピ海海底の石油・ガス探鉱に捧げた。ついでだが、カスピ海というのは探鉱には最も都合の悪い海だ。統計によると年間三〇〇日、カスピ海は荒れている。このことに関しては、たまたま天気の悪い日にわれわれの採油場を訪れたレオニード・ブレジネフが、採油労働者の仕事——ここ、海での仕事は、ヒロイズム以上だ、と言ったのも偶然ではない。

激しい暴風雨にはわれわれ採油労働者は、丈夫なプラットフォームの設計者や、設計どおり一分の狂いもなく、〝ピタリ〟と据え付けてくれた建設者のことを深い尊敬の気持ちで思い出す。カスピ海に一〇〇〇以上の鉄の島が作られ、中でも有名なネフチャヌイエ・カームニ島への通路＝高架橋が二〇〇kmにもわたって伸びているというのは、考えてみれば大変なことだ。

ネフチャヌイエ・カームニで私は長年働いた。私はここで職長になり、50カ所ほど油井を掘削した。油田の第一発見者になりたいというのが夢だったが、その夢もここでかなった。

ネフチャヌイエ・カームニから12km沖合の、わが国ではじめて水深84ｍの場所に〝島〟が作られた。この場所で最初の油井をボーリングした時のことは一生忘れられない。水深のあるこのプラットフォームで掘った井戸から石油が自噴し、カスピ海に新しい油田があることを教えてくれた。私はその新油田の第一発見者になったのだ。



賞品の外套

アンナ・ロシカリョワ
（56歳）

ウクライナ共和国ザポロジエ市にあるドニエプル水力発電所の再建（一九四四—五〇年）に参加。青年女子作業班の指導者として英雄的な労働に対して一九四八年にレーニン勲章が授与された。

……破壊され、飢えたザポロジエでの一九四四年の冬の日を思い出す。戦前まではドニエプル水力発電所がそびえ立っていた場所の廃虚の真ん中で、モッコをかついだ数千の人々が動きまわっている。全国からここへやって来た人々だ。みんなは手でガレキを取り除き、焼けただれた鉄骨、大量のレンガを手で貨車に積み込んでいた。

私たちの作業班には12人の娘がいた。班長の私が18歳、他の娘たちは私より1、2歳若かった。細い腕に重いモッコ、氷がくっついたジャケツ。私たちは働いた。何人かの技師たちが近づいて来た。その中に毛皮裏の革外套を着た男がいた。アメリカ人だった。彼は私たち一人ひとりに順番に声をかけ、同じ質問を繰り返した。

「寒くないかい？」

「いいえ」と娘たちは答えた。

いちばん元気のいい娘が言った。

「モッコをかつぎな。そうすりゃ、あんたも暖かくなるよ」

恐らくこれは、発電所を再建しても意味がないと決め込んでいた外国人専門家の一人だったのだろう。あとになって私たちは、アメリカの新聞が、ドニエプル水力発電所では女性が力に余る仕事にたずさわっていた、と書いたことを知った。

果たして海の向こうでは、わが国では女や未成年者までが前線に出た男に代わってあらゆる仕事を引き受けていたこと、党の呼びかけに応えて、できるだけ早く電力と鉄を生産するために志願者たちがザポロジエに集まっていたことが理解できただろうか……

私たちは精一杯働き、つましく、その代わり仲よく暮らした。あるとき、月間の仕事の総括で、私たちに報賞が与えられた。スーツ6着分の服地と流行の外套1着だった。

作業班会議で次のように決まった——布地を上手に裁断して、スーツ6着の代わりに、全員のためにワンピースを12着縫うこと。たった1着の外套は、いちばん優秀な働き手ニーナ・フェドレンコにやることに決めた。だが、このの豪華な外套の持ち主になったニーナは寛大で、デート用にそれを私たちみんなに順番に貸してくれた。私たちはそれぞれ背丈がちがったので、外套の裾は毎日、伸ばしたり縮めたりされた……



夫と一緒に

タイガの町

カチネ・ゴタイーゼ
（23歳）

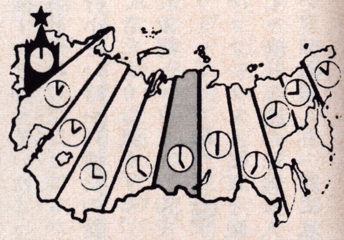
バム鉄道の建設・組立列車〝グルズストロイバム〟のエコノミスト、ブラーツク工業大学学生。

私の一生——まだとても短いものだが——で一番印象深かったことは何か、と言えば、太陽の国グルジアから遠く寒い国シベリアに一家が移住して来たことだと思う。なにしろ、移住という事実そのものが忘れ難い。このことは私の両親、姉妹、そして私自身の運命をずい分大きく変えた。

何と言ったらいいか、初めは大変だった。でも多分、ここ、バム鉄道で私は分かったんだと思う。いつでも助けに飛んで来てくれる同情心の厚い、いつも朗らかな人に取り囲まれていれば、厳しい気候の変転や日常の不便さなどというものは一〇〇倍もやすやすと辛抱できるということを。そしてほら、私たちのまち、ニヤがひっそりしたシベリアのタイガの中で成長した——2階建てや5階建ての設備の完備した家、幼稚園、学校、ショッピングセンター、鉄道の駅……。私たち一家もずい分と大家族になって（弟のワシリーと妹が2人生まれたし、私は結婚したし）、建設・組立列車の一員としてもっと東に出発しようとしている。バム鉄道沿線にもう一つまちを作るために。



北方の少数民族



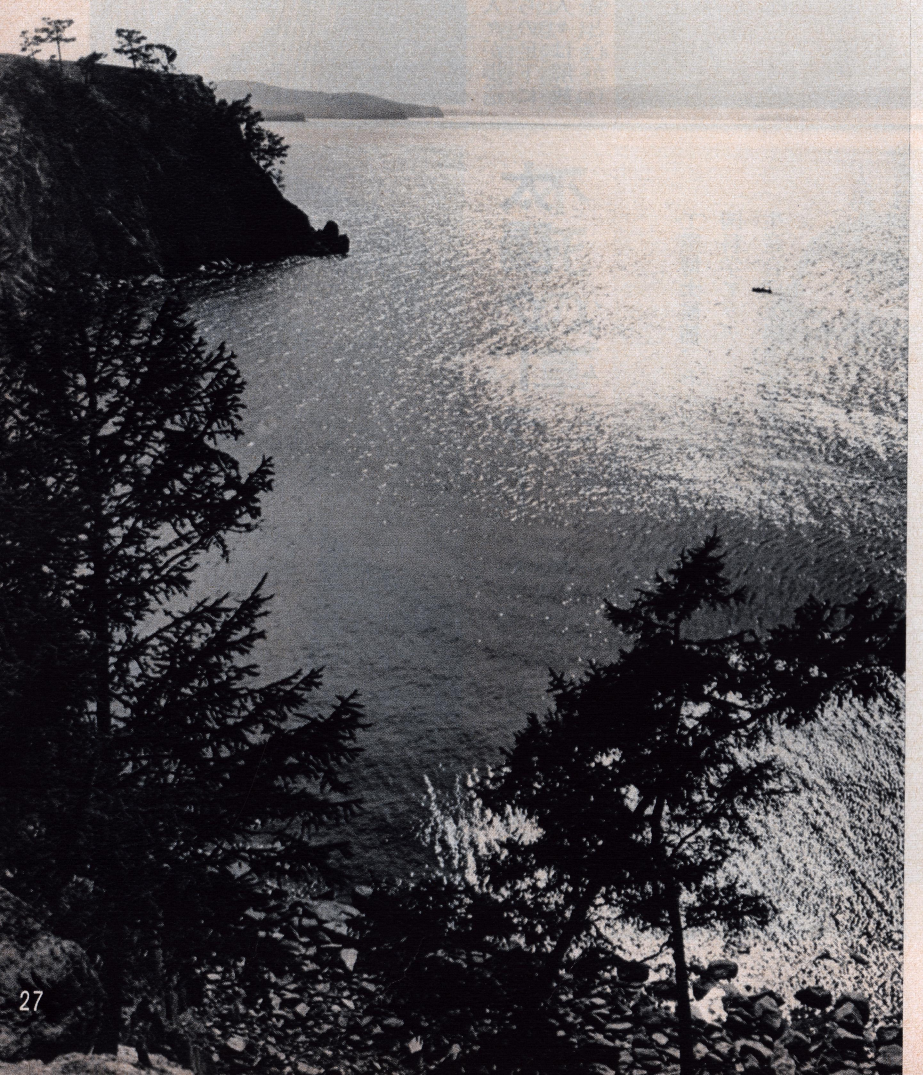
第Ⅶ時間帯 アンガラ川の鉄橋

シベリアの河川のなかでもアンガラ川はとくに荒々しい。バイカル湖からエニセイ川まで流れるこの川は、航行できる区間が分断されていて、端から端まで一貫して航行できない。しかし航行できる区間の流れは非常に速いので、シベリアの寒気さえもこの川を凍結できるのは、年間80—90日にすぎない。

アンガラ川はバイカル湖を水源とする唯一の川、バイカル湖の水の唯一の排水路であるので、その起点に近いところの水は清澄、透明である。

バイカル湖から河口までの落差は三八〇m。水力発電所建設者にこれ以上のよい立地条件はない。そのうえ鉱物資源は豊富であり、鉱物の溶解は、安い電力がふんだんにあるので十分に採算がとれる。アンガラ川の水源近くにイルクーツク水力発電所が建設され、その六〇〇km下流にブラーツク発電所、さらにその下流にウスチイリムスク発電所が建てられた。

（32ページに続く）



バイカル湖



冬のアンガラ川の鉄橋



母親の悲しみ

アリベルタス・ラウリンチュカス（54歳）

リトワ共和国の新聞「チエサ」の編集長

生涯を振り返ってみると、記憶に残る出会いというのがたくさんある。でももし私が自伝を書くとしたら、ある一人の女性との出会いを絶対書くだろう。その女性とは知り合いではないが、生涯ずっと知っていたような気がする。会話を交わしたことはなかったが、ずい分小さい時から彼女の賢い言葉を聞いてきたような気がする。数日前、生まれ故郷シャウリャウ市でソ連の対ヒトラー・ドイツ戦（一九四一—四五年）中、ファシスト占領軍と戦ったソ連軍リトワ第16師団の参戦軍人が一堂に会した。参戦軍人と一緒に私はまちの通りを行進した。何千人もの人々が歩道を埋めた。かつての軍人たちの足下に花が投げられた。こうして人々は解放を闘い取った平和に対し、愛と心からの感謝を表わしたのだ。

急に一人の女性が私の方に近付き、花束を差し出し、キスして去った。行進中だったので私はそのまま前に進んだが、その女性の目と白髪はちらっと見ることが出来た。

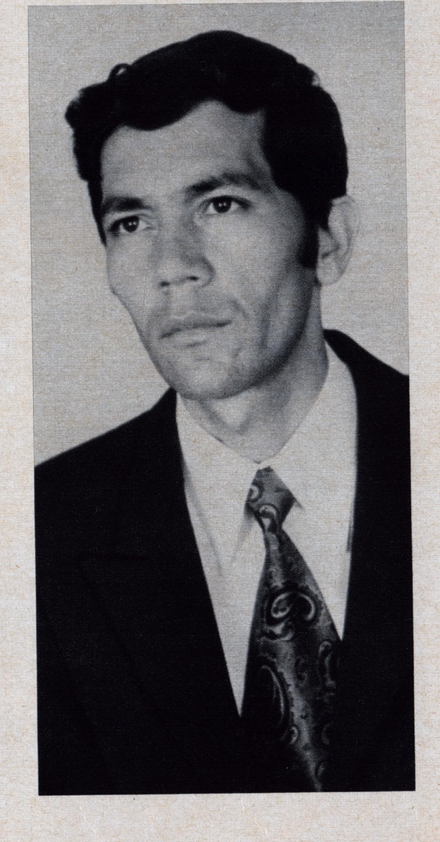
なぜなんだろう？　なんで私に花を？　恐らく、帰らぬ息子を持つ母親だろう。そう思って私は行列からはずれ、その女性を見つけようと引き返した。歩道には大勢の女性が立っていたが、求める人はいなかった……

その日の夕方、私はテレビを見ていた。ニューヨークの国連ビル（国連軍縮特別総会が開かれていた）の近くで行われた平和支持者の大規模なデモがテレビに映っていた。そして突然、群集の中に私は見つけたのだ。

——数時間前、私に花束を贈ってくれたあの母親の顔を。いや、それはあの女性に似ていただけの別人だった。多分、デモに出て来た米国婦人だろう。彼女には息子があり、息子を戦争で死なせたくないと思ったのだろう。

両手に花やあるいは平和を求めるスローガンを握りしめた母親は、どこの大陸に住んでいようと面影が似ている。

そういうわけで、もし私が自伝を書くようなことがあったら、必ず私の母についての話から始めようと思う。



太陽クーラー

バイラム・ビャシモフ（30歳）

工業博士候補、トルクメン共和国科学アカデミー「太陽」学術生産合同太陽冷房装置部副部長。

太陽を人の役にたたせるソ連最初の学術機関で働くことができて、幸せだ。

……年間の日照日が三〇〇日にのぼり、日陰の気温が45度Cということがどういうことか、このような炎暑にうだる人々の気分がどうかが分かれば、中央アジアのトルクメン共和国の人間にとって、炎暑を逃れて休息できるひんやりした住居を持つことが、どんなに大事かが分かろう。私はトルクメン人で、この共和国で生まれ育ったから、夏の日中の冷気の有難さをよく知っている。

だから新築の鉄筋コンクリート・アパートの部屋の冷房問題が、いかに緊要なものかが分かる。いまそのために広く使われているのが、電力を非常に食うクーラーである。

では太陽に冷却をさせたらどうだろう。ちょっと考えると、辻つまが合わないようだが、大学在学中にこの問題に興味をもった私は、いまわが学術生産合同でこの問題に取り組んでいる。

われわれの考案した装置の作動原理は説明しないが、この「太陽クーラー」は普通のものに比べて、1世帯当たり電力消費量が1/6ないし1/9になり、さらに1日60度の温度の湯を一〇〇ℓ各家庭用に供給する。

近い将来エネルギー源としての太陽は、とくにわがトルクメニアで、ますます大きな役割を果たすだろう。われわれの子供は太陽熱を利用するエンジン、クーラー、冷凍庫、温室、発電所の恩恵にあずかるだろう。だから年をとって若いころの思い出を書くときは、きっとソ連の太陽熱利用の初期について書くことになろう。



私のヒロイン

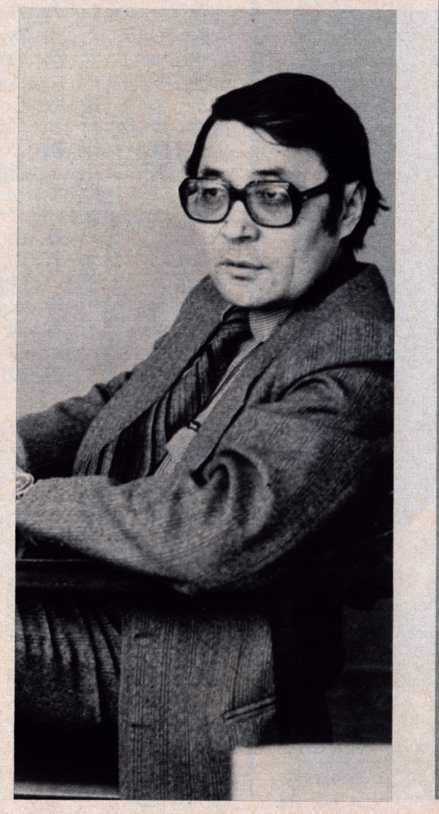
ビヤ・アルトマネ（53歳）

ソ連人民俳優、ライニス記念リガ芸術劇場女優、ラトビア最高会議代議員、ソビエト平和擁護委員会副委員長。

私は農村で生まれた。多分、自然が大好きなのは、そのためだろう。地面を掘り、土の湿り気を感じ、そのにおいをかぐのが大好きだ。子供時代は苦しかった。私が生まれる数カ月まえに父が亡くなったそうで、母は私を養うために日雇いをして働いた。私自身、七つの時から家畜の世話をした（ラトビアは一九四〇年にソ連の一員になった）。

母と共和国の首都リガに移ってから（これは一九四六年のことだった）、私は劇場通いをはじめ、芝居にすっかり夢中になった。ある日、一大決心をして、芸術劇場付属スタジオの入学試験を受けに行った。どうして合格したのか、今でも不思議に思う。

一九六四年、私は映画『血のつなが



不死の草

カディル・オムルコフ（41歳）

作家、キルギス共和国功労芸術家、キルギス共和国レーニン・コムソモール賞受賞者。

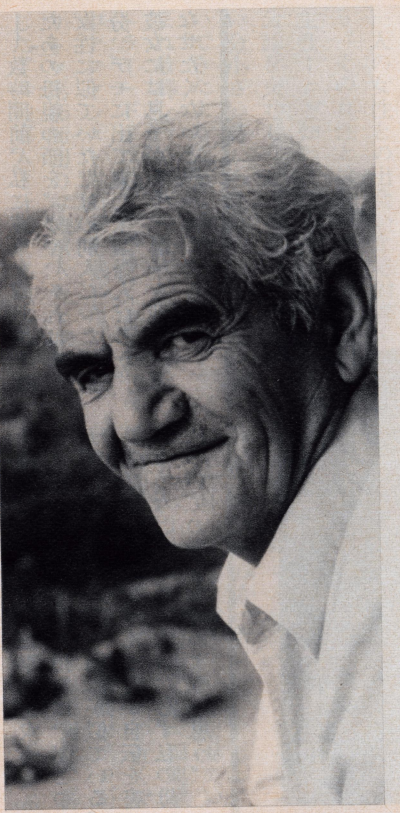
私の子供の頃の思い出は、山村ジャラムイシでの日々と、不運から若くして白髪になってしまった母のことだ。父は対ファシスト・ドイツ戦（一九四一—四五年）で前線に行き、戻って来なかった。父をしのべるものは何も、写真さえ残っていなかった。あるとき父は誰に似ていたのかと聞いたら、母はお前にそっくりだったと答えた。長いこと私は鏡とにらめっこしたが、ついに父親の面影を見つけられなかった。

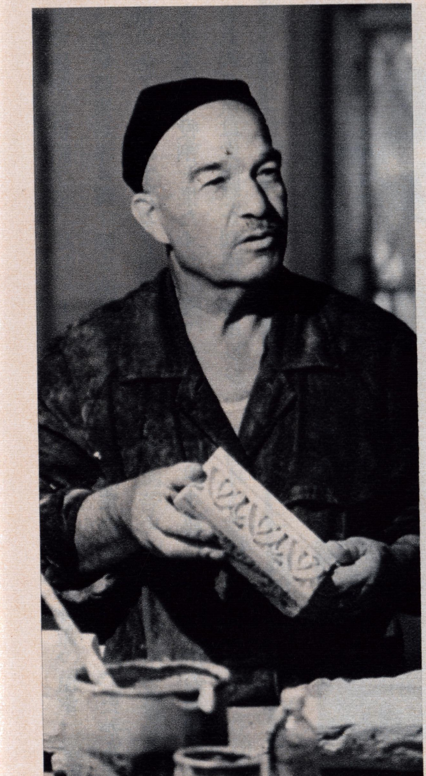
私はよく母と山にたきぎを取りに行ったが、ある日、ヒバリの巣を見つけ、壊そうとした。そのとき母はこんな話をしてくれた——

ヒバリは特別な鳥で、不死の草がどこに生えているか教えてくれるんだよ、不死の草を善人だけにくれるんだよ、と。戦争で父を亡くした少年の私は、

り』で主役をやることになった。
3人の遺児を抱えた兵士の未亡人ソーニャは、戦争（一九四一－四五年の対ファシズム戦争のこと）のため故郷ラトビアから遠く離れたロシアの片田舎にほうり出されてしまう。しかしソーニャは不幸に打ちのめされず、善良さ、同情心、魂の柔軟さをそのまま持ち続けた。そしてまるでそのほうびのように幸せが舞い込む。病院から帰還した兵士がソーニャに恋をする。二人の強い愛は、行く手をさえぎるあらゆる障害を乗り越えて、一日一日が人生最後の日となりかねなかった、あの悲劇的で英雄的な戦時下で花開く……
ソーニャを、私はまるで自分のように演じた。私もヒロインのように貧しい家庭に生まれ、土が好きだ。ソーニャのように私もわが子の幸せと平穏を世界中の何よりも尊ぶ母親だ。
映画が封切られると、私は名が知られるようになり、観客に認められ、賞ももらった。しかし、大事なのは別のことだった。ある日私はキエフ空港の待合室で便を待っていた。近くで年配の掃除のおばさんが床をふいていた。多分、私が邪魔だったのだろう。おばさんは怒ったような視線を私に投げかけた。ところが急にやさしく笑いかけたのだ――〝まあ、ソーニャじゃないの！〟。私は胸が一杯になって何も言えなかった……
それから私はいろいろな役をやった。しかし『血のつながり』を撮った時に感じたような幸せはその後二度と味わえなかった。

どんなにかこの草が欲しかったことか。みんなが不死であったら！　私はその後、心やさしい人間であろうと努めた。
大きくなってからやっとこれは伝説だったのだと分かったのだが、母が私の心に善良さを育てようとしたこの生活の知恵にはずっと感謝している。
物を書きはじめてから20年になる。モスクワで大学を卒業した。最近は人間と自然とのかかわり合いをテーマにした作品を多く書いている。はやっているからではない。私はこの問題を道徳問題としてとらえているのだ。人間は〝万物の霊長〟というよりはむしろ万物の良心だと思う。山の貯水池建設の問題に取り組んでいる若い学者を書いた私の最新作『地球の事業』も、このテーマを扱っている。
キルギス共和国にはこのような巨大な貯水池が数カ所ある。そのうちの一つは有名なトクトグル水力発電所のダムで生まれたものだが、私の小説の最初の書評会はここで生まれた。書評会には建設工、学者、据付け工が集まった。この会で87歳の建設現場の古老が発言した。彼は、小道さえもなかった花崗岩の山肌に、発電所建設関係者の今あるまちが出来ていったありさまを語った。当時、20年前にこの人は、新しい都市は緑あふれるまちでなければならないと言ったのだ。彼は方々の植物園から苗や種を取り寄せ、未来の街路に植えた。今、このカラクリ市は緑の非常に多い都市になり、今度はここカラクリ市から植物園に樹木やかん木の苗が送られていく。
この古老の話を聞きながら私はあの子供のころ母から聞いた伝説を思い出した。この人にならヒバリが不死の草を贈ったであろうと思った……





先祖の地で

ベクジャン・アコピヤン（62歳）

イランのイスファハン州の小さな村の出身。一九八一年12月ソ連に永住するため、一家をあげてソ連に移って来たばかり。

私と家族が自由を獲得してから1年近い。そう、そう、そのいきさつを説明しておかなきゃならない。私はほかの国で生まれ育ち、子供のときから窮乏とどうしようもない絶望にあえいできた。あまりにも暗い人生だったので、もう思い出すのもいやだ。家族や子供の誕生にかかわりのあることだけが、たのしい思い出だと言える。
数年前、どうしようもなくてソ連大使館に、先祖の土地ソビエト・アルメニアに帰る許可を申請した。帰国希望者は非常に多かったので、辛抱強く自分の番がくるのを待った。
そしていま私たちは先祖の地にいる。国境を越えたときの気持ちは、まさしく感無量だった。とうとう私の夢がかなったのである。
私たちはアルメニアの首都エレバンから30kmのアルタシャトという小さな町に落ち付いた。私たちは1週間たたないうちに三部屋の設備のよい住宅をもらった。いま二人の息子タテボスとアンドラニクは働いているが、来年はエレバン大学に入るつもりでいる。そのための費用はいらないので大助かりだ。小さい子供のノリクとロベルトは、学校に通っているが、これも無料だ。まもなく娘のアガブニと息子のカロも、家族とともにイランからここへ来る。
一つだけ困惑しているのは、私たちがアルメニアやアルメニア国民のためにまだ何もできないでいるのに、生涯かけてめざしてきたあらゆるものを手に入れたことである。
私はセンチメンタルな人間ではないが、その私が心底から感動した一つのことを話したい。私の健康はあまりよくないが、ここへ移ってきてから働くことに決めた。とはいってもすでに年金は受け取れることになっていた。いま私は建設組織で働いているが、やっぱり夏に身体をこわし、長く治療しなければならなかった。しかし医療費は全く無料だった。その上、疾病証明書によって私の賃金の大部分が支払われた。もしイランにいたとき病気にかかったら、それこそ身の破滅だったろう。
そしてそのとき私は、社会やわが祖国に何が必要かが分かった。

漆喰のかけら

アフラド・ラフマトフ（53歳）

タシケント学術・生産修復工房
修復師

私はタシケントの多くの古い建築物の復旧にたずさわってきたが、14世紀の名建築アブドルカスィム回教学院（メドレセ）の修復作業は、私にとってとくに印象深い。そのわけはこうだ。
子供のころ私はほかの子供たちとよくメドレセの廃虚で遊んだ。何かナゾめいたところのある片隅が、私たちに気に入っていたのである。ある日私は、砕けた煉瓦の山の中から、とてもすてきな装飾の跡が残っている漆喰のかけらを見付けた。装飾の絵には見覚えがあった。同じような互いに交差する線をどこかで見たことがあった。
私は家にかけらを持ち帰った。銅の打ち出し細工師だった父は、ちょうど銅の盆を作り終えようとしていた。それを見てハッと思った。盆の模様は見付けた漆喰の絵模様に全くといってよい位よく似ていた。父にかけらを見せると、じっとそれを見詰めていたが、やがてこう言った。
「これを作ったのは腕のいい工匠だ。新聞によると、サマルカンド、ブハラ、ヒワで古い遺跡の復旧が始まるそうだが、いつかこのメドレセも復旧されるに違いない。先人たちの才能と愛情がつぎ込まれている過去の創造物は、人々の美の尺度となるものだからな。わしたちは先祖を敬い、後に続く子孫に対する責務を果たすことを学んでいる。そうすればそれぞれの世代が、時代をつなぐ環のようなものになり、過去と未来は断絶せずにつながる。自分の国の古い遺跡に無関心な人は、自分の国にもふつう無関心だ」
私はメドレセの廃虚に駆け戻って遊んだが、もう廃虚を見る目は今までと違っていた。そして自分の手でこの建物を新しく建て直そうという夢がふくらんだ。
年月が経って学校を卒業し、ほんとうに修復師になった。そしてある日私たちの工房はアブドルカスィム学院（メドレセ）の修復工事の仕事を受けた……数多くの復旧作業にたずさわり、もう一人前の専門家になっていた私が、どんな気持ちで子供の時から慣れ親しんだ廃虚に足を踏み入れたかは、話すまでもなかろう。メドレセの復旧工事は数年かかり、少なからぬ工費がかかった。
完成式のとき、建物は国の手で保存されると発表された。私は子供のころに見付けた漆喰のかけらと父親の賢明な言葉を思い出した……



第Ⅳ時間帯

北極圏のウラル

ヨーロッパとアジアの二つの大陸はウラル山脈で、ウラル川越しに相まみえる。

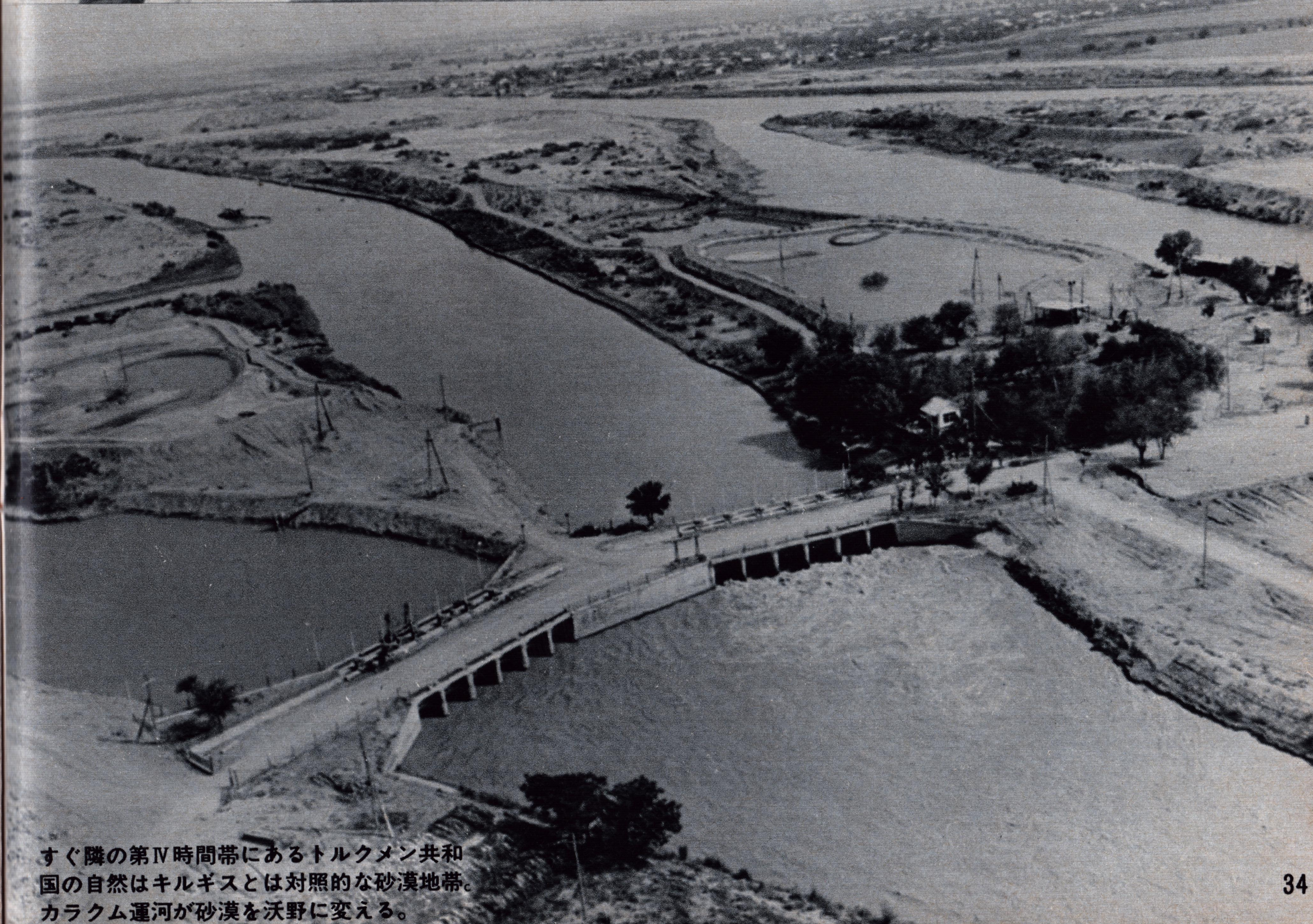
ウラルは南のカスピ海沿岸から北へ向かって進む大トカゲそっくりである。このトカゲは北氷洋まで達したのち、冷たい塩水にもぐって、すぐワイガイ島となって浮上する。そのあとまた氷の水にもぐって、やがてまた浮上するが、それがノーバヤ・ゼムリャーである。ウラル山脈はひたすら北に真っすぐに延びている。ここでは夏の昼はどこよりも長く、冬の夜はどこよりも長い。空気は清冽で、白い沈黙の世界が支配している。さらにトカゲはまた水にもぐり、水から頭と前足（ゼムリャー・フランツァ＝ヨシファとシュピツベルゲン）を出す。

わがカメラマンが訪れた極地ウラルの地形は、ひどくばらばらに分かれている。岩の柱はツーリストに人気がある。

岩の柱が連なる北極圏内のウラル山脈

キルギスの峰に挑む登山隊





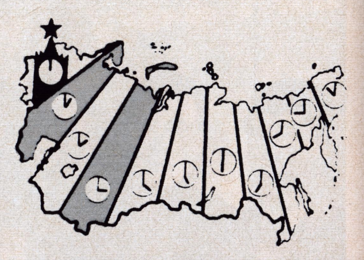
すぐ隣の第Ⅳ時間帯にあるトルクメン共和国の自然はキルギスとは対照的な砂漠地帯。カラクム運河が砂漠を沃野に変える。

カザフ共和国（第Ⅳ・第Ⅴ時間帯）の民族競技〝キジ・クー〟（若い男女が馬で追いかけっこをする）





グルジアの宴席ではありとあらゆるものに次から次へと乾杯が捧げられる。



第Ⅴ時間帯

キルギスの山々

山並みはキルギス共和国のシンボルである。中央アジアのこの共和国には、小麦畑、綿畑、ブドウ園やポプラの黒ずんだ木立ちの連なりから遠くからでもそれと分かる部落を抱える平地もあるが、どこからでも山が見える。白い山、煙ったようにぼんやり見える山、青い山、霧や雲の彼方にかすかに見える山――山、山である。

第Ⅲ時間帯

グルジアのワイン

グルジア共和国はカフカズ山脈を取り巻く三つの共和国の一つで、太陽と肥沃な土地に恵まれ、ブドウ園が沢山ある。

グルジアのワインは全世界に知られている。グルジアではワインの製法を身につけるだけではまだ足りない。ワインの飲み方を身につけてはじめて一人前だとされている。皆さんがグルジアに行ったら、必ずワインの大杯が運ばれてくる。「客はわれわれが神から賜ったもの」というのが、グルジアの人々の考えだ。

（38ページに続く）

タジク共和国（第Ⅴ時間帯）の舞姫エルザラ・アサノワ



私の生涯のいちばんの思い出 ③

小麦の栽培

オミルガリ・シズディクバエフ（39歳）

カザフ共和国ジャンブール記念ソフホーズの機械取扱員で、労働赤旗勲章と3級労働栄誉勲章を受けている。



7人の弟たちと（左から4人目がオミルガリ）

私は一九五七年に村の学校を卒業した。ある日父の友人で、ロシアのボロネジ市から来たアナトリー・ポリワノフという青年が、私たちの所に立ち寄った。彼はカザフ共和国の二五〇〇万haの処女地開拓を援助するために、ソ連各地からやってきた青年の一人だった。彼はすでに小麦が実っている畑に私を呼んだ。

コンバインの操縦台に上がったとき、私はふるさとのすばらしさを初めて知った。

こうして、それまで牧畜が主流だった地方で、私の穀物栽培者としての生活が始まり、私は農業職業技術学校を終えた。トラクターを受け持たされ、私はいつも下の弟たち（うちは9人のきょうだいがいた）と同乗した。初めはエルガリ、その後がヌルガリ、それからジュマガリ……。一人が学校に入ると、別の弟が助手になった。

昨年はとても幸せな年で、一度に二つ、3級労働栄誉勲章とソ連国民経済博覧会金メダルをもらった。それは私をはじめ、私の弟たち、そして私に麦畑への道を示してくれたボロネジ出身の青年に対する報賞であったと言える。

子どもたち

エルゼ・ユクスピャラフ（35歳）

エストニアのリフラ町の高校の数学教師

子どもたちは6人。長男はもうすぐ11歳になる。末っ子の息子はまだ赤ん坊。

知人はしばしば驚嘆する。今の時代に子どもが6人もですって？　そんなとき私は言う——子どもたちを見てから言ってちょうだい、どの子がよけい者に見えて？



4人の子どもたち（左からエイケ、エズロ、エレン、エルゴ）と。家族8人全員で撮った写真はまだない。

長男のエズロは動作のゆっくりした気質のおだやかな子だ。4年生だがもう数学の才能が見られる。チェスが好きだ。

エレンは何でも楽々とこなし、家の手伝いをよくやる。食器を洗い、部屋の掃除をする。そしていつも歌をうたっている。3年生。外出の時、私は安心してエレンに赤ちゃんを預けていける。

エイケは新しい生活に入ったという満足感でいっぱいだ。一年生になったのだ。良く勉強しているし、独立心の強い子だ。

エルゴとエイドは幼稚園に通っている。エルゴは家族中で一番の歌い手。エイドは一番すばしっこく、赤ちゃんを除けば家中で一番よく動き回る子だ。その赤ちゃんはもうすぐよちよち歩きするだろう。

家事は夫と二人で半分ずつ分担している。一人が仕事の時はもう一方が子供を幼稚園に送り迎え、小学生の宿題を見てやり、赤ちゃんの世話をする。料理、掃除、洗濯は4本の手で。

それぞれの心配事と喜び、困難、厄介を抱えてこうして私たちは生活している。学校の同僚は時々、私がどこから力を引き出しているのかと聞く。

もちろん子どもたちだ。ある日私は偶然、女友達が私の娘たち、エイケとエレンにどうしてママを好きなのとたずねた時、二人が、「だってわたしたちのお母さんだからよ！」と声をそろえて言うのを聞いてしまった。

女性にとってこれ以上の望みがあるだろうか？

報復

エレーナ・マザニク（68歳）



ヒトラー・ドイツがソ連に対する戦争を開始した一九四一年6月には26歳だった。彼女の夫は戦争が始まるとすぐに前線に赴いた。彼女もそのつもりだったが、できなかった。彼女たちが住んでいたミンスクをヒトラー軍が占領したからである。エレーナはパルチザンになった。

そうなってしまったので、ファシスト軍のベロルシア占領期間中私は、わが国民がベロルシアにおけるヒトラーの代行者ウィルヘルム・クーベに宣告した死刑を執行することになった。彼は無制限の全権を付与されて、総統の本営で綿密に作成された訓令をたずさえて、一九四二年にミンスクへやって来た。

クーベは行き渡った強制収容所網をつくり上げた。ここで人々は餓死し、ガス室や毒ガス車で殺された。懲罰隊が出動し、一連の地区が荒野か死の地域と化した。老人、年輩の女性、子どもは殺され、労働能力のある若い男女は強制労働のためドイツへ送られた。

パルチザンと愛国主義者たちは一致して宣告した——〝ファシスト侵略者に死を！〟　報復のときは一九四三年9月22日夜と決まった。

私はウィルヘルム・クーベの家で女中として働いていた。私はクーベのベッドに地雷を仕掛けることになっていた。パルチザンのマリア・オシポワが時限装置つきの磁気地雷を市内に持ち込んだ。いまや、いちばん困難な仕事は、それをクーベの家に届けることだった。彼は強力な特務保安隊員によって守られていた。ここへ来る者はすべて、入念に検査された。

あの寒い、だが天気のよい朝のことは決して忘れられない。私は歩いて行く。心臓は凍りつき、足がすくむ。地雷はバッグの中に入っている。

建物の通用門には、いつものように衛兵が立っていた。このときはフリードリヒだった。もうそんなに若くなく、四六時中家族のことを気に病んでいた。彼の4人の子どものために、私は一度ならずパンを持って来てやった。彼はそれを干して、ドイツにいる子どもたちに送った。

フリードリヒは私にほほえんで、1歩さがり、私を通してくれた。

「あるいは、うまく行くかも」という考えが浮かんだ。

だが、建物の隅の方から当直将校が姿を現わした。

「検査したか、フリードリヒ？」

「いま調べます、中尉どの」

「これはタオル、石ケン、浴用タワシ、下着です。きょうはお風呂の日なの、中尉さん」と私は言った。

「よろしい。で、バッグは？」

フリードリヒはバッグを開け、2本の指で薄いレースをつまみ、ハンカチを引っぱった。注意深く眺めている。白いハンカチは裏切るように黒い円盤状の地雷から滑り落ちようとしている。彼はまだ気がつかない。なぜなら、バッグの裏地も黒だからだ。

私は手でハンカチを地雷に押しつける。どうしよう？　この太い指から、どうやったら破れやすいハンカチを引き離すことができるだろうか……生涯でこれほど頭が緊張して働いたことはなかった。

「きょうはクーベさんの奥さんの誕生日で、これはプレゼントなんです。あなたが汚さないか心配で……」

私の言葉が効いて、検査は打ち切られた。

しかしまだ先に家の入口の哨所がある。再び検査があるに違いない。中庭に地雷を隠したらよいのだが。しかし哨兵に見えるところでどうやって隠せばよいのだろう。

幸いなことにドアが開いて、小犬のリュムピが階段をころがるように駆け下り、庭の一隅で吠える。哨兵はその方へ向かう。

私は中庭へ向かって駆ける。中庭の隅にゴミバケツが置いてある。バッグからぱっと地雷を取り出し、バケツに突っ込んで、上に新聞紙をかける。

それからクーベのベッドに地雷を仕掛けるまでの3時間は、息詰まる思いだったし、事態はそれまで以上にドラマチックだった。

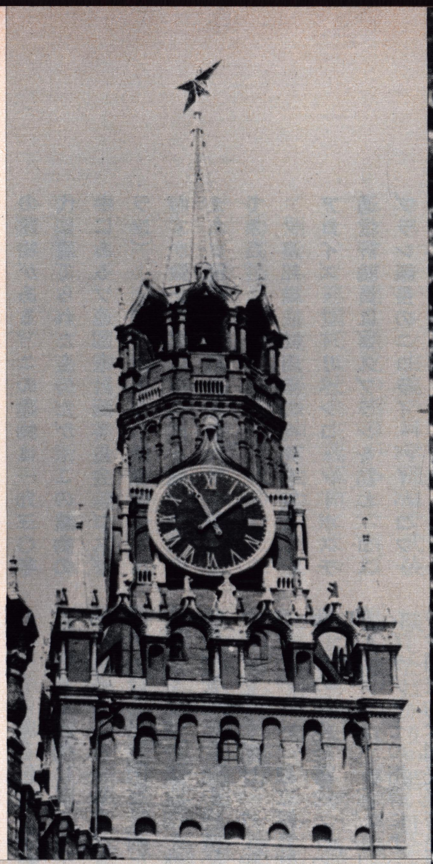
こんどは家を出なければならないのだが、仕事が終わるまでにはまだかなりの時間がある。そこで歯痛を理由に早退させてほしいと言う。

……ベルリンの任命した調査委員会が発表したとおり、地雷は0時40分に爆発した。そのとき私はすでにパルチザン隊の中にいた。

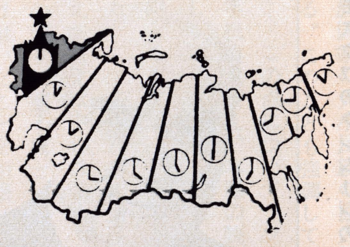
私たちには、たとえヒトラーの代行者が死んでも、占領当局のわが国民に対する圧制、ジェノサイド政策が停止されないことは分かっていた。しかし報復は人々の愛国心を高めたし、占領地域のパルチザン運動はさらに広がった。



冬のモスクワ近郊



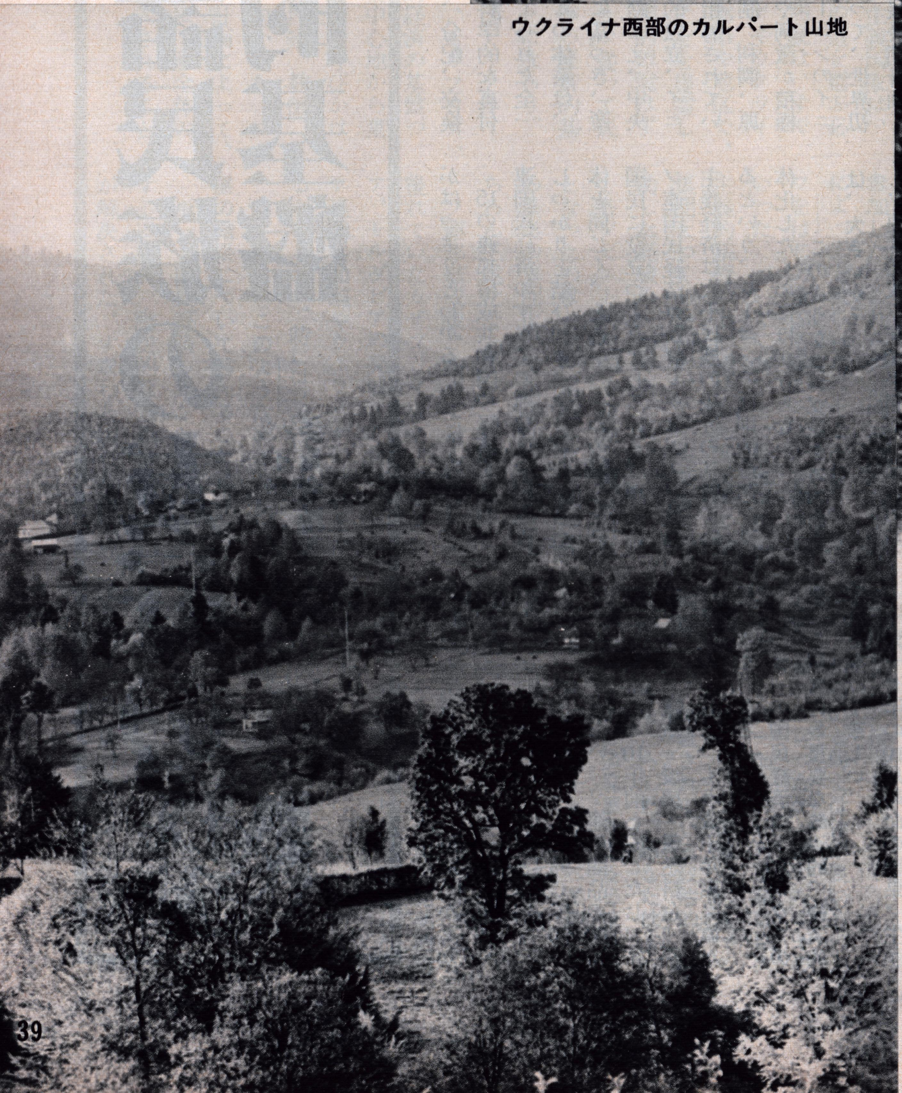
モスクワのクレムリン。正面はスパスカヤ塔。



第Ⅱ時間帯

ソ連の中央部

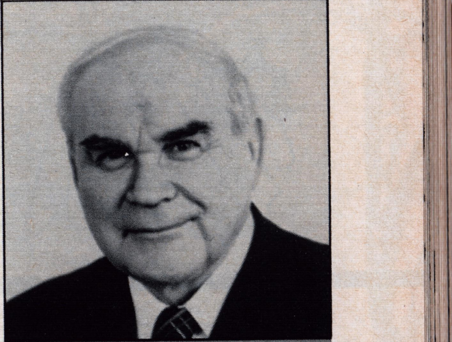
ここにはソ連のヨーロッパ部の西半分が含まれている。首都モスクワやレニングラードなどの大都市、ウクライナ、ベロルシア、モルダビア、エストニア、ラトビア、リトワの各共和国がある。



ウクライナ西部のカルパート山地

ソ連諸民族の友好の物質的基盤

——バイバコフ・ソ連国家計画委員会議長にインタビュー



モスクワのクレムリンの近くに高層の建物がある。この建物は一九三〇年代に建てられたものだが、この建物の中にあるソ連国家計画委員会（ゴスプラン）——国の主要な計画機関——は、わずか数十年間に後進国を強大国に変えたソ連の5ヵ年計画の大半を策定してきた。

ソ連邦結成60周年の祝典を控えて、アロイズ・フィリペンコ・ノーボスチ通信評論員はゴスプランを訪ね、ゴスプラン議長のニコライ・バイバコフ・ソ連閣僚会議副議長・工学博士（写真）にインタビューした。

——外国の読者から「なぜソ連では自国経済を単一の国民経済コンプレクスと呼んでいるのか？」とよく質問してくるが……

ソ連国民経済は単一のコンプレクスである。なぜなら、これは自然発生的に形成された諸企業の集合体ではなく、国内における社会的生産、分配、交換のすべての環を包含する科学的な裏付けのある計画的に組み立てられた全一的な体系であるからだ。この体系は、経済・社会発展国家計画に基づき、産業部門や地域の諸原則を踏まえ、中央集権的管理と企業の経済的独立、イニシアチブとを結びつけて指導されている。そのさい、独立採算制、利潤、原価、その他の経済的テコや刺激が積極的に活かされている。レーニンのイニシアチブとその指導によって、世界初の全国家的な国民経済発展長期計画——ゴエルロ（ロシア電化委員会）計画が作成された。当時レーニンはこう強調した。「……われわれはいま史上あまり例のない機会にぶつかっている。それは根本的な社会的変化を行うのに必要な期限を定めるという機会である。こうしてわれわれはいまや5年間に何をなしとげることができるか、何のためにはるかに長い期限が必要であるかがはっきりとわかる」

15の連邦構成共和国の経済を含むソ連国民経済のすべての部分は、相互にしっかりと結びつき、コンプレクス全体と同じく、その一つ一つの部分を全国民に役立つようにしている。単一のソ連国民経済コンプレクスこそ、社会主義経済は大小民族の接近の基盤であるという、レーニンの原則的命題を具体化したものにほかならない。

——このようなコンプレクスの効果は、大きいか？

ソ連邦結成以来60年間に、世界の工業生産高に占めるソ連の割合は1%から20%に増え、国民所得は一六七倍、工業生産高は五四〇倍に増えた。

ソ連はすでに何十年も国民経済をひたすら前進させてきており、これは基本的な全国民的課題——国民の福祉の不断の向上——の遂行を保障している。

ソ連国民は各5カ年計画の初めに、国の経済の全般的発展の結果、平均して自分の実質所得が何%増えるかを知っている。国民の確信は一度も裏切られなかった。国民は、失業とは何かについて、外国のマスコミを通じて知っているにすぎない。ソ連の商品の90%以上の価格は、10年前と同じだし、家賃、ガス・電気・暖房・電話料金、都市交通の運賃も、もう数十年据え置かれたままである。

——単一の国民経済コンプレクスの創設と発展の最重要な政治的、経済的条件を挙げて欲しい。

一九一七年の10月革命の結果、生産手段の社会的所有、まず国有が確立されたことが、決定的な役割を果たした。

L・I・ブレジネフは「10月革命の勝利とともに働く人々の前に、搾取を終わらせ、盲目的な経済力の奴隷から脱け出す可能性が初めて開かれた。社会進歩のこの重要問題は、私的所有を一掃し、私的所有を社会的所有に変えることによって解決された。生産の無

統制は科学的な計画的経済管理に席を譲った」と語った。この基礎に立ってこそ、単一の経済・科学技術政策を、労働報酬、価格形成、クレジットの分野での政策を、真に効果的に実施することができるようになった。

革命が国とその経済の管理のバトンを偉大なレーニンによって創設された共産党に手渡したことは、巨大な意義を持ったし、いまも持っている。マルクス・レーニン主義の科学理論で武装した、ソ連共産党の指導があったればこそ、ソ連国民は社会主義革命によって開かれた急速な経済的、社会的、文化的高揚の可能性の実現に成功したのであり、歴史はこのことをはっきり証明している。

単一の国民経済コンプレクスをつくることができたのは、社会主義を基盤に接近してゆく過程で、新しい歴史的共同体——ソビエト国民を形成した多民族国家の大小民族の協力のおかげである。このことも強調しておきたい。

——この点について、ソ連邦結成60周年祝典を控え、本誌の読者はもっと詳しく知りたがっていると思うが……

何よりもまず、ソビエト政権は崩壊したロシア帝国からの遺産として、たとえて言えば中心は詰まっているが、その周りは空っぽというような経済を受け継いだことを指摘したい。若干の中央の諸都市や地区は、当時きわめて発展した工業を持っていた。しかし、たとえば現在の中央アジア諸共和国やカザフ共和国の広大な地域には工業は事実上全くなかった。そこには封建制度かまたは氏族制度と、広範な勤労大衆の極端に低い物質的、文化的水準とが残っていた。

一九二〇年代に第1次世界大戦、国内戦、帝国主義的干渉、経済封鎖を体験したばかりの若い社会主義国家は、最も速やかな工業的発展の道を選ぶ必要に迫られた。一部の専門家は、すでに基盤ができていたロシアやウクライナの中心部の既存の工業都市や地区で、あらゆる努力を集中することを提案した。しかしこれだと、民族的辺境はずっと後進的地位にとどまり、従って民族の社会的、文化的不平等の経済的基礎や民族的不和も残ることになろう。

そしてロシア連邦共和国、ウクライナ共和国は、中央アジア、ザカフカズ、その他の諸民族の近代的経済の基盤づくりを助けた。古い工業中心地から東へ沢山の工場が移転し、党の呼びかけにより、熟練労働者、専門家、教師、医師たちが自発的に東へ向かった。ついで最初の数次の5カ年計画によって、若い民族諸共和国の発展にソ連全体の資金のかなりの部分が投入されることになった。

——当時鉄道技師だった私の父が、モスクワからトルケスタン＝シベリア（トルクシブ）鉄道を建設するために出発したのを覚えているが……。

当時、中央アジアの多くの地域の発展に刺激を与えた、トルクシブ鉄道の敷設またはフェルガナ運河の建設などという初期の大規模な計画が、モスクワから離れた所で実現されていたが、多くのモスクワ市民がこれらの建設に参加した。これらの計画は全国の努力によって実現された。そこへはモスクワをはじめ全国各地から人々が働きにいった。ついでに言うと、これは社会主義的基礎の上に団結した多民族労働集団をつくる最初の、しかも非常に成功した経験の一つであった。

各ソビエト共和国の重要な発展段階となったのは、党が組織した全国規模の農業の集団化、文化革命、それにもちろん工業化である。

ソ連邦結成後、かつて最も経済的に後れていたカザフ、タジク、アルメニア、モルダビアの発展テンポは、ロシア連邦共和国やウクライナのそれをはるかに上回り、時には2倍以上に達した。

——いま、このようなめざましい発展の結果について言えることは？

単一の国民経済コンプレクスを創設する過程で、歴史的な意義を持つ課題が解決された。すなわち国の各地域の経済的後進性が一掃された。

ソ連共産党第26回大会で強調されたように、ソ連にはもはや後れた民族的辺境はない。単一の国民経済コンプレクスの特徴は、各連邦構成共和国の経済発展水準が均等であることだ。各共和国には、専門化と協業化を踏まえて、近代的な多くの部門に分かれた工業、大規模農業が創設された。労働生産性と国民経済の技術装備率の指数や住民の生活条件が接近した。

——対等の者同士は仲が良いものだ、と昔の賢者は言ったが、まったくその通りだ。一九一七年の10月革命は巨大な国の大小民族に、ソ連憲法によって明記され、保証されている政治的、社会的平等をもたらした。あなたはすべての共和国の経済発展水準をほぼ均等にするために、数十年間すべての民族がねばり強く働き、共同して努力しなければならなかったと、強調された。現在およその均等もまた達成された。これで、ソビエト諸共和国の兄弟的同盟の経済的基盤づくりは、完成したと言えるか？

全体としてそう言える。しかし周知のように、完成には限界はない。一九九〇年までにソ連の単一国民経済コンプレクスをさらに発展させる道と方法は、昨年ソ連共産党第26回大会によって決定され、第11次5カ年計画（一九

八一—八五年）の数字に具体化されている。全国とそのすべての共和国は、社会的生産やソビエト国民の福祉の安定した成長テンポを保障しようと努力し、その数字の達成に目下取り組んでいる。

——西側の一部の〝ソ連研究家〟は、このテンポは初期の数字の5ヵ年計画期よりも低いと強調し、ソ連経済の危機をうんぬんしている。このような意見をどう評価するか？

そんな言葉を聞くと、「痛い所のある人は、そのことを口にする」というロシアの諺を思い出す。〝自由市場〟の諸国の人々は、〝経済危機〟という言葉だけでなく、その言葉が大量失業の増大、抑制しがたいインフレーション、消費物資の価格や家賃の高騰を意味することもよく知っている。私はすでに、ソ連にはこのようなものは全くないこと、あるのは、5カ年計画で計画されている不断の生産規模の増大とすべての、（強調するが、すべての、である）ソビエト人の福祉水準の向上であることを示す数々の事実を挙げた。もう一つ、事実を挙げよう。六〇年代の国民の物質的福祉を向上させる全ソ的措置に一六五億ルーブルが支出され、七〇年代にはその2倍以上が支出された。八〇年代にもさらに増加が予定されている。一九八一年度だけで勤労者の実質所得の平均水準が3・3％引き上げられた。

西側の〝ソ連研究家〟たちは、反ソ宣伝のためだけでなく〝自由競争〟世界での一般大衆の悪化する生活を何とか正当化するためにも、ソ連経済の危機うんぬんのデマを飛ばしているのだと思う。彼らは言う——見たまえ、経済の危機的現象は、資本主義の害悪ではなくて、あらゆる社会制度のもとでも避けられない人類の不幸なのだ、と。しかし事実はこれとは違うことを証明している。

——現在と初期の5ヵ年計画時のソ連経済の発展テンポの比較についてはどうか？……

ここでも数字と事実の客観的分析が示すとおり、このような比較は、決して〝危機〟を証明していない。具体例を挙げよう。一九二二年には八億kW時の電力が生産された。翌一九二三年に2・6％伸ばすためには年間それぞれ約八〇〇万kW時を生産する発電所を三基建設すればよかった。ところが一九八二年になると、一九八一年と同じ（ついでに言うと、実際に計画された）伸び率を確保するには、四二九二の同じような発電所に相当する新しい発電設備が必要になっている。このような発電設備はすでに事実上つくられた。

ソ連邦結成後の期間に、あらゆる重要工業製品のそれぞれの伸び率1％の重みは数千倍または何百倍にも増えた。

絶対的伸び率がこうなのに、危機だとか、減退だなどとか言えるものだろうか？　もし客観的であるなら、初期の5カ年計画の規模と比べて、ソ連の生活の現在の時期、発達した社会主義の時期の拡大再生産の規模は、ものすごく増大していると言わねばなるまい。

——つまり今次5ヵ年計画のために計画された発展テンポは最適であり、十分に高いというのか？　将来発展テンポを上げることができるか？

現在われわれのテンポは相対的にも、絶対的にもいぜん西欧の先進諸国や米国よりも著しく高い。そのさい考慮に入れなければならないのは、ソ連の工業生産高が、ほとんどすべての西欧諸国の合計を上回り、また米国に接近していることである。ちなみに一九八一年のソ連の工業生産の伸び率は3・4％だが、米国のそれはマイナス7・3％だった。

——なるほど明瞭だ。

その反面、われわれの現実的社会主義の経済の発展の道には決して困難がないわけではない。ソ連の人々はこの道ではパイオニア＝開拓者だったし、いまもそうだ。成長のそれぞれの新段階で生じる成長問題の解決には、時には非常に大きな努力、忍耐、ならびに時間が必要である。こういう条件のもとでわれわれは、現在の能力を科学的に分析して今次5カ年計画のテンポを、決めた。そのテンポが、現代の国際情勢——帝国主義は軍拡競争をあおり、社会主義共同体との対決を強化している——にも左右されることも念頭におかねばならない。将来はどうかといえば、私はすべてのソ連共産党員と同様に、楽天的である。私は社会主義経済の専門家でもあるので、このような楽天主義の現実の基盤である、社会主義経済の現状の若干の特殊性について述べておきたい。

問題は、現在ソ連の単一国民経済コンプレクスが、発展の集約的諸要因に習熟する複雑な時期にあることだ。生産や天然資源・人的資源、社会的、科学技術的進歩の利用の規模が現在のように大きくなっては、企業の新設を主体にして経済力を増大させることは不適当で、生産の集約化、労働生産性の向上によらねばならないが、そのためには、国民経済のあらゆる分野に科学技術の成果を全面的に、急速に導入しなければならない。

——それは、あれこれの工場の工場長が、コンベヤの速度を速めるか、または古い工作機械での作業ノルマを引き上げるかするよう命ずることをさすのか？

そうではない。そのようなことはありえない。もしわが国の労働法をよく知らない工場長がいたとしたら、労働組合工場委員会は即座に彼の誤りを正すだろう。

〝あれこれの〟工場では、コンベヤの単調な作業をマイクロ・プロセッサ付き産業用ロボットが肩代わりしている。古い工作機械は新しいNC工作機械に代わっている。労働者たちはこれらの機械を使いこなすことを学んでおり、資格向上に応じて賃金が上がっている。

他の労働者たちは労働資源の需要を減らす科学技術進歩の結果、以前に劣らぬ優秀な機械を持つ新設の企業に移り、同じような特典を受ける。

科学技術の最新の成果に基づいて既設工場を改修することは、国民経済の集約化の最も重要な道の一つである。

——その他の道の中からあなたはどんな道を選ぶか？

われわれは社会的労働の分業と統合を進めたり、これに関連した管理システム方法を改善して、全国的規模で経済の発展を促進したいと思っている。

すでに指摘したように、単一の国民経済コンプレクスとしてのソ連経済の発展は、社会的労働の分業や、全国的規模での専門化に立脚している。

この過程で、各共和国の役割が鮮やかに発揮され、ソ連の単一国民経済コンプレクスへの各共和国の貢献の、自然的、経済的諸条件と関連した独特の特殊性が強く出ることを強調したい。たとえば、カザフ共和国では燃料エネルギー部門、採鉱部門が優先的に発展しているが、それはカザフ共和国が有用鉱物に富んでいるからである。沿バルト海諸共和国の天然資源は豊かだとは言えない。その代わりそこの古い工業中心地には複雑な生産の発展の経験が蓄積されている。沿バルト海諸共和国では電子工業、電機工業、計装工業の生産設備の増強が5カ年計画によって予定されている。

各連邦構成共和国の経済発展水準が均等化しているいま、最も重視されるのは、全国的意義を持つ企画と計画の実現である。

——読者は、社会的労働の分業と統合がまるで正反対のような概念であると指摘するだろうが……。

社会主義経済では、それらは弁証法的な統一のもとで、生産の集約化の方向をめざして機能している。それは経験が証明している。

——例を挙げて説明して欲しい。

今年のソ連共産党中央委員会5月総会は、一九九〇年までのソ連の食料計画を承認した。食料計画は若干の相互に関連した課題の解決を予定している。それが最重要課題なのだ。第一の課題は、ソ連国民の食料構成を質的に改善し、科学的に裏付けられた基準に近付けるために、農業を集約化して、農業の生産性を著しく高めることである。カロリー含有量ではわれわれの現在の〝統計上の平均〟一日分の食料は、全くこの基準に合致している。しかしそれは炭水化物の割合を減らし、たん白質とビタミンに富んだ食品の割合を増やすことを必要としている。第二の課題は、単一の農工業コンプレクスに、農業と農業に奉仕する工業諸部門、ならびに運輸、商業を統合し、住民に質の高い、多種多様な食料品を供給するという共通の最終目標を持ったそれらの活動の効率を高めることである。

目的別総合計画に基づく統合の例は以上の通りである。八〇年代に予定されているのは、全ソ的意義を持つ15のこのような計画の遂行である。これは、最重要な経済的、社会的、科学技術的課題を解決するための資源と努力の結合を保障する。これらの課題を遂行するための最大限の努力は、その努力が最高の効果をあげる所につぎ込まれる。たとえば今次5カ年計画では、食料計画のわく内でのソ連全体の農業生産高の年平均伸び率は、13％と決められているが、ウズベク共和国では17％、モルダビア共和国では22％、一方、エストニア共和国では12％、リトワ共和国では10％と決められている。労働の分業、専門化と統合によって、効果的に、全国的利益を考慮に入れて各共和国の経済を発展させ、地域的、全ソ的規模での生産力の合理的な配置と機能を保障することができよう。

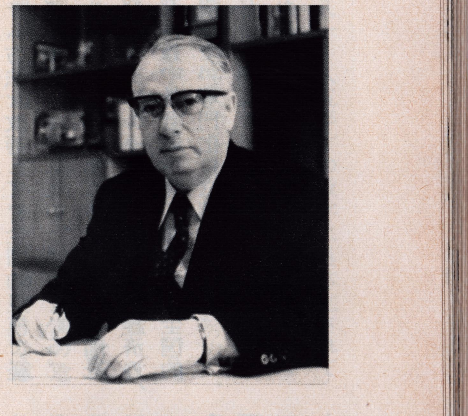
ますます活発に作用している単一の国民経済コンプレクスの発展の主要な集約的要因について、簡単に言うと以上のようになる。ソ連の国民所得の増加分に占めるこれら要因の割合の増加の動きを数字で示すと、第9次5カ年計画では25％、第10次5カ年計画では33％、現行の第11次5カ年計画では約50％となっている。

このデータが示しているように、ソ連経済の集約化のテンポは順調であり、現在だけでなく、近い将来も、ソ連経済は成長傾向にあると言える。

国の単一の国民経済コンプレクスの調和した発展は、各共和国の物資力、精神力を強める確実な基礎であり、ソ連諸民族の友好の強固な基盤である。

ソ日通商条約締結25周年

――スパンダリヤン駐日ソ連通商代表に聞く



ことしの12月6日はソ日通商条約締結25周年に当たる。この重要文書は、双方互いに最恵国待遇を許与し、それに基づいて両国が通商および通商航海を実施する一般原則を定めており、戦後のソ日経済関係の発展の出発点となった。この記念日にあたり、V・スパンダリヤン駐日ソ連通商代表に本誌記者がインタビューした。

――あなたは条約締結交渉に直接参加されたが、ソ日両国の通商関係の土台が築かれたときの情勢について……

交渉のときの政治情勢は複雑だった。ソ連の貿易体制や通商・条約慣行がよく認識されていなかっただけでなく、ソ日経済関係の正常化の動きをぶちこわすか、妨げるかしようとする直接の企てもあって、それに伴う数多くの障害を乗り越えなければならなかった。

I・F・セミチャストノフ貿易次官を団長とするソ連代表団の原則的な、がまん強い立場が、交渉を結局成功させた。両国にとって重要なこの条約に対する、日本の実業界や政界、社会層の代表たちの目先のきく現実的な立場も、交渉の妥結に役立った。

条約と同時に一連の基本的協定――一九五八年度ソ日通商・支払い協定、定期航路の開設に関する交換公文、在日ソ連通商代表部の法的地位についての文書――が調印された。

――両国のこれまでの協力の成果をどう評価するか？

通商条約締結以来25年間の成果をまとめてはっきり言えるのは、この期間にソ日経済関係が著しく進展したということである。

通商条約が発効して以来ソ日貿易高は一〇〇倍近く増え、一九八一年には三〇億ルーブルを超えた。日本はソ連の対先進工業資本主義諸国貿易で上位に入った。

貿易高の増加に伴って相互に供給する商品の品目も増えた。ここで強調しておかねばならないことがある。それは日本や資本主義世界の経済、政治情勢が変動したにもかかわらず、ソ日貿易は毎年伸び、しかも一九六六年にソ連の経済・社会的発展計画の実施期間に合致する長期の貿易・支払い協定が結ばれるようになってから、相互の貿易高は5年ごとに倍増し、一九六六―七〇年に二六億ルーブルだった貿易高は、一九七一―七五年には六一億ルーブル、一九七六―八〇年には一二一億ルーブルに増えた。

一九七三年10月10日のソ日首脳会談とソ日共同声明、一九七五年8月のL・I・ブレジネフと日本の経団連代表団との会談のような重要な出来事も、ソ日経済関係の発展に役立った。

ソ日、日ソ経済委員会のわく内で開かれた8回の合同委員会は、ソ連極東地方の産業開発共同プロジェクトに基づく経済協力に大きく貢献した。

経済委員会の活動の具体的成果は、八つの基本契約が結ばれたことであり、その八つとは、三つのソ連極東森林資源開発契約（うち二つは遂行ずみ）、パルプ製紙業用原料（工業用チップと広葉樹パルプ長材）生産協力契約、ウォストーチヌイ港第1期工事分建設協力契約（遂行ずみ）、ヤクート・ガス開発協力契約、さらにソ日貿易のこんごの発展にとって特に重要な契約――南ヤクート炭開発協力契約とサハリン陸棚の石油・ガス探査契約（次の5カ年計画から対日供給が始まる）である。

ソ連の貿易公団と日本の商社、メーカーとの結びつき、両国の実業人の結びつきは、著しく強まり、拡大した。いまソ日貿易には約40のソ連の貿易公団、日本のすべての大手商社、多くの中小会社、協同組合が参加している。

――現段階のソ日経済協力にはどのような問題があるか？

ソ日通商・経済関係は決してスムーズに発展してきたわけではない。そしてそれは、互恵と社会体制の異なる国々の平和共存の原則に基づいて、この関係を発展させる政策を常時とっているソ連のせいではない。

一方、対ソ通商・経済交流の発展に対する日本の態度は、一口に言って、この関係を強め拡大する方針と貿易・経済協力を制限、禁止、破壊する路線の二つの傾向のたえまない闘いだったと言える。

もちろんこれはソ日通商・経済関係の伸びにブレーキをかけてはいるが、結局のところこの関係の前進を阻むことはできない。

――あなたの楽観的な考えは、客観的な要因を踏まえたものだと思うが…

第一にソ連と日本は、工業と科学技術が高度に発達している国であり、しかも両国の貿易構造は互いに補完し合っていて、競合していない。ソ連は日本経済に必要不可欠の商品を日本に供給しており、また日本の工業製品に対するソ連からの常時の大量注文は、日本の多くの企業や商社に安定した操業と雇用を確保している。

たとえば一九七六―八〇年中にソ連から日本に輸出された主な商品は、製材約四〇〇〇万立方m、綿繊維二五万七〇〇〇t、石油と石油製品六六〇万t、石炭一二〇〇万t、カリ肥料一六〇万t、非鉄金属、貴金属、海産物、工作機械、ライセンスなどである。一方ソ連はこの期間に日本から総額約三二億ルーブルの各種機械、設備（80の企業・設備セットを含む）、四〇〇万tの鋼管、三八〇万tの鋼材、四億二〇〇〇万ルーブル以上の化学製品、八万tの合成繊維・紡糸、三億八三〇〇万ルーブル以上のニット・縫製品を輸入した。

第二に、ソ連と日本は隣国であり、ソ連東部地域の幾つかの経済部門を発展させる経済協力が拡大するにつれて、ソ日両国の地理的接近のメリットはますます大きくなる。

さらにソ連経済は恐慌や不景気を知らないので、両国の通商・経済関係の堅実な伸びを確保する。大きな安定したソ連市場は、とくにソ連東部地域の急速な発展に伴い、日本経済にとってますます大きな意義をもつ。

そして最後に、ソ連の貿易公団との通商・経済協力のこれまでの経験が証明しているとおり、日本の商社はソ連の貿易公団という信頼のおけるパートナーを持っており、社会体制の違いは互恵の実務協力の障害にはならない。

このプラスの客観的要因に対抗するのが、ふつう過渡的で、変動的な政治的性格をもつ主観的要因である。さまざまな禁輪と制裁、輸出制限リスト、正常な対ソ通商・経済関係の実現の妨害には、ふつう「米国製」の印が押されている。もちろん、反ソを標榜する日本の勢力は、進んで禁輪と制裁の政策に加わり、一心不乱にそれを実施している。なぜなら対ソ経済関係の正常な発展、そしてその関係を通じてのソ日両国民間の相互理解と善隣の強化は、でっち上げの反ソ・キャンペーンや「ソ連の脅威」にかんする神話の地盤を崩してしまうからである。

ソ日経済関係の発展の歴史が証明しているとおり、この関係の敵はときどき勝利する。そんなときこれらの敵は、通商条約や日本政府の責任者が署名した他のソ日協定や声明に違反することも辞さないし、日本の一部の産業や経済全体に損害をかけることなど意に介さない。

たとえば、日本の明白な利益や日本政府の抗議を押し切り、海のかなたの強力な政治的、経済的圧力をうけて、折角ソ日専門家の共同の努力で、石油、ガスの有望な鉱床がサハリン陸棚で発見されたそのときに、サハリン・プロジェクトの前進を阻止しようとしている。

その場合ワシントンは、日本がこのプロジェクトに対するこれまでの投資を失い、また肝心のことだが、日本に必要なエネルギー資源の新しい安定した、地理的に最も近い供給源を失う羽目になり、日本だけが損害をこうむるという歴然たる事実に無頓着である。

対ソ経済関係の発展に反対する人々は、自分の行動を正当化するために、この経済関係の維持を強く望んでいるのはソ連の方であり、日本の「援助」がなければ、ソ連はシベリア開発計画を恐らく実現できないだろう、とのテーゼをならべている。当の日本の実業界が信じていないこうした馬鹿げたつくりごとをわざわざ反駁するまでもあるまい。

永野・日本商工会議所会頭は「われわれにとってシベリア天然資源共同開発プロジェクトとは、対ソ援助ではなくて、日本自身に必要な実務的契約である」と語っている。

敵たちは日本の利益に反する行動をとっているからこそ、ソ日経済関係の発展の客観的過程を押し止めることはできない。

以上から、25年前に通商条約の締結によって築かれた土台に立って、ソ日経済関係は両国政府首脳が調印したソ日国交正常化にかんする共同宣言に記されているとおり、こんごとも「安定したかつ友好的な基礎の上に」発展するだろう、と断言できる。

☆　☆　☆

日ソ貿易協会代表団 ソ連極東を視察した



8月にハバロフスクで行われた日ソ貿易協会代表団とソ連極東の組織、企業の専門家との会談。発言しているのはハバロフスク地方執行委員会のL・ドマガリスキー副議長

日ソ貿易協会代表団のメンバーとしてこの夏、ソ連極東を視察した日本の業界人たちは、ハバロフスク、イルクーツク、ユジノサハリンスクの各都市でソ連の専門家をまじえ、ソ日沿岸貿易の振興問題を審議した。この代表団のメンバーは、ソ連極東、東シベリアの地方、州との沿岸貿易に参加している日本の商社の代表や各産業界の専門家であり、団長は日ソ貿易協会の横川正市会長。

ソ連側から代表団との会談に参加したのは、地方、州人民代議員ソビエトの幹部、ロシア連邦共和国国家計画委員会やソ連貿易省の代表である。

ビクトル・パステルナーク・ハバロフスク地方執行委員会議長、ソ連最高会議代議員は、代表団と会見し、次のように述べた。

「われわれは対日貿易の拡大と経済・文化協力の発展を最も重視している。

ハバロフスク地方を含む極東経済地区は、ソ日貿易で重大な役割を果たしている。この地区の天然資源はソ連有数である。わが国はいま、これらの資源を国民生活の向上にできるだけ早く活かそうと奮闘している。天然資源の開発は、これらの資源ならびにその資源の加工産品の一定部分が、対日輸出の対象になりうるので、日本の実業界にも興味があると思う。

しかしそれは長期のソ日協定があってはじめて実現すると信じている。こうした協定のメリットについては、これまで何度も述べてきた。

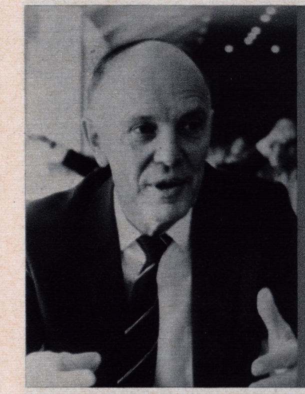
こうした長期の基盤に立つソ日両国の隣接地域間の通商・経済関係の発展は、沿岸貿易の拡大にも非常に大きく貢献するし、極東とアジアの相互理解と協力の精神の強化に役立つだろう。

代表団の極東旅行中の意見の交換、会合、懇談が、沿岸貿易の増大の現在の可能性をよりはっきりと見定めるのに役立ち、いろいろな支障を早急に取り除くのに貢献し、シベリア・極東の地方、州と日本の諸県との通商・経済関係の発展に大きな刺激となることを期待したい」

横川日ソ貿易協会会長は、こんどの視察旅行の成果について本誌記者に次のように語った。「われわれの対ソ協力の伝統は古い。貿易高が増勢にある沿岸貿易はとくに注目に値する。しかしわれわれは貿易高の急増を望んでおり、現にその可能性は十分にある。その可能性の一つがコンペンセーション（相殺）取引である。われわれはソ連の専門家と協議したのち、将来のコンペンセーション取引のいわゆるミニ・プロジェクトをまとめた。こんどソ連の専門家とそれらをくわしく審議し、その作業成果に満足している。これは、長期の互恵協定への道の第一歩となるに違いない。われわれは双方がミニ・プロジェクトの実現に協力すると述べた議定書に調印した。

経済と政治は車の両輪である。だから貿易を拡大すれば両国の親善関係の強化、相互理解と協力の拡大に役立つと確信している」

科学技術の交流を積極的に



——来日したパトン・ウクライナ科学アカデミー総裁に聞く

このほど来日したボリス・パトン・ソ連科学アカデミー幹部会員・ウクライナ共和国科学アカデミー総裁・キエフ電気溶接研究所所長（写真＝毎日新聞提供）に、ソ連およびウクライナ共和国の科学研究について聞いてみた。（キエフ電気溶接研究所については、本誌第6号で紹介した）

——ソ連の科学政策の特徴と最近の傾向について聞きたい。

レーニンの時代から、国家は科学の重要性を認め、たえず大きな注意を払ってきた。科学の進歩がわが国の経済発展の基礎になった。経済は科学的に運営されており、科学技術の成果をフルに活用している。ソ連共産党は科学を直接の生産力と規定しているが、このことから見ても、国民生活における科学の役割と地位はおわかりいただけると思う。

われわれ科学者の任務は、こうした社会の要請にこたえて、まず第一に基礎研究を発展・拡充することだ。基礎研究の発展なくしては、応用科学、新技術、新製品の開発といった分野での進歩ものぞめない。

研究活動の組織、調整という面では、整然としたシステムが確立されている。ソ連科学アカデミーとその傘下の研究所、各連邦構成共和国アカデミー、大学、産業別研究所、企業付属研究所などが、それぞれの力に応じて、ソ連全体の科学の発展に寄与している。

今日の第一の課題は、基礎研究の成果を利用して、産業を変革してしまうような〝革命的〟な研究・開発を実現することだ。こうした分野には、原子力、最新のエレクトロニクス、新エネルギー源、新素材の開発などがある。

——ウクライナ共和国科学アカデミーの役割は？

ご存知のように、ロシア連邦を除く14の共和国にそれぞれ科学アカデミーがあって、ソ連科学アカデミーの作成した単一計画に沿って共和国内の研究活動を指導・調整している。ここで強調しておきたいのは、ソ連科学アカデミーと違って、共和国アカデミーが学問のすべての分野をまんべんなくカバーしているわけではなく、またその必要もないということだ。各共和国の研究の伝統と経験、独創的なアイデア、地域の特性に応じた分野をのばす方がはるかに合理的だ。各共和国は、科学の分野においても、それぞれの特性を活かしながら、また互いに協力し合いながら、ソ連の科学全体の進歩に貢献しているのだ。

ウクライナ科学アカデミーは一九一九年に設立された。現在の研究所数は80。研究者は八万三〇〇〇人。研究所はウクライナ各地にあるが、中心はやはり首都のキエフだ。

現在、多くの研究作業は、目的別総合プログラムに沿って進められている。このプログラムは、研究作業の各段階を定め、最終目標を明確に打ち出したものだ。重要なことは、基礎研究が、経済、学問全体、文化の進歩に何らかの形で貢献しなければならないという点だ。かつては〝学問のための学問〟が許されていたとしても、今日では科学者は自分の研究の成果が社会に何をもたらすかを自覚しなければならない。研究成果の経済的効果だけでなく、その人道性についても配慮しなければならない。

研究の経済的効果について見てみると、国家がウクライナ科学アカデミーに投資する1ルーブルは、5ルーブルの経済的利益をもたらすという公式統計がある。

——あなたが所長をしている電気溶接研究所では、生産との結びつきがとくに重要だと思うがどうか。また、西側には、ソ連の基礎研究は優れているが、産業への応用面で後れているという指摘があるが……

電気溶接研究所は、一九三四年に私の父エブゲニー・パトン（一八七〇―一九五三）によって設立された。いまではソ連の溶接技術と特殊電気精錬のメッカとなっている。ソ連各地で行われている溶接の研究を調整し、研究計画を作成し、諸外国との技術交流を推進しているわけだ。もちろん、生産現場との結びつきも重視している。このため研究所は、基礎研究部門だけでなく、開発ビューロー、実験室、実験工場などもそろえた総合なものになっている。研究の経済的効果について言えば、研究所に投資される1ルーブルは、7ルーブルの経済的利益をもたらしている。

ソ連全体を見ると、優秀な基礎研究がありながら、工業化が後れているという分野が若干あることは事実だ。しかし、西側にない先端テクノロジーを持っている分野もたくさんある。たとえば、われわれの研究所は米国へ輸出した海底石油パイプの溶接技術や、エレクトロスラグ精錬などを開発している。

最後に、今回18年ぶりに訪日し、いろいろな研究所や工場を訪問して、あらためて確信を深めたことがある。それは、科学技術の国際交流の必要性だ。日ソ間でも科学者の交流、開発技術の輸出入、共同研究——ひとことで言えば科学の国際化——をもっと積極的に推進することが必要だと思う。



ソ連共産党とソビエト国家の創立者ウラジーミル・イリイチ・レーニン（1870—1924）

ソビエト諸民族の同盟についてのレーニンの言葉

われわれは、諸民族の自発的な同盟——ある民族が他の民族にたいしていかなる暴力をくわえることをもゆるさないような同盟——、もっとも完全な信頼に、兄弟的な統一のはっきりした自覚に、完全に自発的な一致にもとづくような同盟をのぞむものである。

（全集、大月書店版第30巻293ページ）

われわれは徹底的な国際主義者であり、すべての民族の労働者・農民の自発的な同盟をめざす。

（全集、大月書店版第29巻187ページ）

ソ連邦結成の瞬間

ミハイル・ベドノフ

ソ連邦結成——この出来事は幾百万の人々の運命に影響を与え、その意義は時間がたっても弱まることなく、逆に輝きを増している。多くの民族はどのようにしてソ連邦という一つの家族に結合したのだろうか？

一九二二年。国内戦で社会主義革命の獲得物を守り抜いた諸民族は何を支えに生きていたのか？ 新社会の建設を目的に掲げた人々は何を目ざしていたのか？

一九二二年の文書はそれを語る。

兄弟の固い握手

「他の国々ではとうてい見られないほどおびただしい民族をかかえた国家で、5年にわたって民族問題を解決してきたわれわれの経験によって、このような場合の民族の利益に対する唯一の正しい態度は、これらの利益を最大限に満たし、それを基盤として、紛争のあらゆる可能性を取り除くような条件をつくり出すことだと、われわれは完全に確信している。われわれの経験は、われわれに次のような確固たる信念を植えつけた。それは、さまざまな民族の利益に大きな心づかいを払うことだけが、紛争の基盤を取り除き、相互不信を取り除き、信頼を、特にさまざまな言葉を語る労働者・農民のあいだに信頼を生み出すということである。このような信頼なしには、諸民族間の平和的な関係も、現代文明の中で価値のあるすべてのものを多少とも順調に発展させることも、絶対に考えられないのである」（レーニン。一九二二年10月27日の「オブザーバー」および「マンチェスター・ガーディアン」の通信員ファルブマンとのインタビューから）

ロシア、ウクライナ、ベロルシア、カフカズの勤労者が自分たちの指導者と呼んだ人——レーニンは、民族関係をこのように考えていた。次に、勤労者の気分が反映されている一九二二年の諸文書を見てみよう。

「……労働者と農民の統一戦線が資本の攻撃に対する回答となるべきである。全ソビエト共和国の戦力と経済力を統合するソビエト社会主義共和国連邦は、それに向けての第一歩である」（ウクライナ、第5回オデッサ県〔現オデッサ州〕ソビエト大会の決議から）

「エレバンの労働者・農民代議員および赤軍代議員のソビエト大会は、共和国連邦に関するメグラビャン同志の報告を聴き、経済、金融、政治の分野でザカフカズのソビエト社会主義諸共和国とソビエト・ロシアのあいだにいっそう緊密な協力が必要であると見なす。大会は、ソビエト諸共和国の緊密な協力だけが各共和国の急速な復興をもたらすと考える」（アルメニア、第2回エレバン市ソビエト大会の決議から）

各共和国は国内戦と世界大戦で荒廃していた。各共和国は工業と運輸における崩壊の克服に力を注いだ。ボルガ川中下流域では、一九二二年に飢饉が猛威をふるった……

「ウクライナの農民諸君！ 飢饉民救援委員会は被害が大きい農民に代わって、諸君の親切と支援に対して熱烈な感謝を表明する。当地の農民は大きな喜びをもって、諸君の兄弟的な固い握手を感じた。飢えのためによろけ、衰弱していたボルガ川中下流域の農民は、差し延べられたこの手にすがった。この手が強まることを、それと共に農民と労働者の兄弟的同盟が、働く人々の打ち破りがたい友情が強まることを」（ウクライナの農民に宛てたボルガ川中下流域の勤労者の手紙から）

しかし、飢饉も荒廃も、一九一七年の10月革命で始まった諸民族の解放のプロセスを押しとどめることはできなかった。人々は一致協力して飢えと文盲を克服し、高い文化を獲得することができた……

「わが惑星の進歩の時計は、間もなくモスクワでときを打つだろう」と、チェコスロバキアの作家ヤロスラフ・クラトフビルはソ連邦結成の前夜に書いている。

モスクワ、一九二二年12月30日

歴史的な文書の中で最も貴重なのは、多分、出来事に直接参加した人々の生の証言だろう。いまなお健在な第1回全連邦ソビエト大会の参加者に語ってもらおう。大会の開催場所はモスクワのボリショイ劇場。日時は一九二二年12月30日正午。

ミハイル・ロスリャコフ（一九二〇年代にノブゴロド県労働者・農民代議員ソビエト執行委員会を指導。ソ連共産党第26回大会代議員）——

「私は初めてボリショイ劇場に入った。ホールは薄暗く、全部のシャンデリアをつけるには電力が足りなかった。寒かった。恐らく、場内は久しく必要な温度にまで暖められたことはなかったのだろう。桟敷の椅子や柵のメッキは湿って黒ずみ、ところどころ緑青が浮いていた。軟らかいシートは明らかに

使い古され、一部は歪んでいた。劇場のホールは超満員だった。そこにはロシアの代議員たちのほかに、ウクライナ、ベロルシア、ザカフカズの代表や来賓がいた……」

　A・I・ヌフラト（バシキールの代議員。一九三〇年代に「革命と民族」誌の副編集長だった）――

「レーニンの戦友ピョートル・スミドビチが開会を宣言した。彼は内容豊かに、正確に話した。彼は、ソビエト諸共和国の統一の中に〝万国の労働者を驚嘆させ、引きつける……抵抗と創造の新たな巨大な力の源泉〟がある、と語った。多くが25歳にも達していなかったわれわれは、多大の注意を払って長老代議員の発言を聴いた……」

　大会代議員の45％は30歳未満、44％が31歳以上40歳以下だった。大会はソビエト諸共和国の勤労者のすべての層を代表していた。代議員の44・4％が労働者、28・8％がインテリゲンチア、26・8％が農民だった。

　レーニンは大会に来なかった。医師たちが許さなかったのだ。

　ミハイル・ロスリャコフは回想する――「レーニンが大会に出席できないと知って、悲しかった。彼はこの注目すべき日を近づけるためにそれほど多くの仕事をし、その日に向けて先見の明と英知を持って指導して来たからだ。だから、大会での最初の発言がレーニンに関するものだったのは、極めて当然だった。グルジアのアベリ・エヌキーゼが演壇に登って、ロシア・プロレタリアートの指導者レーニンを大会の名誉議長に選出するよう提案した。この提案を承認するため、二千余名の代議員が一斉に起立した。みんな長いあいだ拍手して、叫んだ――〝同志レーニンによろしく！〟〝レーニン万歳！〟

　ミハイル・フルンゼが発言を許された。彼はウクライナからウランゲリ男爵の反革命軍を駆逐するのを指導した。だからウクライナの勤労者は彼を自分たちの代表として大会へ送ったのだ。彼は、連合する四つの共和国の代議員代表者会議が、ソビエト社会主義共和国連邦の結成に関する宣言とソ連邦結成に関する条約の採択を提案するよう自分に依頼した、と述べた」

諸民族の兄弟的協力の基礎

　宣言はうたっている――「ソビエト諸共和国が結成されたときから、世界の諸国家は二つの陣営に分かれた――資本主義の陣営と社会主義の陣営に。

　かの資本主義の陣営には、民族的敵対と不平等、植民地的奴隷状態と排外主義的愛国主義、民族抑圧と大虐殺、帝国主義的野獣行為と戦争がある。ここ社会主義陣営には、相互信頼と平和、民族的自由と平等、諸民族の平和的同居と兄弟的協力がある。

　民族問題を諸民族の自由な発展と人間による人間の搾取のシステムとの結合によって解決しようという資本主義世界の数十年間の試みは、徒労に終わった……ソビエト陣営においてのみ、周囲に住民の大多数を結集したプロレタリアート独裁の条件のもとでのみ、民族的抑圧を根本的に撲滅し、相互信頼の状況をつくり出し、諸民族の兄弟的協力の基礎を置くことが可能だった……

　……戦争の歳月は痕跡を残さずには過ぎ去らなかった。荒廃した畑、遊休した工場、破壊された生産力……は、経済建設における個々の共和国の個別の努力を不十分なものにしている。国民経済の復興は、諸共和国の個別的な存在のもとでは不可能だった。

　他方、国際情勢の不安定性と新たな攻撃の危険が、資本主義包囲陣に対してソビエト共和国の統一戦線をつくることを不可避なものにしている。

　さらに、階級的本質において国際主義的なソビエト政権の建設そのものが、ソビエト諸共和国の勤労大衆を一つの社会主義家族へと押しやっている……

　これらすべてを全世界のまえに宣言しながら……われわれ代議員は……〝ソビエト社会主義共和国連邦〟結成に関する条約に署名することを決議する」

互いに争うことなく暮らすために

　ふたたびミハイル・ロスリャコフに語ってもらおう。

「歴史的な瞬間がやって来た。大会は満場一致でソ連邦結成に関する宣言と条約を可決した。赤いビロードが掛けられたテーブルに各共和国代表団の指導者たちが集まって、文書に署名した……おごそかな手続きは非常な注意をもって見守られ、それぞれの署名が拍手で迎えられた。私は周囲を見まわした。まったくのところ、だれもが顔を輝かせていた……」

　同じことをイワノボ・ボズネセンスクの労働者の代表で織工のP・Y・ウォロノワも回想の中で語っている――

「私たちの友情のきずなを永久に結び合わせた文書が採択されたとき、ホールに座っていた人々みんなの顔がどんなにおごそかだったかを覚えている」

　大会では最後にソ連邦中央執行委員会議長ミハイル・カリーニンが演説した。

　P・Y・ウォロノワは語る――「私は彼の予言のような演説の言葉を覚えている。ソ連邦中央執行委員会議長は言った――〝何千年にもわたって人類の最良の英知は、諸民族が最大の苦しみ、相互の争いなしに、友情と兄弟的関係の中で暮らすことができるような形態を探し求めて闘って来た。いまようやく、きょう、この方向で実質的に最初の礎石が置かれつつある……〟

　この言葉が語られてから60年後、ソ連邦誕生の目撃者である私は、次のように言うことができる――この〝最初の礎石〟はときの試練に耐え、ソビエト人民が兄弟愛と真の友情の確固たる建造物――多民族社会主義祖国を建設する確かな土台となった」

ソ連邦が生まれた年

（60年前の写真から）



10月社会主義大革命5周年記念日の11月7日、モスクワの赤の広場で行われた軍事パレード。

1922年



ピオネール少年団はソ連邦と同い年――1922年に創立された。写真は北オセチア（北カフカズ地方）のある地区のピオネール班。

1922年



若いソビエト共和国が初めて参加したライプチヒ見本市



モスクワのプロフィンテルン記念縫製工場（現在の〝ボリシェビチカ〟工場）



浮浪児たち

1922年



飢饉に見舞われたボルガ流域の人々には国中から援助の手が差しのべられた。パンとスープの配給風景を伝えるこの写真は、サマーラ（現在のクイビシェフ）で撮影されたもの。



経済の混乱を打開する闘争の先頭に立ったのは、共産党員と共産青年同盟員だった。写真は第1国立タバコ工場の共産青年同盟員たち。

1922年



日本の干渉軍から解放されたウラジオストクで喜びのデモをする市民



レーニンの直接の指示で創立されたタシケント国立大学の教師たち



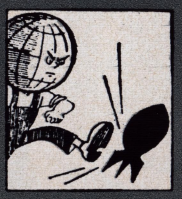
ラッパロ条約に調印したジェノバ国際会議のソビエトとドイツの代表団。右からL・クラシン、G・チェチェーリン、A・ヨッフェ（ソビエト）。

1922年がソ連邦結成の年だと知っている人でも、同じ年のジェノバ国際会議で、ソビエト代表団が社会体制の異なる国家間の平和共存の原則の確立を提案したことは余り知らない。従ってことしは、この平和共存原則が定式化された60周年でもあった。これらの原則の全般的承認、平和維持の問題は、人類がこれまで直面した課題の中で最も複雑で重要なものの一つである。



世界に平和を！

平和をめざすソ連国民の不屈の意志は、全国で行われた勤労者の反戦集会、反戦デモなどによって改めて示された。これらの行事は、さる２月の第10回世界労働組合大会のアピールによって実施された第１回労働組合平和行動デー（９月１日）に捧げられた。写真はハバロフスク市で行われた反戦デモ。横断幕の語句は「世界のすべての国民に平和と安全を！」。



平和のための たたかいは続く

大衆的反戦運動は今日、国際生活の極めて大きな要因になっている。すべての国で数億の人々が軍拡反対、軍縮促進、〃限定〃戦争反対、〃ダラダラ〃戦争反対のために行動している。そしてこの平和支持者の大部隊の中で、ソビエト人は当然ながら先頭の座の一つを占めている。平和維持に寄せるソ連国民の関心の強さ、世界のすべての平和愛好勢力といつでも共同行動を取る用意があるということは、1982年の春と夏に行われた反戦行動にはっきりと現れた。5月から7月にかけてだけで、6000万人以上のソ連市民が2万回のデモ、集会などに参加した。

毎年10月の下旬、国連の日を記念して実施される恒例の「国連軍縮週間」も、平和維持のたたかいの一環として、ソ連では盛大に行われた。

大衆的な集会、行進、国際的なテーマによる討論会、国連総会あてアピールに賛成の署名集めなどやその他の行事が、広大なソ連の全国で行われた。多くの勤労者が自分の1日分の賃金をソビエト平和基金に寄託した。「国連軍縮週間」は、世界の平和を維持したいというソ連国民の希望が心からのものであることを再び証明した。

デタントは平和な未来に通じる道

ノーボスチ通信政治評論員　ウラジーミル・カチン

東西間の政治的対話、商業・科学・文化・観光、スポーツその他の交流、接触の拡大などは、いままとめてデタントを示す概念となっている。デタントは決してひとりでに進展することはないし、事実そういうことはありえない。従って絶えず力を合わせてデタントを推進する必要がある。しかも、実際で見るとおり、デタントはよく大きな困難や試練にぶつかっている。デタントをご破算にし、「冷戦」精神を復活させようとしている勢力もいる。いまデタントの政策は苦難の時代を迎えている。この現実を直視すべきであろう。

はたしていまなおデタントは生き残っているのか、と問う人さえいる。さきごろの西独の内閣の交替にともなって、この国の右翼勢力の動きが目立って活発になっている。右翼勢力は新連立内閣を利用してデタントを忘れさせるか、葬り去ろうとしている。

そこでこうたずねたい——世界共同体はデタントによってほんの少しでも損害を受けただろうか？　また西側諸国と社会主義諸国との協力は、何百万人とはいわないまでも、何十万人に仕事を保障する機会を与えなかっただろうか？

西側では、デタントはソ連だけにメリットがあるというむきがあるが、これは間違っている。ソ連では、デタントを自分だけに都合のよいものと見たことは決してない。そもそもそんなことはありうるはずがないではないか？

モスクワはデタントを多くの内容をもつものと見ている。まず第一にデタントとは、各国および各国の指導者が戦争の準備ではなく、平和的協力のために歩調を合わせることである。またデタントとは、諸国間、諸国民間の正常な交流、国際法の順守、実際の具体的な行動で軍拡競争の抑制を助長し、相互の信頼を深めて安全を強めようという意欲である。こうしたものは人類に平和な未来を実際に確保するはずである。ソ連の指導者はデタントをこう考えている。

ソ連が考えるデタントの概念には利己的な目的は全然なく、どちらか一方が有利になる抜け道など一つもない。ソ連の意見によると、世界でデタントが強まれば、東西ともにデタントの果実をよりよく利用し、全世界共通の諸国民の実際生活の多くの諸問題を力を合わせて解決することが、できるようになろう。

いまデタントはさまざまな困難にぶつかっているが、ソ連国民やソ連の指導者たちは、未来を楽観している。この楽観的な考えは、実際の経験、つまり諸国民の意思がいま〃デタント〃という言葉で表現されている、世界的問題における前向きの方向の道を開いたという経験を踏まえている。デタント政策の根は深く、強大な力に支えられているので、こんごともこの政策が諸国の関係の主導的な傾向となるチャンスは十分にある。

こうした結論は、人類の欲求を客観的に突っこんで理解した結果出てきたものであり、その欲求とは平和な生活、安全、安定である。もしデタントを選ばなければ、とどのつまりは戦争ということになり、いまのような核の時代にあっては戦争とは人類全体の破滅や地球における生の終滅を意味する。従って事実上選択の余地はないことになる。

だから大事なのは、世界のすべての国のあらゆる階層や職業の人々が、**唯一の手段**であるデタントを維持し、強める闘争の意義をしっかりとつかみ、地球上の生命を守り、わが地球を無傷に保つことである。

現在もしデタントがうまく進んでいないなら、その犯人を探さなければならない。われわれの見るところでは、その犯人は緊張をひどくしようと努めている勢力である。この勢力から見れば、デタントは自分の侵略意図を妨げる障害物であり、従ってその障害をなんとか取り除こうと思っている。デタントには国際問題でのある程度の折り目の正しさが必要だが、他の国々、同盟諸国に対してさえも傍若無人に振る舞うくせのついた米国にはそんな折り目の正しさはない。従って米国とNATO加盟の他の数カ国の指導層は、デタントに敵対する方針——軍拡競争をあおる方針をとり、デタント政策でかなり多くの成果を挙げた西欧を、「冷戦」の淵につき落とそうとしている。

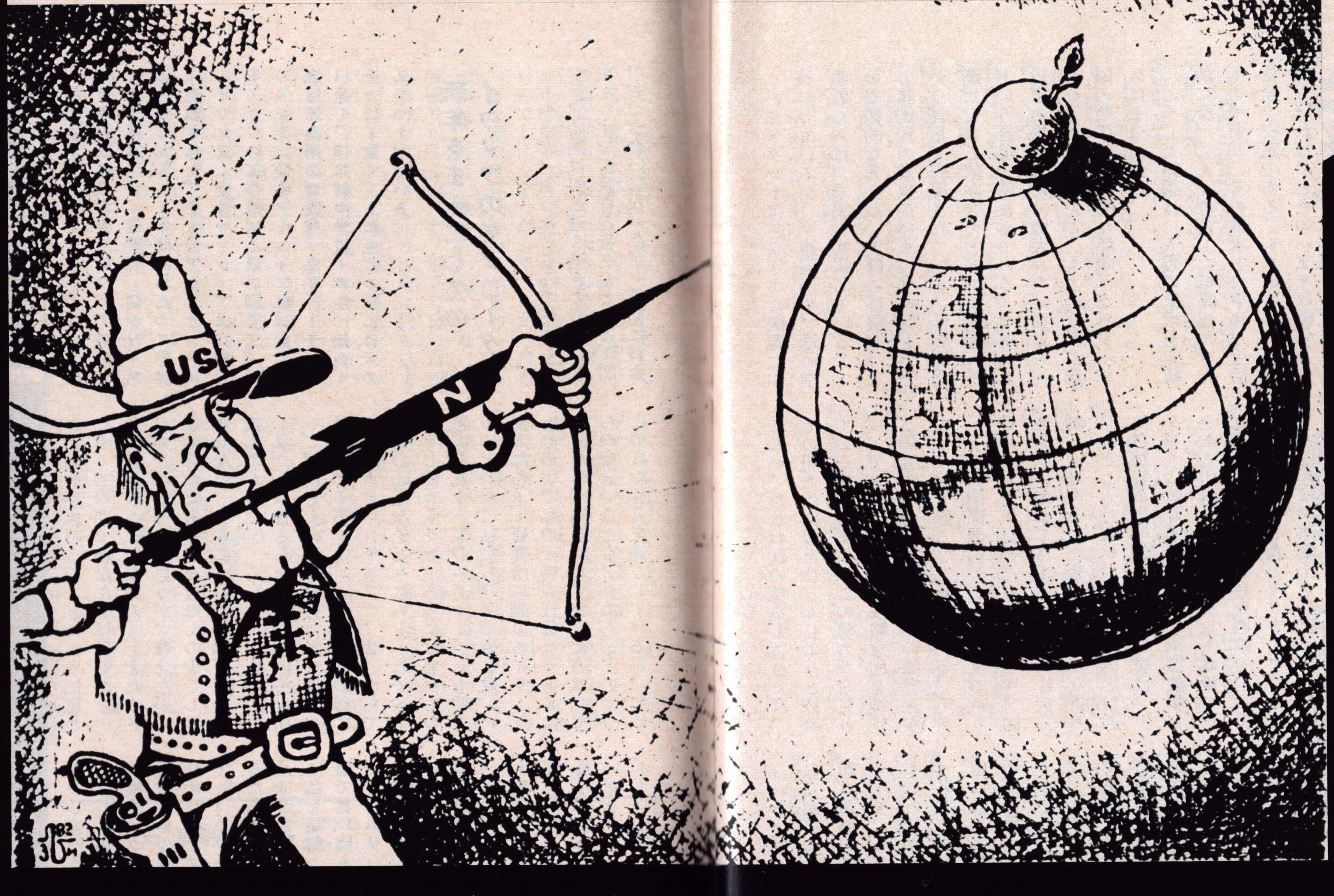
たとえばソ連領土を目標とする米国の新しいミサイルを、西欧の数カ国が配備することに決めたいきさつを見てみよう。この決定は力ずくで遮二無二押し付けたものである。世論の激しい抗議も英国、西独、イタリア政府には通じなかった。結局これらの国が新型ミサイルの配備に同意したことは、国益に反する米国へのはっきりした譲歩ということになる。

西欧にミサイルを配備するという決定は、信頼を、つまりはデタントをもぶちこわすものである。近い将来五七二基の新核ミサイルがソ連の都市にねらいをつけるとなれば、デタントは決して強固にはならないだろう。当然ソ連は西側の戦備に無関心ではいられなくなり、モスクワは必要な対策を講じることになろう。

東方をねらうミサイルを配備する決定には、米国の利益だけをねらう企図がまる見えである。第一に米国はこれでふところがあたたまる。第二に米国はこれで自国の安全を確保するつもりである。万一核紛争が起こってもまず報復を受けるのは、ソ連とその同盟諸国にとって脅威の源となっている国々だからだ。米国はソ連国境ぞいに軍事基地網をつくり、そこで最新鋭兵器を配備し、自国のパートナー諸国を前面に出して、自国領土が報復打撃を受けないようにしている。それと同時に米国は、ソ連と西側諸国との関係を傷つけようと努めている。周知のように10—12年間にこの関係は、互いに多くの成果をあげてきた。たとえばソ連の対西独貿易額は、ソ連の対資本主義諸国貿易中のトップを占めている。またこの期間にソ伊貿易は4倍に増えた。日本、フランス、ベルギーとの貿易も上位にある。これもデタントの具体的な成果であり、これらの成果はひとりでに出てきたものではなく、関係正常化と政治的信頼の結果である。この点で注目に値するのは、西欧諸国が〃ガス＝鋼管〃取引をご破算にしろという米国の要求に答えてとった、ひどく反抗的な態度である。ボン、パリ、ロンドンがこの原則的な問題で示した毅然たる態度は、欧州におけるデタントを守り抜こうとする西欧の決意を示している。

他の諸大陸、他の地域におけるデタントの成果に対して関心が高いのは、当然と言えよう。しかし欧州とアジア、アフリカとは事情が違うといっている疑い深い人間や悪意ある連中もいる。各地域にそれぞれの政治的、経済的、その他の特徴があるのは当然のことであるが、欧州のデタントの底辺にある諸原則をよく見れば、それらの原則の普遍性、世界のどの地域にもあてはまる性質が、すぐにも納得がゆく。

デタントは世界のすべての諸国民の歴史的な獲得物であり、広げ、守り、深めなければならない。そしてデタントとは戦争の狂気に対する人間の理性の勝利であろう。モスクワは理知、自己保存の本能を信じているので、必ず勝利が来ると信じている。いまはこうして地球の生命を救えるかどうかが、問題なのである。



破局は避けられないか？

ノーボスチ通信政治評論員
エドガル・チェポロフ

米国は国際情勢を極度に悪化させ、世界を核破局の淵に立たせている。われわれはこうはっきり断言できる。それと同時に、平和は守り抜けること、戦争による破滅は宿命的なものではなく、避けられることを確信している。ソ連の指導者は再三にわたって、無思慮な侵略性に対する人間の理性の勝利を信じる発言を行った。A・クロムイコ・ソ連外相は特に第37回国連総会で、国際舞台でのソ連のすべての行動は、現在および未来の世代を戦争の災厄にまき込まれないようにする必要があるし、することができるという、強い信念によって鼓舞されていると述べた。

このように、人類を覆う危険を確認する一方で、この危険を避けることができるという確信がはっきり示されているが、そこに矛盾がないだろうか？　全然矛盾はない。ソ連は世界平和を守る約40年間の闘争経験を踏まえて、破局を防止できると言っているのである。40年間にワシントンは、何度もわれわれに核兵器を使おうと考えたし、力と強圧の言葉でわれわれと話す誘惑にかられた。しかしこれらの計画は実現の運びにいたらなかった。米国の冒険主義につねに対抗してきたのが、ソ連の軍事力であり、ソ連の平和政策であった。この平和政策から国際緊張緩和の運動が生まれ、そしていまも平和政策はデタントの諸原則を維持する保証となっている。

ソ連にとってデタントとは、軍拡競争の抑制を実際の行動によって助長しようとする恒常的な意図であり、公正で相互的基盤の上で相互信頼をしだいに深め、それにもとづいて安全を強化しようとする意図である。こうした実際の行動、歴史的に大きな意義をもつ行動こそ、核兵器を先制使用しない義務を一方的に負うことにしたソ連の決定である。この行動はソ連の軍事戦略の防衛的性格を改めて証明したし、ソ連の「軍事的脅威」にかんするウソを再度覆した。

第37回国連総会でソ連は、核兵器のあらゆる実験の即時中止および禁止に関する問題を出し、「核兵器実験完全全面禁止条約の基本条項」および「核戦争の脅威を除去し、核エネルキーの安全な開発を保障するための努力を倍加する」決議案を国連の審議にかけた。われわれの新しいイニシアチフのねらいは、すべての新しい型とシステムの核兵器の開発を阻止し、戦略情勢を不安定にする動きにストップをかけることとである。

ソ連の新しい提案は、ソ連共産党第26回大回で承認された一九八〇年代の平和綱領を実現するための努力の組織的な継続、発展であった。このような政策が世界中の何億という人々の支持を受けないわけはない。これは明らかだ。

結局のところ、地球の未来に対するソ米両国指導者の見解を対比しなければなるまい。なぜならモスクワと違ってワシントンは、破局が避けられうるという信念を表明しないばかりか、核戦争を「容認できる」と主張しているのである。実のところ米国の軍事戦略全体と核先制攻撃の米国の「権利」、核戦争での米国の勝利の期待は、先の主張を前提としている。ペンタゴンは米国のこうした勝利のために、何千万という欧米人が犠牲になってもかまわないとさえ考えている。

ワシントンはこうした戦略を宣伝するとともに、平和運動参加者たちの要求を退け、そんな連中はモスクワの宣伝にひっかかった屑どもであるときめつけている。レーカン大統領は最近の演説の中で、米国の核兵器凍結運動は「米国を弱めようとしている連中がそそのかしているものだ」と述べた。米国のニューヨーク・タイムス紙は、大統領のこうした言葉を「マッカーシズム」、「虚報」であるとしたが、まったくそのとおりだと思う。米国の政策の無分別さこそ、米国の安全を弱める危険をはらんでいると言いたい。

☆　☆　☆

ある〈道化者〉が
むかしむかし、
ウィリアム・テルに言った
とさ
「ほら、ここにリンコがあ
る。きょうはこれを的にし
よう。息子はどこだ？　ガ
キをここに連れてこい！
見せてもらおうじゃないか、
射手の胆っ玉が大きいか、
それともやはり小さいか…」

ウィリアム・テルよ、
見えるか、ぼうやの頭の上
に、何の的が置いてあるか。
あの伝説の日々とあの時の
胸騒ぎは、いまはもう遠い
過去になったが、
〈道化者〉は別人に変わり、
〈リンゴ〉も別のものに変
わった…
たが、何度も証明されたよ
うに、

剣で脅すことに長け、
平和を戦争で破壊しようと
する者は、
ウィリアム・テルよ、
そのための代償として、
自分の首を差し出すことに
なる。

詩　スタニスラフ・センジュコフ
イラスト　L・ベロフロフ



アレクサンドル・イワノフ氏のその後の生活

アレクサンドル・フラトキン ㉓

今回はアレクサンドル・イワノフ氏とその家族の日常生活についての新シリーズ第23回目、最終回。前シリーズは一九七九年に一年間にわたって本誌に連載された。主人公アレクサンドル・イワノフ（愛称サーシャ）は38歳で、モスクワの工作機械工場の調整工。妻のアンナ（愛称アーニャ）は34歳で、地区診療所の看護婦。息子ペーチャは13歳で、10年制中学校7年生。娘カーチャは8歳で、2年生。一家には犬のスチョーパがいる。

新年をまえにしてのイワノフのモノローグ

もちろん、言ったところで始まらないが、時間は何と速く過ぎて行くことか！　すでに読者の皆さんとは4年間のおつき合いになったが、最初にお会いしたのがきのうのことのように思われる。この間、あなた方は私のこと、私の家族のこと、友人のことをたくさん知っただろうと思うが、残念ながら、私はあなた方のことをほんの少ししか知らない。日本についての本を何冊か読んだだけだ。

私たちは皆さんを実にいろいろな所へご案内した。あなた方は私の家で、私の愛する妻アーニャ、心配性の母アントニナ・ニコラエブナ、せっかちで好奇心旺盛な子どもたち——息子ペーチャと娘カーチャ、さらには私たちの忠実な友——犬のスチョーパとも仲よしになった。私たちの家で最も親しい友人たち——研究所に勤めるイリーナとその夫で私の工場の技師ビクトルに一度ならず出会った。あなた方は私たちの家計のことも、私たちがどのように平日や休日を過ごしているか、何に熱中しているかも、何に喜び、何に悲しむかも知っている。私たちは一緒に幼稚園へカーチャを迎えに行った。幼稚園からの帰り道、カーチャが自分をなぜパパとママの結婚式に呼んでくれなかったのかと聞いたことを覚えているだろうか？　私が足を骨折して1カ月ほど入院したとき、あなた方は病院に私を見舞ってくれた。一緒に店や市場で買い物もした。子どもたちと一緒にクレムリンや国民経済成果博覧会も見物した。私が共産党員候補に認められたときの党員集会や労働組合の職場委員会の会議にもあなた方を招待した。一緒に土曜労働に参加して、モスクワ・オリンピック用の屋内スタジアムの建設も手伝った。ほとんど丸1カ月、黒海沿岸の休息の家で休暇を過ごし、泳いだり、甲らを干したり、ダンスやスポーツに興じた。マイカーでスズダリへも行ったし、工場の仲間と列車でレニングラードへも行った。モスクワ近郊のすばらしい場所を訪れたり、アーニャの友だちの結婚式や革命記念日のパーティー、新年のパーティーにも出席した。

長々と並べ立てたことをお許し願いたい。ただ私は、お別れするまえに若干総括したかったのだ。それが当然ではないだろうか。

こんどは近い将来の計画と遠い先の計画について少しお話ししよう。

私は今月起こることを日にちまで正確にお話しすることができる。なぜなら、もう年末なのだから。2、3週間たつと、モスクワっ子たちは店をまわって、身内や友人たちに贈る新年のプレゼントや食卓を飾るご馳走を探し求める。ヨールカ（クリスマスツリーに似た新年の飾り木）やそれに飾るオモチャを売る場所には行列ができる。12月末には第2学期が終わり、約2週間の冬休みが始まる。わが家では、子どもたちを冬のピオネール・キャンプに送り出す。私たちは子ども抜きで、少しばかり休暇を楽しむ。これは内証だが、子どもから解放されて、ほっとする。もちろん、冗談、冗談。3日もすればもう退屈し始めるのだから。

間もなくアーニャは新年の晴れ着の準備を開始する。今回はイリーナとビクトルの別荘で新年を迎えることに決まった。彼らは25日から毎晩別荘へ行って、建物を暖めて乾かすことにしている。私たちが行くころには暖かく、快適になっており、木や針葉樹の葉の匂いが漂っていることだろう。すばらしいでしょう？　だって、あたりは真っ白な雪の世界。黒い空からゆっくり雪が降り注ぎ、物音一つ聞こえない。耳鳴りがするほどだ。別荘の庭には飾りつけられたヨールカが雪に打ち込まれて立っている。夜、私たちはシャンペン・グラスを手に持ってヨールカのまわりに立ち、新しい一九八三年のために乾杯する。それから別荘の中へもどって、ご馳走を食べ、それぞれ一人ずつのためと全員のために、地上の平和な空のために乾杯する。ダンスをして、歌って、おしゃべりして。翌日はぐっすり眠って目を覚まし、スキーを履いて森へ行く……。

これが近い将来の計画だ。

遠い将来の計画は？　行く行くはアーニャが医科大学を卒業して、小児科医になる。子どもたちは進級する。3年後には新たな問題が起こる——ペーチャが普通教育学校を終えるから、その後どうするかを決めなければならない。恐らく、大学へ進むだろう。彼は勉強するのが好きだし、成績も悪くない。入るとすれば、いずれにせよ技術と関係のある大学だろう。カーチャは、私の考えでは、近いうちにフィギュアスケートで悪くない成果を収めるはずだ。いろいろな競技会に出て、私やアーニャを喜ばせたり、はらはらさせたりするだろう。次は私自身のことだが、生活に大きな変化はないと思う。夜間大学に入るのはもっとあとのことになるだろう。だから、すでに言ったように、今後のことはまだ流動的だ。私の知るかぎりでは、私は作業班長に任命されるようだ。私は断らないだろう。お分かりですか？　私の場合もすべては順調というわけだ。

ほかには何か？　マイカーがあるから、家族全員でこれからもあちこち旅行するだろう。私たちは旅行するのが好きだ。来年は、たとえば、みんなと一緒にバルト海沿岸へ行き、タリン、リガその他の都市を見て来たい。ついでに言えば、バルト海沿岸にはすばらしいキャンプ場やモーテルがたくさんある。休日には必ずモスクワの近隣の州へ出かけよう。

というわけで、わが家の計画は勉学の面でも、仕事の面でも、レジャーの面でも盛りだくさんだ。望むらくは、それをすべて実現するための時間と健康に恵まれること、そして、それを挫折させるような事態が何も起こらないことだ。

それでは、ロシア風にみなさんの手を握って、永遠の別れではなく、再会を期待しよう。多分、またお会いできるだろう。

みなさんに、よい新年を！　そして平和とご幸福を！

日本向けモスクワ放送の時間と周波数

A＝'82年11月1日から'83年3月5日まで
B＝'83年3月6日から

放送時間（日本標準時）	7：00～7：29 A	7：00～7：29 B	18：30～18：59 A	18：30～18：59 B	19：00～19：59 A	19：00～19：59 B	20：00～20：59 A	20：00～20：59 B	21：00～21：59 A	21：00～21：59 B	23：00～23：59 A	23：00～23：59 B
周波数（メガヘルツ）		11.81		15.45						15.45		15.24
	9.78	9.78		12.01						15.24		11.81
	7.34	7.23		11.81	左		左			12.01	7.34	
	7.17	7.17	9.69	9.69						11.81	5.94	
	6.11			9.54	に		に		9.69	9.69	1.25	1.25
	5.96	5.96	7.34						9.54	9.54	0.72	0.72
	1.25	1.25	7.26		同		同		7.34		0.63	0.63
	0.72	0.72	7.15						7.26			
			5.96	5.96	じ		じ		7.15			
			5.94						5.96	5.96		
			1.25	1.25					5.94			
			0.72	0.72					1.25	1.25		
			0.63	0.63					0.72	0.72		
									0.63	0.63		

戦災都市の国際連盟

本誌記者 アレクサンドル・イグナトフ

平和を求める諸国民の運動に新しい隊列——国際戦災都市・英雄都市連盟が加わった。

10月15―17日、フランスのベルダン市で新しい都市連盟創立のための国際大会が開かれた。この国際都市連盟の創立メンバーは10都市——バストーン（ベルギー）、コベントリー（英国）、クネオとマルツァボット（イタリア）、ビルツ（ルクセンブルグ）、カラブリータ（ギリシャ）、ワルシャワ、マドリード、ベルダン、ボルゴグラード（もとのスターリングラード）だった。以上10都市の代表者とソ連、オランダ、ユーゴスラビア、イタリア、フランス、ドイツ連邦共和国、ベルギー、チェコスロバキアの他の25都市の代表団が国際都市連盟の規約を承認し、世論へのメッセージとベルダン・アピールの二文書を採択した。ロレーヌ地方のベルダン市の名は第一次世界大戦における大勢の死者を象徴している。ここ、市を取りまく丘、モーゼル川のほとりで四〇万人のフランス人が戦死した。

新しい都市連盟の初代会長にはベルダン市長のルネ・ビニエロン氏が選ばれた。副会長はニコライ・ペチェルスキー・ボルゴグラード体育大学学長・ボルゴグラード市ソビエト代議員。ボルゴグラードは戦争の辛酸をなめつくした都市だ。

都市連盟創立と同時に、ソ連からはボルゴグラードのほかにも、ヒトラーの侵略に対するソ連国民の戦争で特別の役割を担ったスモレンスク、キエフ、ミンスクが加入した。

創立大会には多くの国際機関の代表や著名な社会活動家も参加した。広島と長崎の市長からも総会にあてて祝辞が届けられた。

コベントリー市長のE・ウェイバー氏は、「世界情勢は最近、著しく緊迫化した。この原因の一つはデタントを挫折させようとする国際反動の執ような試みである。米国製新型ミサイル・核兵器の西欧配備計画は非常に危険である」と述べた。

「軍拡競争は戦争の危険をはらんでいる。今われわれは新しい一〇〇〇年紀に携えていくものの基礎を築いている。まず真っ先に軍縮について考えねばならない」——ベルダン市長はこう発言した。

大会では、都市・地域の非核ゾーン宣言に賛成する世論の運動の地理的な枠が広がっていることが指摘された。つい最近、一九八二年の初めに発生したこの運動は、すでに全世界で支持を得ている。現在、欧州、米国、アジア諸国（日本も含まれる）の幾十もの都市自治体がすでに、自分のまちや地域を核兵器から解放された地帯と宣言している。

創立大会の参加者に承認された決議には、「あらゆるレベルで平和擁護と軍縮のために積極的な行動を展開し、若い世代に平和のための闘争、他民族に対する敬意、各国間の協力の精神を植えつけ、自由と平和の勝利のために自らの生命を投げうった人々の事跡を偲ぶ」ことの必要性が指摘されている。

採択文書はまた、時は待ってはくれない、速やかな行動が要求されていると強調している。特にこれは現代、一部の国が国際紛争の解決の手段としてますます戦争に訴えるようになっている時代には焦眉のことである。

大会出席者は各委員会で、平和保持のために戦災都市が取らねばならない可能な措置を討議した。予算審議の際の国会への代表団の派遣、青少年に友好の精神を教育すること、連盟都市間の協力、貿易・相互理解強化に対する共同歩調——これらが会議開催中、ベルダン市で話された事柄である。閉会後の記者会見でニコライ・ペチェルスキーはこう述べた。

「地球の生命のために払われた犠牲についての記憶は、新たな戦争の脅威に反対する闘争で人類を助けなければならない。ここからおのずと、この国際都市連盟が担う課題が出て来る。この課題の本質は、反戦闘争、戦争準備反対の闘争、戦争ヒステリーの挑発に反対する闘争のために戦争についての記憶を保存することに帰する」

ベルダン会議には実にさまざまの信念を持ち、政治的所属も異なる人々が世界の多くの国から参加した。国際反動がとっている、デタントの挫折と核戦争準備の方針がもたらしかねない結果に対する地球上のあらゆる誠実な人々の懸念を、この大会はいま一度示した。

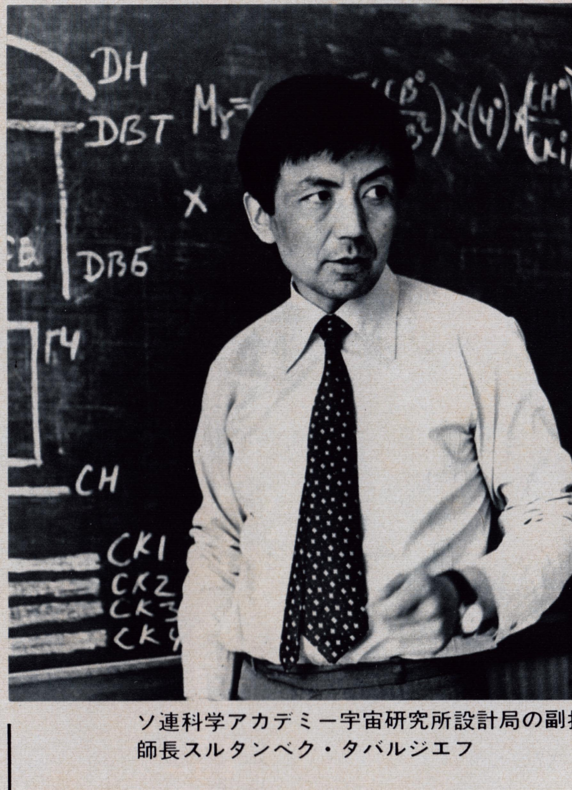


フランスのベルダン市で行われた国際戦災都市・英雄都市連盟の設立大会の行事から。フランスの参戦軍人がベルダン市周辺戦没者慰霊碑から運んできた永遠の火でたいまつに点火するソ連のリズノワ・スモレンスク副市長（右）と英国のウェイバー・コベントリー市長。

キルギス共和国で開発される宇宙機器

本誌記者 ビクトル・ルデンコ

中央アジア、テンシャン山脈のふもとにあるキルギス共和国については、ことしの本誌9号で特集したが、本号ではこの共和国の首都フルンゼで活動している時代の最先端を行く設計局を紹介しよう。ここはソ連科学アカデミー宇宙研究所（モスクワ）の設計局で、宇宙機器の開発と製作に携わっている。ソ連の軌道ステーション、惑星間ステーション、人工衛星に搭載されたキルギス共和国製の装置は、宇宙のナゾの解明、地球の再発見に役立っている。



ソ連科学アカデミー宇宙研究所設計局の副技師長スルタンベク・タバルジエフ

地上でのテストの時、近く宇宙へ打ち上げられる予定のその装置は、遠心運動機から投げ落とされた。大きな遠心力が装置を防護壁へ文字通りめりこませた。宇宙研究所のフルンゼ設計局のスタッフたちは、ちょっとショックだったようだが、すぐさま自分たちの開発した装置を点検した。この装置のために彼らは何晩も眠らずにがんばり、何カ月も入念な作業を余儀なくされたのだった。点検の結果、装置は作動することが分かった。ただ、装置の中身をカプセルに固定している数本のサスペンションのうち2本が損傷した。この欠陥はその後、構造を強化することで解決された。

いま話している装置というのは、金星大気の測光器で、これは一九八二年3月に金星を探査した自動ステーション「金星13号」と「金星14号」に搭載された。この装置が金星着陸の際、地球の重力の一六〇倍もある過荷重に簡単に耐えたことは全く当然だ。

「装置が壁に当たった時、過荷重は金星の場合よりもはるかに大きかった」——設計局副技師長のスルタンベク・タバルジエフは語る。「もちろん、われわれとしても、自分たちの装置をあんなテストにかけたくない。しかし、どんな偶発的事態が生じるか、分かったものではない。装置が立派にテストに合格したということは、驚くべきことではない。なぜなら、われわれの仕事の最大の難点は、自分たちの開発した製品が宇宙でどういう事態に遭遇するか、明確な知識を持っていないということだ。だからわれわれは何重にも〝保険〟をかけ、知識不足を高い信頼性で相殺することを余儀なくされている」

設計局の技師長ウラジーミル・フークスは次のように語った。

「金星探査に参加する装置の開発では、さまざまな問題を解決しなければならなかった。というのは、これらの装置の中には降下カプセルの中で測定をすることになっているものもあったし、直接、金星大気の中で測定する予定のものもあったからだ。つまり、ある装置は着陸時の過荷重だけでなく、五〇〇度Cと一〇〇気圧という条件に直面したのに対し、他の装置は過荷重だけに耐えればよかった」

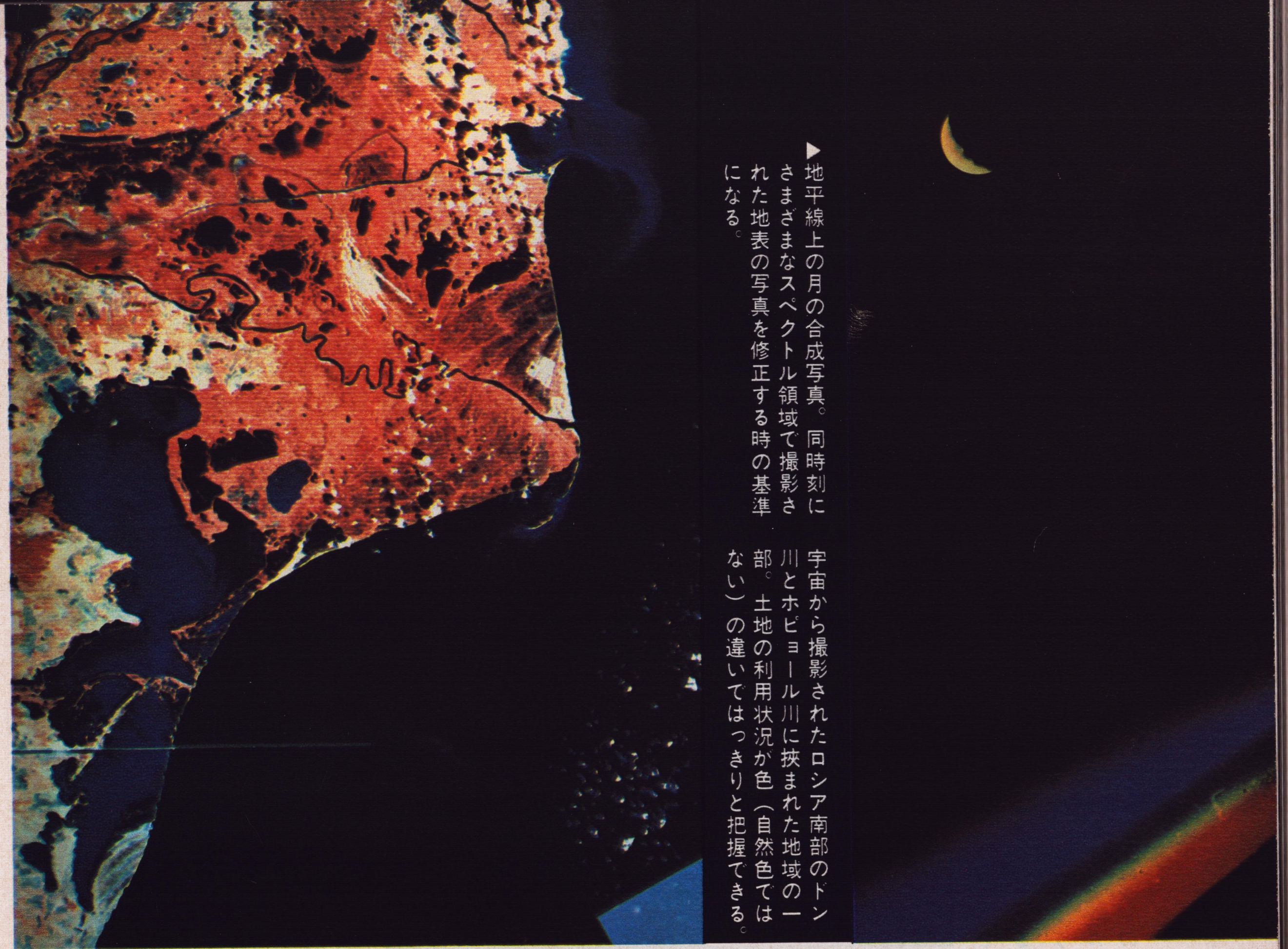
設計主任のスタニスラフ・イグナチエンコが後を続ける。

「金星大気測光器は三つの基本的なコンポーネントで構成されていたが、この高温の惑星の厳しい条件にさらされたのは、測光器の視野方向、つまり鏡のスキャナーを変えられる装置だった。化学的に極めて侵食性の高い環境下で（金星大気中には硫酸まである）、この条件に耐え、しかも性能を落とさないようにするには、鏡のコーティングをどうするか？　また、鏡をどのようにして動かすか？　ベアリングにするか、スリーブ軸受にするか？　その場合の潤滑剤は？　何しろ、気圧も気温も物すごいからだ」

タバルジエフ副技師長が付け加える。

「しかし、降下カプセルの内部あるいは外部のどこで作動しようが、それとは関係なく、われわれの装置が備えていなければならない共通の性能が幾つかある。それはすでに述べた信頼性のほかに、コンパクトであること、最小のエネルギー消費で高い効率をあげられることだ」

しかし、フルンゼで設計された装置は、単に地球から近い天体の研究用だ



▶地平線上の月の合成写真。同時刻にさまざまなスペクトル領域で撮影された地表の写真を修正する時の基準になる。

宇宙から撮影されたロシア南部のドン川とホピョール川に挟まれた地域の一部。土地の利用状況が色（自然色ではない）の違いではっきりと把握できる。

けではないし、応用的な宇宙開発用のものだけでもない。人間の宇宙への進出は、古典的な天文学、地理学のような古い科学の発展に新しい地平を開き、地球とその資源を新しい目で見ることを可能にした。

強力なガンマ線望遠鏡は、フルンゼの設計局で最近製作された機器の中で最も複雑で高価なものの一つだ。人間の身長の2倍もあるこの装置は、人工衛星で使われることになっている。この望遠鏡の設計主任ミハイル・ドブリヤンは語る。

「宇宙の遠くからくるガンマ線は、地球の大気圏の外でなければとらえられない。大気がガンマ線の防護壁になっているからだ。ガンマ線は、物質が極値的に遠い距離にある宇宙での核プロセスの時に発生する。われわれの望遠鏡は、これまで最大だったものより5倍も強力なので、宇宙についての知識を広げてくれるものと期待している。この望遠鏡の開発にあたっては、フランスのサクレにある核研究センター電子物理学局の専門家たちと協力した」

フークス技師長がさらに付け加えた。

「恐らく、キルギス共和国の首都フルンゼは、世界のこれほど多くの言葉で宇宙研究の問題が討議されているアジアでただ一つの場所だろう。ここで開発された多くの装置は外国の科学者や技術者たちと共同で、特にインターコスモス計画のワク内で設計されたものだ。協力は入手された情報の共同利用も見込んでいる」

その実例になるのが「フラグメント」実験だ。「フラグメント」は宇宙研究所の実験室長ゲンリフ・アバネソフの指導で、フルンゼ設計局のエドアルド・ロジャフスキーのグループが開発した人工衛星スキャニング装置。

すべての自然対象は、目に見える波長と目に見えない赤外線の波長で電磁波を反射する。「フラグメント」はこの電磁波をキャッチする。病気にかかった森林は健康な森林とは違った波長の電磁波を出し、少しでも汚染された水はきれいな水と、やせ衰えた土は肥沃な土と、それぞれ別の波長の電磁波を出す。地球の上を飛ぶ人工衛星から振り子のように揺れるスキャナーで幅90kmの地表を調べることによって、「フラグメント」は1昼夜の間に、通常の方法では数年もかかる作業をすることができる。例えば、この装置は広大な水域での漁業資源の評価、広い区域の地質学的評価に威力を発揮する。「フラグメント」で入手されたデータは、東欧の多くの国で広く利用されている。

設計局のスタッフには、いろいろな民族の出身者がいる。スルタンベク・タバルジエフ副技師長はテンシャン山中のイシク・クリ湖地区に住むキルギス共和国では詩的で含蓄に富んだ伝承で知られる部族の出だ。タバルジエフはレニングラードで高等教育を受けた。エドアルド・ロジャフスキー設計主任はウラルのスベルドロフスク市出身で、同地の大学卒。しかし、設計局で働いている専門家の大半はもうフルンゼ工業大学の卒業生たちで占められている。

金星大気の測光器、ガンマ線望遠鏡、「フラグメント」などの装置はみな、フルンゼの設計局員にとってはもう過去のものだ。現在、ここでは近く太陽系に入ってくるハレー彗星の尾を研究する装置の開発に取り組んでいる。ハレー彗星はあるいは自分の秘密をあかして、われわれが住む世界について新しい知識をもたらすかもしれない。

青春の息吹を伝える絵画展

ユーリー・サベンコフ



マドンナの生命のために

……木陰に立つ幼児を抱いた若い美人。風になびく髪。手にした野花の束。背に太陽を受け、さわやかで、感動を呼ぶマドンナ。

すがすがしい田園詩だ、と皆さんはつぶやくだろう。だがその右横の絵に描かれている、細かく分断された平和の破片、狂気と絶望は、わが地球の不幸を表すかのようだ。戦争の恐ろしい顔――その戦争をもたらすのは帝国主義である。すでに爆薬は余りにも多く蓄えられており、平和はいつ爆破されるかもしれない。だから何千という人々は軍拡競争の狂気に宣戦を布告し、「われわれはこの平和を両親から受け継いだのではなく、子供たちから借りたのだ」と声を大にして言っている。いま階層や見解、信教の異なるさまざまな人々が、マドンナとその幼児の命を守るために団結している。現代世界で調和をめざすのは、極めて困難なことであり、モスクワの若い画家I・テベリョワとV・アルラシンの3枚続きの絵『地球に平和を』は、そのことを物語っている。この絵はことしの夏モスクワの中央展示場で開催された美術展「国の青春」のシンボルとも言うべきものだった。

「国の青春」展はソ連の青年の最大の組織であるコムソモール（共産青年同盟）の第19回大会を記念したもので、出展作品数は絵画、彫刻、デザイン、ポスター、工芸、舞台美術など二〇〇〇点にのぼった。ここでは油彩について話そう。

探求の雷雨

「国の青春」展に出品された絵画の流派や傾向、民族的伝統はさまざまだった。画家た

◀N・コチェトワ（モスクワ）『私の海原』







右下　N・ヘルケラーゼ（グルジア）『山の部落の祭り』

左上　A・ロパトニコフ（ウクライナ）『ツィオルコフスキー。カルーガの風の日』

左下右　N・ガイドゥーク（モスクワ）『リーザの部屋』

左下左　G・ボロダイ『画家アレクセイ・ベネツィアノフの思い出』







ちは、それぞれ自分の個性を出している。情熱——その反対の禁欲主義、思い切った表現——そして古典的な抑制。周りの世界の形態の豊かさは、さまざまな造形的処理、時には複雑な観念や象徴を生み出している。画家たちはよく単純さや自然性を求めている。「創作の世界では構想、形象、美、光、苦しみ、愛、探求の雷雨がつねに荒れ狂っている」とは、絵画が好きだった作家コンスタンチン・パウストフスキーの言葉である。

会場では論争の花が咲き、ほめる人もあれば、けなす人もいた。ある人は思い切った色彩に反対し、またある人は穏やかすぎる筆致に抗議の声をあげた。絵に分別くささと冷たさを感じて、失望していた人々もいた。要するに無関心な人々はいなかったのだ。

絵は何を語っているのか？ 人間や人間の精神界、創造労働について語っている。この展覧会の作品は20世紀の大建設場の日常、南北の風景、新婚早々の若夫婦、愛、平和を語り、スポーツ、学習、休息を語っていた。

絵はよい感情を目ざませ、人間に対する信頼、人間の理性を吹き込んだ。

海は簡単には放してくれない

……屋根の上の子供が貝殻の歌にじっと聞き入っている。まわりには漁師小屋、網、カモメ。水平線には太陽と空気の青い空間が光っている。題名は『私の海原』。

こめかみに白髪のまじった背の高い、がっちりした男が、目を少し細めて、絵に見入っている。画家や船員たちはよくそんな見方をする。初めその背の高い男は何となく無愛想に見えたが、あとで物思いにふけっていて、そう見えるのだと分かった。彼は事実船員だったし、遠洋航路の船長だった。長い航海暮らしのすえ、陸(おか)に〝上がる〟ことになり、いま海運省で働いている。

彼はソ連極東のウラジオストクで生まれた。ウラジオストクは最大の大陸と大洋が出会うところであり、ここではすべてが海の息吹に包まれている。海はこのまち、そしてプリモーリエ「沿海地方」と呼ばれる地方全体に生気を吹き込んでいる。私の頭にそのとき、ウラジオストクでよく聞いた「海はそう簡単に放してくれない」という言葉がよみがえってきた。

「人が空間を感じるとき、その人は幸せですよ」と彼が私の思いを絶った。

「いや、やはり彼は陸にいるのは一時のことだ」——彼の声の断定的な調子と悲しげな目に浮かぶ海の招きをとらえて、私はそう考えた。



上右中左　I・チェヘリョワ、V・アルラシン（モスクワ）　地球に平和を



下　L・フロリコワ（タシク共和国）　トシャンへの祭日の前日

鋭い歴史感覚

多くの画家の絵は、ありきたりの生活描写を避けたいと望んでいること、生活現象の哲学的認識に心引かれていることを物語っている。

グルジアの画家D・オクジャワの『建設場の青年』は、現代人の世界観、つまり現代人にとって自分たちの労働の創造物は、森林や海と同じくすばらしいという考えを、表現しようとしている。

他の画家たちは「自分たちは電撃的な反応や想像を絶するスピードの時代に暮らしている。だから見る人にほっと感ずる機会を与えたい」と言っている。その絵の例がバルト海沿岸地方の夏の暑い日の美しさであり、亜麻を刈り取っているベロルシアの広大な畑である。

観客は見慣れたもの、日常的なものを、新たな、覚めた目で見た。『リーザの部屋』のおもちゃは、じっとわれわれを見つめ、画家に閉じ込められたわくから出たがっているかのようであり、何か簡単で重要なことを告げたそうである。少女のリーザの姿は画面には出ていないが、われわれはリーザの子供らしい心くばりの善良な世界を感じとることができる。

……白髪の老人が自転車でわれわれに向かって突進してくる。風で帽子は吹っ飛び、神秘な空に消えてゆく。背後にはこの老人の大胆な構想と思考から誕生した未来のロケットが浮かんでいる。もちろんこの老人はロシアのまちカルーガの学校教師コンスタンチン・ツィオルコフスキーである。独学の学者である彼のロケット技術と宇宙飛行学の分野における研究は、時代に先がけた。「人類はいつまでも地球にとどまってはいない。初めはおずおずと光と空間を求めて大気圏外に出たあと、太陽周辺の全空間を征服する」

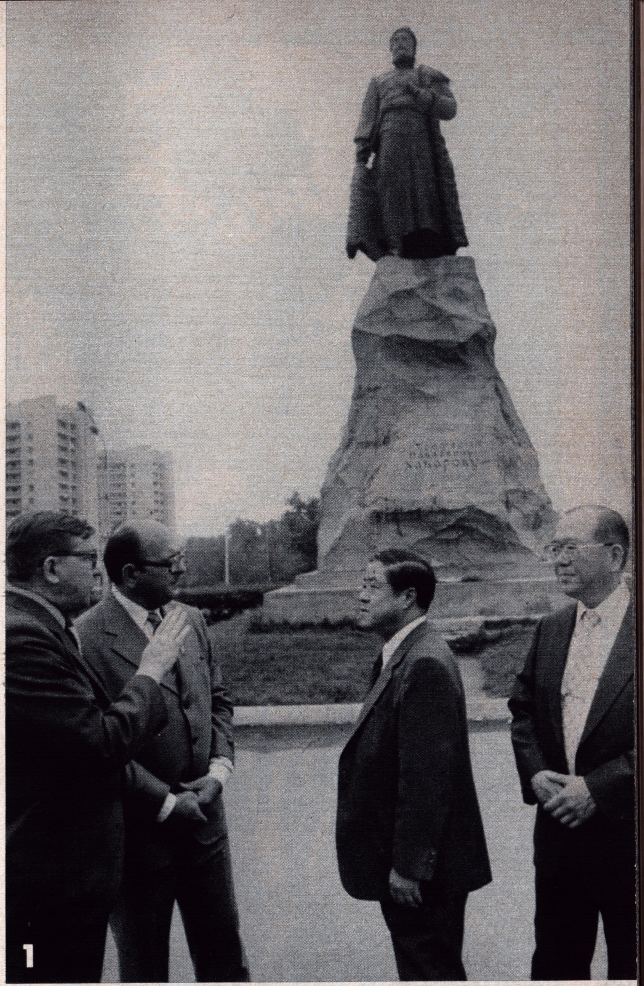
この絵のまわりにはいつも観客がむらがっており、とくに学童たちに人気があった。

オデッサの画家A・ロパトニコフの絵『カルーガの風の日』に、ツィオルコフスキーが現れたのは、偶然ではない。「国の青春」展に出品した大勢の若い画家たちは、鋭い歴史感覚を身につけている。これもこの展覧会の特徴の一つであった。農婦を描いた19世紀の有名なロシアの画家A・ベネツィアノフの数人の人物が、G・ボロダイの絵に登場している。これは模倣ではなく、自国の歴史的過去に加わっていることの確認、芸術の美術的伝統がずっと引き継がれているという認識にほかならない。

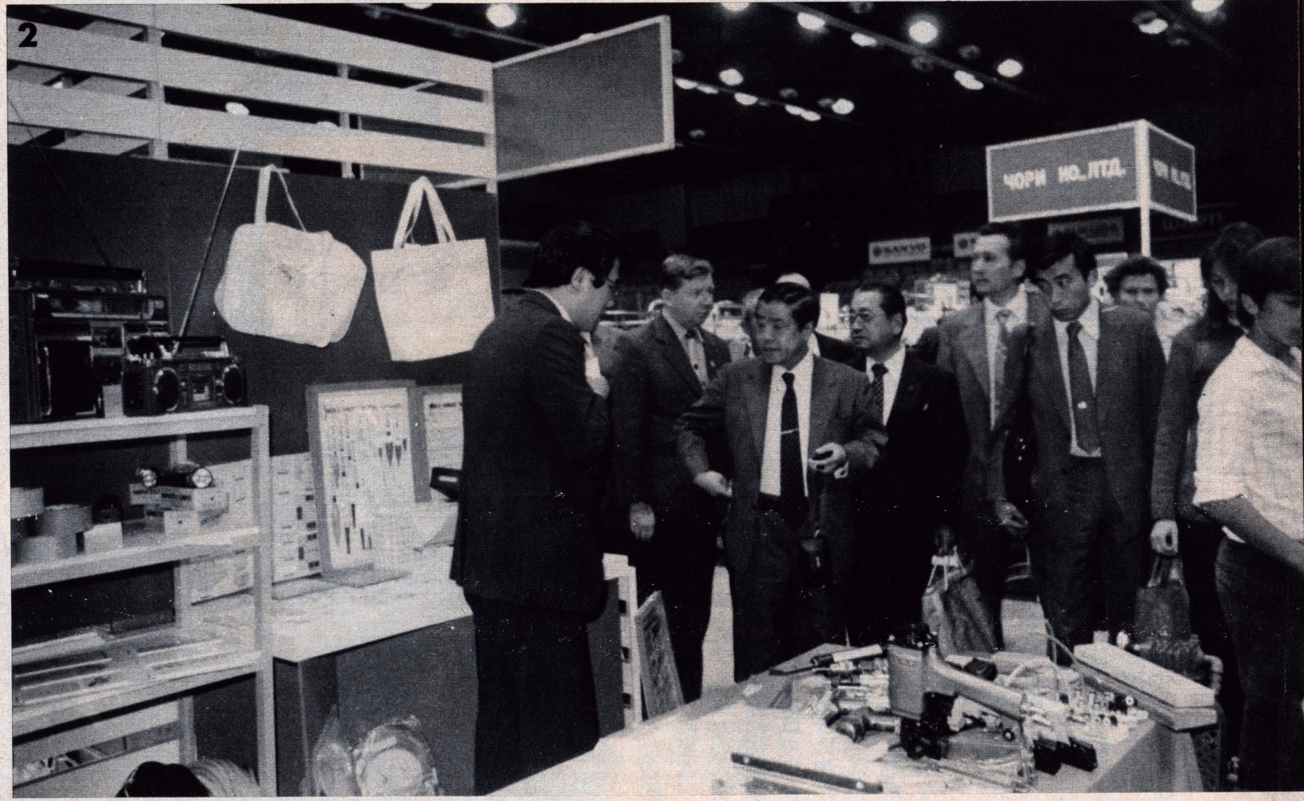
革命後に育った画家たちは、美術の伝統を受け継いでいる。戦争を知らない人々の世代は、戦争の経験を自分なりに考えており、過去を描くとともに、未来を考えている。過去なしには、未来はないからだ。

ハバロフスク地方と兵庫県の強まる友好

本誌極東駐在記者　エブゲニー・ブガエンコ
カメラ　Y・ドベルニク



1　ハバロフスクのエロフェイ・ハバロフの銅像前で。左からチュトリン通訳、ブチェンコ・ハバロフスク地方執行委員会副議長、三木氏、新銀氏。



2　ハバロフスクの沿岸貿易日本商品見本市を訪れた代表団一行







3　サルイキン・ハバロフスク地方執行委員会第一副議長（左端）と会う代表団

4　ハバロフスク市内を散歩する（左から）V・ブチェンコ・ハバロフスク地方執行委員会副議長、三木氏、通訳のV・チュトリン。

5　アムール川の岸辺で昼食をとる。

ビクトル・ブチェンコ・ハバロフスク地方執行委員会副議長（副知事）は、兵庫県代表団の来訪をハバロフスク地方と兵庫県の友好を前進させる新しい一歩と評価した。

ハバロフスク地方訪問兵庫県代表団は8月下旬、同地方人民代議員ソビエトの招きで訪ソし、ハバロフスク市に7日間滞在し、ユダヤ自治州も訪れた。一行は三木新一・兵庫県出納長（団長）、尾崎治・日ソ協会兵庫県連合会副会長、新銀順市・神戸市兵庫区長、今中日出雄・神戸商工会議所理事、田中重海・兵庫県外務課主査の5名。

ピョートル・サルイキン、ビクトル・ブチェンコ・ハバロフスク地方執行委員会両副議長、アレクサンドル・パンチェンコ・ハバロフスク市長（ソ日沿岸市長会議長）、ミハイル・ダニロフスキー・ソ日協会ハバロフスク支部理事長らが代表団と会ったほか、商工会

議所支部での会談、各界代表との懇談、企業視察などが行われた。

代表団はハバロフスク地方内のユダヤ自治州に2日間滞在し、ワルドゲイム村の〝レーニンの遺訓〟コルホーズ、ビロビジャン市の縫製工場を見学した。セルゲイ・ドゥワキン・ユダヤ自治州人民代議員ソビエト議長は、ユダヤ自治州は一九三四年5月にユダヤ人勤労者の要望により設置され、極東南部の未使用の土地が分け与えられたと語った。移住してきた人々には機械、設備、建築資材、資金が提供された。

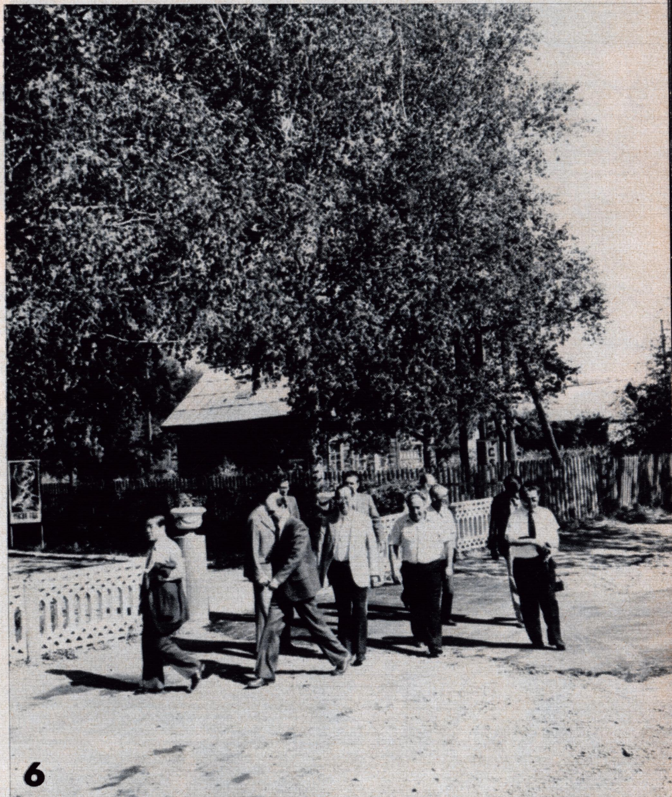
ユダヤ自治州訪問の印象について三木団長は記者に次のように語った。

「私たちは人々がここで創造的、建設的な労働に携わっていることを確信した。みんな愛想がよく、にこやかだが、このようににこやかにできるのは生活に満足している証拠だと言える。事実、何の不足もないようだ。会って話している時、皆さんはイスラエルのレバノン侵略を非難し、シオニストたちとは無縁だし、何の関わりも持ちたくないと強調した。ここの人たちと話していて、みな自分たちの工場や農場で平和に働きたいと思っていることがわかった」

その後ハバロフスクでの記者会見で三木団長はこう述べた。

「兵庫県とハバロフスク地方の友好関係は13年間続いている。私たちは経済、





6　ユダヤ自治州ワルドゲイム村の「イリイチの遺訓」コルホーズを訪問した代表団一行

7　ユダヤ自治州「イリイチの遺訓」コルホーズ本部で

婦人、スポーツ、文化などの使節団を交換したし、兵庫県の子供たちはハバロフスク郊外のピオネール・キャンプでソ連の子供たちと過ごし、知事を団長とする県民の〝友好の船〟もソ連極東を訪れた。兵庫県ではますます多くの県民が、ソ連全体やハバロフスク地方との友好の拡大に努めていることを強調したい。

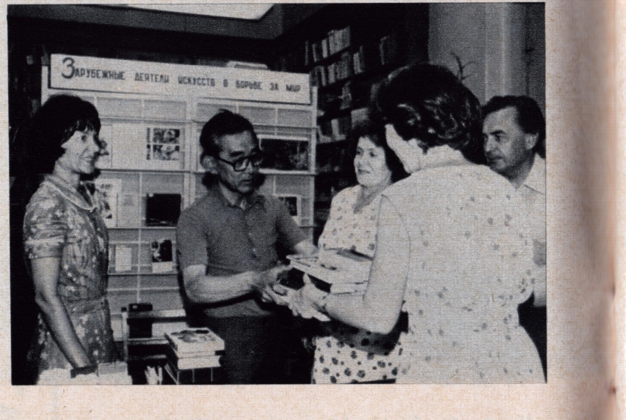
私はハバロフスクは初めてだが、ソ連の人々は平穏に暮らし、明日という日を信じ、建設的労働に励んでいるという印象を受けた。

ここは気候がきびしく、土壌が農業開発に向かない。日本に比べてとても条件が悪いのに、盛んに建設が行われ、新しい土地が開発されている。聞くところによると昨年豪雨で畑が冠水し、また今年はひどい干ばつだったそうだが、それでも農民たちは成功を収めている」

尾崎治氏は次のようにつけ加えた。

「私は何度もソ連を訪れているが、西側でさかんに書かれているソ連人の侵略性の具体的な例など、一度もどこでも見たことがない。ソ連の人々は平和を愛しており、親切だ。今度来て乗用車の数が目立って増えたこと以外、ハバロフスクの中央の通りには特別変わったところは見られなかった。しかし町はずれでは美しい住宅団地が鋭意建設中だった」

ハバロフスク学術図書館の日本語文献



ハバロフスク地方学術図書館外国図書部を訪れて、日本の図書を寄贈する広田富雄さん。

ハバロフスク地方学術図書館はハバロフスク市の中心部の古くて大きな建物の一つにある。蔵書は二〇〇万冊以上。ソ連のどの出版所も新刊の図書、パンフ、雑誌を一、二部必ずここへ送ることになっている。市民なら誰でもこの図書館に登録でき、ソ連の他の図書館と同じように無料で本を借りることができる。

アリビナ・ミレーニナ外国図書部長は語る。

「外国図書部はこの図書館の最も大きい部の一つで、世界の50の民族の言語の本や雑誌が四万冊以上あり、その中にはルネサンス時代の人文学者エラスムスや古代ギリシャの詩人ピンダロスの作品の古い版、芥川龍之介、ジャック・ロンドン、ディケンズ、ハイネ、シラー、マーク・トウェイン、ジュール・ベルヌ、モーパッサンら外国作家の本がある。これらの多くは日本、米国、英国、フランスなどの大手出版社が発行したものである。現代日本文学では安部公房、大江健三郎、井上靖、堀田善衛らの作品がある」

外国の観光客やさまざまな代表団の団員たちも図書館を訪れており、時にはここでソ連や外国の文献を調べ、研究してゆく人もいる。

外国語を学びたい人たちのために、図書館は辞書、教科書、初歩の読み物を提供している。日本語学習者にとくに人気があるのは、日本の伝説やおとぎ話のほか、東京で出版された絵本『雨の日』シリーズの揃いである。長沼直兄編の『プラクチカル・ジャパニーズ』もよく読まれている。

図書館ではいろいろなテーマの図書展が時々開かれているが、そのひとつ「広島の熱い灰」図書展では、広島、長崎の被爆に関する日本とソ連の多くの出版物が展示された。

閲覧者の読みたい本がハバロフスクにない時は、図書館は必要な本または雑誌記事のコピーをモスクワの外国文献図書館やソ連の他の図書館から取り寄せることができるが、閲覧者はその郵送料を負担しなくてもよい。

ハバロフスクでは日本語の本を読める人は、やはりヨーロッパの言語、とくに英語のできる人に比べて多くはない。従って日本図書のコーナーはあまり大きくない。このコーナーは、一九六七年の日ソ両国民の平和と友好ハバロフスク集会に出席した日本の労組代表が持ってきて、図書館に寄贈した八〇〇冊以上の文学書、辞書、便覧から始まった。それ以後、コーナーの蔵書数はかなり増えた。図書館は日本語の本の大半を国費で購入しており、他の一部はハバロフスクの市民が個人の蔵書を寄贈したり、またハバロフスクを訪れた日本人が寄贈してくれたものである。

東京・港区役所の元職員の広田富雄さんは、一九八二年7月にハバロフスクを訪れ、日本の辞書、図鑑、文学書など20冊を寄付し、次のように語った。

「何度もソ連観光に来ているが、来るたびに人々の生活がよくなり、経済や文化の成果があがっているのを感じる。ソ連の人たちは順調に社会主義を建設しており、世界平和を守るために全力を尽くしているようだ。

私は日本人とソ連人が、両国民の平和と繁栄のために友情を固めることを望んでいる。そのために日ソ両国民は、お互いをよく知り、お互いの文学、文化、芸術を知り、よくつきあうようにしなければならない。私の寄贈した本が、このけだかい事業に幾らかでも役立つことを期待している」

劇団文学座記念公演

『桜の園』

――話題を呼んだ和田豊演出

松竹株式会社演劇部　寺川　知男

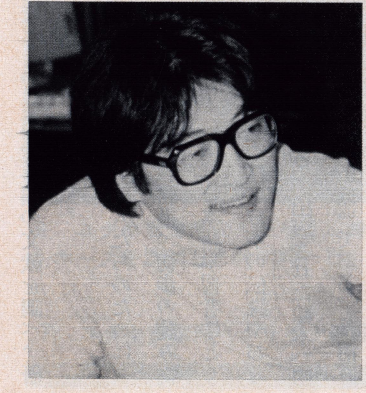


文学座公演の『桜の園』の舞台から

チェーホフ最高の傑作である『桜の園』が十月の東京池袋・サンシャイン劇場で上演され話題を呼んだ。

日本の観客は、チェーホフの作品が好きで、今まで数多く上演されているが、こんどは創立四十五年を迎えた劇団文学座の記念公演で、名女優杉村春子がはじめてラネーフスカヤ夫人の役に扮するのと、ヨーロッパで活躍している気鋭の演出家和田豊の演出ということで注目され人気を集めた。

和田豊はチェーホフに憧れてモスクワの国立演劇大学に留学してから、すでに十八年経ち、いまはパリの国立演劇学校コンセルヴァトワールの助教授として教鞭をとるかたわら、最近ではベケットの『ゴドーを待ちながら』をパリ郊外の劇場で演出し、日本へは、このところ毎年夏に里帰りしてアルブーゾフ作『ターリン行きの船』『古いアルバート街の物語』やシェイクスピアの『リチャード三世』を演出しており、こんどが四本目の演出。彼はソ連演劇教育の最高学府であるルナチャルスキー演劇大学で、スタニスラフスキー・システムで有名な今年八十四歳のクネーベル女史の薫陶を直接に受けただけあって、チェーホフの演劇世界には、ことのほか明るく、うってつけの今回の演出といえる。八月六日に来日してから稽古に入り、スタニスラフスキー・システムや、彼がパリで一緒に仕事をした世界的演出家ピーター・ブルックの演出方法をとり入れながら、約二カ月の稽古を行って十月三日に初日を開けた。



演出の和田豊さん

杉村春子が、和田豊の演出でラネーフスカヤの役と取り組んでみようと決心したのは、和田豊が、戯曲の言葉から出る芝居を大切にするセリフ第一主義ということに共鳴したからで、「改めて台本を読み直してみたら、やっぱりチェーホフの傑作だということがよくわかり、ごく普通の人間が喜び、悩み、絶望しながら生きてゆく姿がチェーホフの中に巧みに描かれています。たしかに翻訳劇ですからロシアと日本の国民性の違いはありますが、芝居に出てくる人物は、人間の持っている感情を同じように表現していますから違和感はまったくありません。ラネーフスカヤの役は東山千栄子さんが当たり役にしていらっしゃって、私には、これまで縁遠い作品という感じだったのですが、私は和田さんの解釈通りに、ごく普通の可愛いい女、誰からも好かれる女として表現したいと思っています」と語っていた。



初めてラネーフスカヤに扮した杉村春子さん

サンシャイン劇場の舞台は、客席三列分を張出し舞台にしたほか、左側の客席を削って花道にし、パリから帰って来るラネーフスカヤ一行、また再び桜の園を去ってゆく一行を象徴するように、花道を多用して効果を高めている。

ロパーヒン役には、さきごろ評判の『アマデウス』でモーツァルト役を演じた江守徹が迫真的な演技を見せ、ことし八十歳になるフィールス役の三津田健や、二十二歳の研究生で大抜擢されたアーニャ役の篠倉伸子ら、何世代かにわたる文学座の充実した俳優陣が隙のない舞台を作りあげた。

『桜の園』はストレツレルやシェルバン、ブルックなど新しい演出で評判になったが、こんどの和田演出は、あくまでも俳優を前面に押し出し、奇をてらった演出方法を排している。見終わった観客の声をきくと「各人物の関係が非常にわかりやすい感じ。いままでわからなかった点を納得できた」、「《桜の園》を二時間でカットなしで上演するとはびっくりした。しかも早口言葉ではなく、セリフがききとりやすい」、「こんな俳優があんなに違った面を出せたかと不思議だった。翻訳（和田豊）もこなれていて面白く見られた」と率直な意見が見られた。

文学座の俳優たちにきいても「和田さんは、とにかくロシアの歴史もチェーホフの作品もよく理解していて、わかりやすく説明してくれた。稽古は即興劇の手法などを取り入れて自然な演技を引き出してくれたので、とくに若い俳優たちはすごい新鮮な演出を感じた。毎日、稽古場では立ったままの姿で十時間もやる体力にはびっくりした。日本人の演出家には見られない新しいタイプの演出家」と、好感をもって迎え入れられたようだ。彼自身も「こんどは現代語に近い言葉で上演したいので翻訳も自分でやった。チェーホフの精神に沿った舞台を作りたい。喜劇性、悲劇性、情緒劇とそれぞれ当たっている部分だけを強調するのではなく、そのワクにとらわれないで表現するところにチェーホフの芝居の豊かさがあると思うから。人間は誰しも自分自身に〝桜の園〟を持っている。人間の夢の象徴としてとらえたい」とその演出意図を語っている。

この『桜の園』がサンシャイン劇場で公演中、ちょうど、モスクワから、初の訪日演劇視察団（マールイ劇場総支配人兼俳優のソ連人民芸術家ツァリョーフ、モスクワ芸術座主任演出家兼俳優のソ連人民芸術家エフレーモフ、エルモーロワ記念劇場主任演出家兼俳優のロシア共和国人民芸術家アンドレーエフら一行六人）もこの舞台を観劇して、出演者たちと会食した。

和田豊は、演劇を学んだ第二の故郷ともいえるモスクワの芸術座で、安部公房作『奴隷狩り』を演出する話も具体的にすすんでいる。とにかく、文学座公演の『桜の園』は日ソ演劇交流という点で、一歩前進した将来への展望を見せた舞台だったといえる。

（写真＝松竹提供）

ソ連から第2回「美の親善使節団」



東京の文化学園大ホールでのショー

11月3日から13日まで、北海道日ソ貿易協会、株式会社日ソ貿易、学校法人文化学園などの招きでモスクワ全ソ・モード会館のモデル4人をはじめとする「ソ連美の親善使節団」（団長＝ガリーナ・アントーノワ・ソ連軽工業省縫製工業発展局長）の一行7人が日本を訪問した。一行は東京、名古屋、京都、水戸を訪れ、ファッションショーを開いたり、縫製工場を見学したり、日本のファッション専門家と意見を交換したりした。

東京では11月5日、渋谷区にある文化学園大ホールで、昨年5月の第1回目につづく第2回目のファッションショーが催された。今年はソ連邦結成60周年にあたることもあって、多民族国家にふさわしい民族色豊かなデザインが各種紹介され、またスポーティーなファッションを中心にソ連のさまざまな最新モードも紹介された。

草の根会の国際キャンプ報告会



報告会で山本会長を囲んで記念撮影をする草の根会の子どもたち

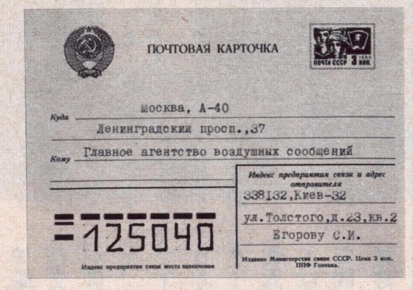
この夏ソ連のアルテク（クリミア半島）・ハバロフスク両国際ピオネール・キャンプに計27名を参加させた北海道の草の根会（山本ミナ子会長）は、10月10日、札幌市婦人文化センターでキャンプの報告会を行った。あいさつに立った山本会長は、「あなた方は一カ月のキャンプ生活を通じてソビエトの人たちが平和を強く望んでいる事がよく理解できたと思います」と述べ、核のない平和な世界を築くためにみんなで力を合わせるよう訴えた。

「キャンプに参加した子どもたちも、「キャンプに参加して多くの友だちができた」「こんどはロシア語の通訳として行きたい」「ソビエトの人はとても人なつこい」「8月6日の原爆のことを、私たちよりソ連の子どもや指導者の方がよく知っていたことに驚き、教えられた」等々、自分たちが得た感想を報告した。

第86課（続き）

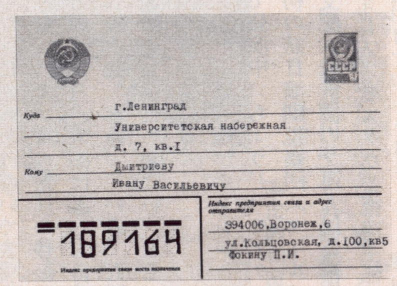
封筒の宛名書き

2）　国内通信公用封筒の見本（なお、ソ連の国内通信では、封筒の左下に6ケタの郵便番号を記入することになっています）



3）　国内通信個人宛の封筒の見本（封筒2種）





最後に祝賀の手紙の文例をいくつかご紹介します。ソ連では家族の祝い事だけでなく、国の大きな記念日にもお祝いの手紙を交換します。

新年

С Но́вым го́дом, Оле́г Алекса́ндрович!
ス ノーヴィム　ゴーダム　アレーグ　アレクサーンドロヴィチ
Пусть бу́дет он ми́рным, счастли́вым, до́б-
プースチ　ブージェト　オン　ミールヌィム　シチャスリーヴィム　ドーブ
рым! Жела́ю от всего́ се́рдца здоро́вья и бла-
リム　ジェラーユ　アト　フセボー　セールツァ　スダローヴィヤ　イ　ブラ
гополу́чия.
ゴーパルーチヤ

新年おめでとう、オレグ・アレクサンドロビッチ！　新しい年が、平和で、幸福で、良い年でありますように。健康とご無事を心からお祈りします。

国際婦人デーの手紙

Дорога́я　На́стенька!
ダラガーヤ　ナースチェニカ
Серде́чно тебя́ поздравля́ем с пра́здником
セルジェーチナ　チェビャー　パズドラヴリャーエム　ス プラーズニカム
8-го Ма́рта, пра́здником весны́, цвето́в и со́л-
※　マールタ　プラーズニカム　ヴェスヌィ　ツヴェトーフ イ ソー
нца! Жела́ем мно́го сча́стья и ра́дости, кре́п-
ンツァ　ジェラーエム　ムノーガ　シチャースチヤ イ ラーダスチ　クレープ
кого здоро́вья и больши́х тво́рческих успе́хов.
カヴァ　ズダローヴィヤ　イ　バリシーフ　トヴォールチェスキフ　ウスペーハフ
Кре́пко целу́ем и обнима́ем.
クレープカ　ツェルーエム　イ　アブニマーエム
Твои́ И́горь и Ни́на.
トヴァイー　イーゴリ　イ ニーナ

親愛なナースチェニカ！

春と花と太陽の祭日、国際婦人デー、心からおめでとう！　幸せと喜びと健康と創造的仕事のご成功を祈ります。

強くキスし、抱きしめます。

あなたのイーゴリとニーナ

メーデー，戦勝記念日

Уважа́емый Никола́й И́горевич!
ウヴァジャーエムィ　ニコラーイ　イーゴレヴィチ
Поздравля́ем Вас с междунаро́дным пра́зд-
パズドラヴリャーエム　ヴァース　ス メジドゥナロードヌィム　プラーズ
ником 1 Ма́я и Днём Побе́ды!
ニカム　※※マーヤ イ ドニョム　パベーディ
Жела́ем успе́хов в рабо́те, большо́го ли́-
ジェラーエム　ウスペーハフ　ヴ ラボーチェ　バリショーヴァ　リー
чного сча́стья, кре́пкого здоро́вья!
チナヴァ　シチャースチヤ　クレープカヴァ　ズダローヴィヤ
Коллекти́в заво́да
カレクチーフ　ザヴォーダ

尊敬するニコライ・イーゴレヴィチ

メーデー、戦勝記念日おめでとうございます。

お仕事におけるご成功とご多幸と健康をお祈りいたします。

工場従業員一同

旅行者用ロシア語会話シリーズは本号をもって終わりとします。長いあいだのご愛読を感謝します。

※　ヴァシモーヴァ　　※※　ペールヴァヴァ

この会話シリーズでご紹介するロシア語の旅行者用単語や表現は，1979年にモスクワのルースキー・ヤズイク（ロシア語）出版所（著作権者）から単行本として発行されたS・ネベーロフ著の会話帳が底本になっています。この会話帳の購入ご希望の方は，ソ連図書専門店の「ナウカ」（郵便番号171東京都豊島区南池袋2−30−19，電話03−981−5261）または，「日ソ図書」（郵便番号112東京都文京区水道1−5−16，電話03−811−9190）にお問い合わせ下さい。

今日のソ連邦

一九八二年12月15日号

昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集　ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3—9—13・電話03—447・3536）
印刷・発行所（株）新時代社（郵便番号101・東京都千代田区西神田2—7—2・電話03・263・2811）

定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）